
魔眼の使徒

VATA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔眼の使徒

【Zコード】

N1363V

【作者名】

VATA

【あらすじ】

神界 魔界との邂逅により魔法を使役する（魔眼）保持者が世界に溢れ やがて大きな争いに発展する。

戦後 理想の世界を実現する為に作られた 学園都市を舞台に 自らの存在を掴み取るために運命に立ち向かう 少年少女たちの物語

処女作なのでマイペースでの投稿になります。PV1万オーバーしてました。ありがとうございます。

キオク

記憶

過去の事は今ではよく思い出せない・・・いや思い出したくない。自己防衛とも思える本能的な考えは、過去の記憶に霞がかつたように曖昧にしていた。

それは自分にとって最も苦しい記憶 最も悲しい記憶 最も辛い記憶・・・判っていた。

それを言い訳にして 過去からずっと逃げていることを。そして逃げられない事も。

しかし 今の自分では過去と向き合つことが出来ないでいる。・・・

・・・そう 私はまだ弱い存在だ。

だから 過去を振り返らない・・・いえ 振り返れない・・・そりやつて逃げ続けている。

それでも・・・今でも夢に見る事がある・・・

あの暗い闇夜 私以外誰もいない部屋 人払いの結界

鏡に映る自分 手に握られたカッターナイフ 意思の籠つた（眼）
苦痛から逃げ出す為に、強く強く決意した夜。

カッターを持つ手が震える。いつも使っている黄色いカッターだまさかこんな事に使うなんて夢にも思わなかつた。震える右手に左手を重ね 恐怖を押し込めようと力を込める。深く息を吐くと更に力を込めた。

その手がゆっくりと顔に近づいてゆく……

(怖い…怖い…でも…)

それ以上に私は自分の「」の「眼」が嫌い！…だから…だから…決意したんぢゃないかっ！

固く眼を閉じる…「」の手を後ろ…押し出せば…私は…私は変われるのだろうか？

あの辛く苦しい毎日と決別出来るのだろうか？そしていつも思い描いていた日常を手に入れる事ができるのだろうか？

「…………？」

違和感を感じて そつと頬に触れた。指には濡れた感触…涙…

いつの間にか私は泣いていた…

ただ…静かに…

(何故泣いているのだろう？「」の眼に愛着が？)

それは無い 私はすぐにその思考を否定した。

「ああ…そうか…」

それは産んでくれた両親に対する罪悪感…「」んな私をここまで愛してくれた事への感謝…両親だけは私が「」の苦難を乗り越えられると信じててくれた。…この行為は その両親の思いを踏みにじる裏切りとも呼べる行為だ。そう考えると 涙が止まらなくなつた。

(今なら…まだ…)

あれほど悩んだ筈なのに今更…

どれだけ泣いただろうか？不思議と心は穏やかだった……再び眼を閉じる……

その決意は固かつた。再び眼前にカッターを構え眼を閉じた・・・

もう 手は震えていなかつた・・・

「駄目だよ」

瞬間手首を掴まれた。眼を見開くと隣には、見ず知らずの男の子がいた

「…あなた……誰っ？！」

この部屋には誰も居なかつた……いや入れる筈がない！！人払いの結界は強力だ・・・ましてやドアには二重結界があつたはずだが？！

「駄目だよ」

彼のその言葉に様々な思考が吹き飛んだ。いま私は他人と対峙している・・・この（眼）で！！

再び恐怖が沸き上がる。足が震えている・思考を維持出来ない・・・この「眼」を見られている！私にとつて一番の恐怖を感じる瞬間だつた。部屋全体が揺らぐ・・・不安定な心が結界を不安定にしていた。その様子を見た彼は手をすっと振り上げた 途端に室内は安定する。

（一重結界）結界内に同質の結界を張る 高度な技術だ。

それを確かめた彼は彼女に向き直る。相変わらず彼女は怯えた表情でこちらを見ていた。

その瞳は……

「綺麗だね」

私の瞳を見据えたまま彼はそう言った。彼女は一瞬何を言われたか理解出来なかつた。

そう言われたのは……初めてだつた。その言葉は彼女を傷付けるものではなく

忌み嫌うものでもなかつた。彼自身の素直な感想そのものだつた。

「凄く……綺麗だ」

もう一度そう言った。自分の存在を初めて認められた気がした。その感情は胸の奥に渦巻き やがて溢れだす。押し寄せる感情は彼女の決意を打ち砕き 押し止めた感情が涙となつて溢れ出た。

私はただ 彼にすがり声を上げて泣いた。怒り 悲しみ 全てを大粒の涙が押し流した。

恐怖ではない 悲哀でもない これは歓喜の涙なのだ

「それは君だけの瞳」

落ち着いた私に彼はそう告げた。幼子を諭す様に。大切な事を優しく そして強く 語りかけた。

「そして君だけの力」

優しく手を重ねた。

その温もりが彼の言葉の意味を私に理解させる。

「でも……」

彼は手をそつと離すと 私の顔を真っ直ぐ見つめた。その言葉の先をただ静かに待った。

「その瞳が君を苦しめているなら……助けてあげるよ」
「本当に？」

思ひもよぎぬその言葉に反応してしまつ……そんな彼女の反応に彼は微笑んだ。

「じゃあ……君の……を……」「……」

風景がぼやけむ……記憶はこつも此処で終わる。

ハジマコノウタ

「あ

『覚めた私の目の前にはイリュのまぬけた顔があった。
ちらりと壁の時計を見る。6時30分 今日もぴったりの時間だ。
再び視線をイリュに戻す。

「…何してるの?」

「あははっ…その…紫音があまりに可愛いからつこ…(▼艶▼*)」

ベッドに眠る私の上に四つん這いになつて居るイリュ 第三者が見ればあらぬ誤解を受けることは間違いなさそうだ。…………それはとても困るのだけど。枕元からベッドが悲鳴にもにた軋み声をあげた・・小さなこりから使い続けているこのベッドも良くなばつてくれて居る・・

「いや…私はノーマルだから…」

そう言い放つと 彼女の横をすり抜けてお気に入りの水色のカーテンを開けた。既に日が昇り明るい日差しが部屋一杯に広がった。5月の日差しが心地良い朝を告げていた。

「…相変わらず勘が良いなあ…今日この紫音の唇を頂けると…ちつ…」

「…だから…私はノーマルなんだつてば…」

別にイリュが百合つ子な訳でもない。かと言つて 本気で唇を狙つている訳でもない……多分。

毎朝こんな感じで彼女は私のアパートに侵入してくる。まあ せが
まれて合鍵を渡したのは私なんだけど

「紫音は一人で住んで寂しくない?」

急にイリュが呟いた。この後の話の展開がなんとなく読めてしまった。詳しく述べてはいないが……どうやら私を自分の住む寮に誘いたいらしい。こう毎日のように誘い続ける彼女は将来やり手の販売員になれるのだろうな……と感心してしまうほどだった。深いため息をついてから彼女に向き直る。

「またその話?いいの私は一人でも大丈夫」

でもそれは嘘だ本当は寂しい癖に他人との交流が怖いだけ。彼女の寮にも勿論興味はある、それ以外にもやりたい事は山のようにある。あるのだが……人目を気にする余り自分を出せないでいた。そんな感情をさとられないようにクローゼットに向かう。イリュの事を親友!……と思いつながらも自分をさらけ出せないで居る自分が心底嫌になる……

「……私だったら一人なんて考えられないけどね~」

イリュの性格上確かに……と納得してしまった。彼女の周りには常に誰かが居た。それは彼女の性格も成せる業だろうか……世間で言うところのカリスマ性と言つやつだろうか? 人を引き寄せるなにかがあるのだろうか……自分にそんな部分が無いだけに 彼女が一際輝いて見えてしまう……こんな自分も彼女の魅力に引き込まれた一人なのだろうか……

「……私は 大丈夫……」

そう咳く…まるで自分に言いきかせるように。大丈夫…大丈夫…やがてその言葉は自分の波打つ心を鎮めていった。

「なんだか…紫音は無理してるみたい」

イリュがベッドの上に仰向けに寝転んだ。私の白いベッドカバーに彼女の深紅の髪が映えて、そのしなやかな肢体は見るものを引き付ける。私が男性なら間違いないなく ベッドに向かつて飛び込んでいただろ？…いやいや 私も百合っ娘では無いから！

「…そんな事ないよ」

勘が良いのはどっちだよ！と 思わず突っ込みを入れてしまいそうになつた。その反面いかに彼女が私を見ているのか…少し嬉しくもあつた。

「……ふう～ん」

私の応えを聞きながら ベッドの上で妖艶な笑みを浮かべる。クラスメートとは思えない位色っぽいんですけど…何だか同じ年に思えないなあ…彼女は子供っぽい性格をしてはいるが 時折鋭い指摘をする事がある。『偶然言つてみたら当たっちゃつたよ～』的な雰囲気を醸し出してはいるが それこそが作り出されているようを感じてしまつ…考えすぎだらうか？

「……無理はしていないよ」

実際 余り人付き合いの得意では無い私が 不思議とイリュただけは普通に接する事ができた。それどころか、普通以上な付き合

いに自分自身が驚く程だったり クラスにも何とか打ち解けてきている様な気がしている。

「…もう学校は慣れた?」

今度は俯せになり顔を支えると 足をパタパタさせていくようだ…今度は子供っぽい仕草に思わず笑いが零れそうになる。普段の学校生活では見せない一面を 惜しげもなく晒す彼女が 私に対し心を許してくれているのだと 認識出来る瞬間だった。

「そうね……」

少し考えながら田の前のクローゼットを開けると中にはまだ真新しさの残る制服があつた。今の学園指定の制服だ。全体はベージュを基調とした衿と袖が紺色のブレザーの制服を紫音は少し気に入っていた。

衿元のラインは2年生を表す青だ。因みに3年生は赤 1年生は黄色になつていて。

「まあまあ…かな?」

とは言つたものの 実際まだ右も左も解らない事だらけで余裕が無いのが本音だ。

「ふうん…まあまあねえ…」

イリュが意味ありげに呴く…ベッドの軋む音がした…・・・イリュが近付いてくる気配がした。ブラウスを着ていると、背後から伸びた彼女の腕に抱きしめられた。彼女のシャンプーの香りが私を包み込んだ。

「知ってる？男子の間じゃ何かと噂になつてんのよ？イヒヒ」

背後からイリュが耳元でからかうように笑う。実際、からかつてい
るのだからたちが悪い。

「アーニー、お前は？」

軽く彼女の手を払い 鏡台に向かつた。この手の話題を得意としない紫音の顔は湯気が出るほど、赤面していたに違いない。こんな所を見られたら 余計にからかわれるに違いない！ 紫音は必死に顔を伏せて髪をとかした。

「えーつまんないなあ」

イリュがふて腐れた声をあげ再びベッドにダイブする。顔は見えないが、私の態度を見て、満足しているに違いない。そんな被害妄想とも思える考えをしてしまうのは、日頃の付き合いのせいなのかもしれない……などと思つてしまふ。

先にも述べたが、紫音はこういった話題は苦手だった。人付き合いですら悩む様な状態なのに……

恋愛なんて夢のまた夢の話だった。小学校時代に好意を寄せていた男の子が私の「眼」を気持ち悪いと言つていたのを聞いて以来、異性には一線を引いてしまう状態だった。

「紫音は可憐いんだからやあ……もういい……ああ（――――）」

イリュは一人でベットの上で悶々と枕と遊んでいる様だ……発想が才ヤジ臭いな・・・

「……ハイハイ……f^__^;」

適当に流しておぐ。その間に手早く髪を結いあげた。
それよりも自分の方こそこそじうなのよ……と言いたいのが本音だった。
実際にイリューシャはモテるのだ。下駄箱には手紙が山ほど入つて
いたり、声をかけられるなんて日常茶飯事である。その全てを断る
のだから……相手の中には秀才の上級生やアイドルみたいなイケメ
ンが居たとか居ないとか……ふとイリュがこちらを見ていた。

「……なに?」

「今……私がどうとか考えたでしょ?」

妙に勘がいいな

「別に……」

「じゃあ……H口に事だな!」

「違いますっ!」

「ははは……あーっ? またその髪つー今時そんな地味な髪型いな
いよ? 昭和だよっ! 昭和の匂いがするよっ!」

鏡越しに イリュが近付いて来るのが見えた。・・・ 今田はやたら
とつつかかるなあ・・・

「この方が楽でいいんだってば……昭和つて……」

束ねた髪をお団子にしているだけなのだが……本当は目立たたくない
からあえて 地味にしてるだけなんだけど……ね そんなに変か
なあ・・昭和とゆう言葉に少し凹んだ。

「……むしろイリュの髪こそこそじうかしたらい?」

すぐ後ろに立つ彼女の腰まである長い髪を指すくつてみせた。
彼女の髪は手入れが行き届いており 非常に纖細で美しい。街中を
歩いていたら 写真モデルやらないかと声を良くかけられるらしい。
この髪は目立つからねと言つただが それだけでは無い事はこの髪
を見れば明白だった。

「あ？ 私？ やだ… 面倒臭いもん！ それに私はこれ以上可愛くならな
くていいのー！」

「おいおい… そんなんで私に言つのかよ… しかもその言い方に朝か
らテンションが凹む自分が居た。
すいませんね！ 可愛くなくつて！」

ハジマコノウタ2

「…………」

急に静かになつたので ふとイリュに田をやると案の定 何かを期待してこる田でこちらをみていた。時間も時間だし・・・

「……今から『』飯なんだけど…」

「うんうん（^――^）」

既に満面の笑みだ。この先を語るべきか悩んだが・・・

「一応聞いてあげるけど… 食べる?」

「うんうん（^――^）」

絶対に確信犯だ…

イリュを引き連れてキッチンに向かう。引き戸を開けるとそこがリビング兼のダイニングキッチンだ。

最早指定席となつた椅子に座ると いつの間にか用意されていたマイ箸一式を用意する。よくみると

「いりゅ」と刻印までされている一点物だった。

「…………の間に…………」

飽きながらも食事の用意をする。なんだか毎朝一人で食事をしている気がする。まあいいか・・・

料理が出来るまで…この不思議な親友(?)の事を話しておこう。

彼女の名はイリューシャ・ハイヴアリエル 確か・・・なんとか

ニアからの留学生らしい・・・私もその辺は詳しくは知らない。仲間内ではイリュと呼んでいる。 その見た目の美しさとは裏腹に自分の姿を鼻にかけない性格で同性からの人気も高い。 勿論異性からの人気もかなりある・・・・らしいその辺りは紫音自身が興味が無いのでうる覚えだ・・・・それに加えて人懐っこい性格と男顔負けの行動力、その深紅に映える赤毛はインパクト抜群だ。勿論 スタイルも良い。胸とか・・・・どんだけ成長期だよつ！ つて言いたくなるくらい・・・・嫉妒とかじやないからねつ！

それともう一つ・・・・

「？！ちよつと……イリュ！」

ポツトが有り得ない音を立てて沸騰していた。彼女の赤い「眼」が更に深く紅く輝いていた。力を使っている証拠だ。その眼の輝きは神秘的だ。本来この世界に存在しない筈のもの・・・・

紫音の声にイリュははつとする。その瞳から光が消えた。

「『めん』めん紫音のHプロン姿に見とれてた（↙岬↖＊）」

「前回みたいにポツトを爆破しないでよね……」

「手伝いはいいから座つてて……」

「はーい」

イリュは素直にその場で姿勢を正した。どんな理由だよつ！と思いつながらポツトの無事を確認する。どうやら無事の様だ・・・毎回生活道具を壊して引越しをせようとしているのかと思つてしまふ

ところだつた。

彼女のもう一つの秘密・・・そう「魔眼」・・・だ 神と悪魔がもたらした神秘なる魔力の瞳・・・日常生活ではその見分けは付かないが その力を発動させるとその瞳はその姿を現す。彼女の魔眼の色は「赤」・・・炎を司る属性だ。彼女は火を操る「炎の魔眼・深炎の赤眼」の保持者なのだ。彼女は最も強力とされる生まれもつての保持者「ナチュラル」だつた。「魔眼」にも力の差が存在する。彼女の様にナチュラルで強力な魔眼には深炎の赤眼の様な

『固体名・シリアルコード』がある。これはナチュラルにしか存在せず、その属性の上位存在であることを表している。ナチュラル以外にも稀に「コードを持った眼を持つ物が現れることがある。

誕生より有する。

「生まれ持つ者」ナチュラル

成長過程で覚醒する者。

「目覚める者」キアリア

神や悪魔に一時的に力を与えられる者

「囁く者」ウイスパーード

自分の意思とは関係なく憑依される者

「魅入られる者」チャームド

など..力を手に入れる環境に違いはあるが..その差は内包する魔力にあると言われている。

「お待たせ...こんなモノで悪いけど...」

手早く盛りつけた皿をイリュの前に差し出す。それを見てイリュはわあ と声をあげた。

「ううん、私紫音の目玉焼き大好き(^o^)」

今朝は トーストに目玉焼き ウインナーとグーンスープにコーヒー

ーだ。

「いただきまつす」

イリュは合掌するとトーストにかぶりついた。相変わらず見事な食べっぷりだ。しかし 作った者としてはこつも「美味しい」と連呼されて食べて貰えるのは嬉しい限りだ。なんだかんだと言いながらこの時間を喜んでいる自分が居る事に気づく。

過去に転校を繰り返し一人暮らしに慣れている紫音にとつては料理の腕前はその気になれば お店を出してやつていけるであろうレベルであった。

本人にその自覚は無いのだが……

私がこの春からこの学園に転校してきて 一ヶ月… その日のうちに声をかけられた。何度も言うが私は人と接するのが苦手だ。でも… 不思議と彼女とは打ち解けることが出来た。それは…私の決意の為か… それともこの特殊な学園の為か…

しかし一番はイリュの性格のおかげかも知れない。
この事にはとても感謝している。

ハジマリノウタ�

この学園について語るには、まずこの世界について話そう。ここは皆さんの知る 地球 その世界に良く似てるけど…違う世界。そして「魔眼」を知ってるだろうか？神又は悪魔のもたらす神秘の結晶。それが「魔眼」何故そんなモノがあるのかって？それは私も解らないけど……今から200年前にとある科学者チームが多次元断層の解析に成功した……いわゆる別次元……別世界……その実験中に偶然にもこの世界は2つの世界と繋がってしまった。それが 俗に言う天界と魔界

天界……そこは光輝く天使達の……なんてのは聖書の受け売りで私達にはその次元を見ることは出来なかつたらしい。魔界も同様だつたと聞く。天界も魔界もこの世界とは分子構造が違うらしく人間がその世界の構築を理解できない様だ。そのかわり天界人と魔界人がこちらの世界にやつて来る様になつた。彼等は自身の分子構造レベルをこの世界に同期させる事によって 我々にもその姿を見せる事が出来るのだと言う。

彼等は見た目は私達人間と代わり無く普通に喋り普通に食事をした。でも それはあくまで仮の姿

真の姿はやはり羽を持つ“光体”と呼ばれる別次元の存在。この世界ではそれだけの質量を再現できる魔力を持つ者は限られる上に個人での能力は著しく制限されてしまうらしい。そんなリスクを犯してまで彼等にしてもこの世界……特に”科学“は魅力的らしい。

もう一つは 魔界。彼等も人間と同じ容姿であった。中には角や尻尾を持つ者もいたが しかしこれは仮の姿……こちらの世界では先に述べた天界の理由と同じく分子構造の違いにより、実体は人間の目には見えにくいらしい。やはり天界と同じ理由でこの世界に来訪

する者は多い。

二つの世界は仲が悪い……と思われがちだが既に和平に向けて歩み寄っていた。

過去に争いはあつたが 今はそれらは解決しており 現在は良好な関係だと聞いている。

ここにあるトラブルが発生した。

天界からは 「光素」と呼ばれる。魔力の成分が。魔界からは「魔素」と呼ばれる成分がこの世界に流れ込んでしまった。目には見えないが無味無臭 人体に取り込まれても数時間で消滅するため影響は無いと思われていた - - - が 本来 存在しない物質の干渉により

人類に変化が起きた。それが 「魔眼」 だった。

消滅した成分は蓄積されやがて眼球内で結晶化する。

ここまででは変化もなくただ 「魔眼」^{ホルダー}保持者と呼ばれる存在になる… 既に世界の2／3がホルダーだと言う噂すらある。しかし問題なのはここからだつた。結晶化と同様に体内で魔力を生成・内包する能力を身につけてしまつた者… キャリアの誕生である。

「魔眼」

人間でありながら 魔力を生成し魔法を使役する者その属性に応じた 眼 を保持する。

火なら赤い魔眼 水なら青い魔眼 大地の黄色 風の縁など 四大精靈を基本としてその種類は数十にも及ぶと言われている。その多くは魔法を使用出来る様になるが 中には
魔力を戦闘力に変換する（魔闘士）や知力の発達する（魔学士）などがある。

各国はその力を研究し、やがてその力は悲劇を産む。

その力を軍事利用する者とそれを阻止する者の争いが始まり、瞬く間に世界中に飛び火する。

通常兵器を凌ぐその力はやがて危険視されその力を恐れた者達による迫害・紛争…

やがては神界 魔界の2つの世界を巻き込む争いに発展する事態にまでなってしまった。

“神秘なる力を手にした者達はその力に魅入られる”

「魅入られる者」チャームド が各地に誕生してしまった。彼等は本能のままに力を解放し 破壊と殺戮を行つた。最早人類と魔眼との戦いになつていた。

事態を收拾するべく。天界 魔界 二つの世界の入口は「結界」（ゲート）と呼ばれる封印を施された。

これにより 光素 魔素の流入が收まり、魔眼保持者の力は弱まつた。

さらに魔眼保持者の中にも戦争終結を望む者も多く、平和を願う彼らは やがて人類と協力し各地の紛争を沈静化させていった。一部の過激なチャームドを殲滅する事で長引くと思われた戦いも 一年で終結した。

これが 「魔眼戦争」と呼ばれる忌むべき歴史だった。

ここまでが誰でも学校で習う 魔眼の歴史である。

しかし 平和は訪れなかつた。この戦争により各地で使用された魔法により この世界で（魔力分子）が発生し新たなホルダーを誕生させた。 再び魔眼による争いを懸念され、全ての魔眼保持者が忌み嫌われてしまう世界となつてしまつた。彼等への憎悪は迫害殺人 差別 紛争を呼び各地で悲しい事件が多発した。

そんな中 とある企業がこの国の方の一部を買い取り事実上独立を発表

治外法権の指定地域を設立する。暗黒の時代にさした 一筋の光明

であつた。

ハジマリノウタ4

「ユグドラシル」

世界樹の名を冠した地域そのものが学園都市であり魔眼保持者を幅広く受け入れている。もちろん一般人から天界 魔界の魔眼を持たぬの人々も入学は自由だ。ここでは魔眼保持者の教育に力を入れている。その力を有効に活用する人材の育成が彼等の未来に繋がると提唱している。実際 各地の紛争 犯罪は減少傾向にある。各国政府はこれを高く評価し「理想の未来像」や「人類・魔眼保持者の理想郷」などと賞賛する声明を発表し 転入希望者は爆発的に増大した。

しかし紫音は違和感を感じる。理想の未来・・・ 理想郷・・・ ? 一体誰の理想なのだろうか? そもそもホルダーになってしまった時点で理想とは大きく懸け離れてしまっているのだが?

(魔眼をここに閉じ込めてしまえ!) 紫音にはそう言っている様にしか聞こえない。結局 この都市も偽りの自由の姿をした牢獄なのだ。

この学園に来る者の多くは 心に傷を持つものが多い。
ホルダーである彼女も今までの人生を平穀無事に過ごして来たとはお世辞にも言つことは出来ない。

「異端は異端でしかない」

それがこの世界の本質であり 心理なのだ。
人はそれぞれコミュニーンに属する。そのコミュニーンに異端であると判断されれば 緩やかに排除されてしまう。

それは地域であり 学校であり 職場であり 家庭もある。緩やかな排除はゆっくりと異端を追い詰める。そしていつせいに牙を剥くのだ。

それは差別 迫害 暴力 いじめ と名を変えて一方的な排除の波

が押し寄せるのだ。

そして彼らは居場所を失うのだ。　　いやまだそれは命があるだけ　ましなのかもしれない　　・　　・

しかし…そうだらうか？絶望的な考え方の隅に違つ思考が起き上がる
・　　・

一やめろやめろ！また同じ過ちを繰り返すのか？

一たとえそうであったとしても……僅かでも可能性があるなり……

一「ままでもやつやつて……何度も裏切られ！絶望した！

一わかつてる……わかつてる……でも……こんな私でも……必要としてくれる人がきっとどこかに居るはず！こんな私を認めてくれる人がどこかに居るはず！

彼女はそれに賭けてみたのだ。もしも…眼を持つ者が…その存在が許されるならば…そこが約束の地ではないだろうか？そこが本当の理想郷ではないだろうか？この学園の存在を知つてから　幾度となく繰り返された自問自答…答えなんか無い…だから…私はそれを確かめに来た。もう　涙の日々とはお別れだ。

「コーヒーを飲み干すと勢い良く氣合を入れて立ち上がった。

「よつし……！」
「わわつ！ナーナー？！」

イリュが慌ててこちらを見る。私の勢いに驚いてコーヒーを少し溢したらしく。

私の親友に私は最高の笑顔を向ける。

強くなると決めたあの遠い日の約束
れを・・

此処がきっと私の約束の場所！さあ
の場所・・これが私の

それでも逃げ続けた日々に別

始めよう！これが私の始まり

「ハジマリの詩」

ハジマリノトキ1

私は…みやぞのしおん富蘭紫音この春にこの学園に転校してきた。

勿論 魔眼保持者だ…が今は訳あって適合者となつて…私の魔眼については…今は話したくない。

実家は首都圏にあり 普通の家庭 普通の両親の元に生まれ 普通の人生を送るはずだった…

5歳の時に魔眼が発動した。魔眼保持者「キャリア」だと言われた。日常生活に問題は無いと言われたが…

問題だらけだった。

魔眼のお陰で友人と呼べる友人も出来ず…ひたすら他人との接触を避ける毎日…よく引きこもりにならなかつたと自分を褒めてあげたいくらいに普通に学校に通う毎日…お世辞にも楽しいとは言い難い学校生活だった。

色々と苦労を重ね…ネガティブな人生を変えるべく 今回 この学園都市に転入した。

高等部2年とゆう微妙な時期の転入は両親も快くは思つてはくれなかつただろうが

私の意志の固さを知ると条件付きではあるが送り出してくれた。

「……ねえ…毎朝来るけど…イリュの寮は大丈夫なの?」

ドアに鍵をかけながらふと疑問に口にしてみた。ドアノブのセンサーに魔導リングをかざす。指輪が鍵の役割を果たしてドアがロツクされる。この学園都市に住む者には全て支給されている品だ。体内の微量な魔力を認識して本人確認を行う優れモノである。鍵、身分証明、財布等その用途は広い。

「ん? 何が?」

「時間とか……食事とか……」

確か寮母さんがいると聞いた気がした。

「んー 大丈夫なんじゃないかな? 別に何も言ってこないし……」

何だか少し気の毒な気がした。

私の住むアパートは両親が知人の紹介で見つけてくれたものだ。繁華街から徒歩10分 学園には徒歩15分価格の割には中々の立地条件だった。バス トイレ付き 小さいながらもキッチン完備 同じ敷地内に管理人の老夫婦が住んでいる。

日当たりの良い一階の一室を契約出来たのは 幸運であったとしか言いようがない。

なのにイリュが毎朝誘いに来る理由は2つ

一つは私の身を案じての事

イリュ曰く

「私の寮に侵入するには軍隊でも無理! !」

なんだそうだ……

実の所 先日この近辺で謎の爆発事故が起きているから……が本音らしい。

少し嬉しかつたりする。

もう一つは同じ寮生が気に入らない らしい…… f ^ _ ^ ……その割

合は後者が少し高かつたりする。その為か私も首を縦には振らないのだった。

やがて 学園の敷地を表す中世風の石垣の壁が見えた。まるまる都市があるのでからその規模は半端なものではない。暫く進むと校門がある。守衛が一人 常に交代制で在駐している。その脇にある建物は守衛が数人待機しており近隣の警備を行つたりもしている。門は東西南北の四ヶ所にあり更にその中間にもある。計8カ所そ の全てが 守衛と リング認証のセキュリティである。駅の改札口……と言えば解りやすいだろうか？ 基本的には市街地同様に 攻撃魔法は全面禁止である。敷地内で攻撃魔法が使用された場合敷地内に無数にあるセンサーがこれを感知し 直ぐに解除魔法が発動されるらしい。

学校なので魔法の授業は勿論ある。それらの場合は特別な施設を使用する事になつていて。これだけの施設の運営には途方もない費用がかかる…………と思つていたら、意外なシステムが導入されていた。

それは 生徒から魔力を集めている事だつた。魔導リングから情報を受け取り 毎日 一定量の魔力を敷地内で吸収しているのだ。火の魔力は火力や暖房 照明等に……水の魔力は水道 生活水に変換し 使用する。更に余分な魔力は都市に売却され 一般生活にも浸透している。その収益は設備投資や 教員の給料になつていて。勿論 生徒は学費が大幅に免除される事もあるこの学園都市の魅力の一つとも言えるだろう。

門を過ぎた辺りでふと虚脱感があつた・・・がすぐにその感覚は消える・・・

魔力が吸収されたようだ。横でイリュが怪訝な表情をしていた。

「・・・・今日は・・もう駄目かも・・・・」

予想以上に魔力を吸収されたようだ。吸収には個人差がある、イリュの様に強力な魔力の持ち主からは一定量の魔力を徴収するらしい。

学園の説明によれば 魔力の保有量に応じて 1割から2割を徴収すると言っていたが・・・・

「大丈夫？」

余りにも頑垂れる様子に思わず声をかけた。

「・・・嬉しいわ・・紫音・・こんなにも貴女に愛されていたなんて・・・」

瞬間 抱きしめられた。咄嗟の事で回避出来ずその場で悶絶する。がすぐにその戒めから逃れようと抵抗を試みる。

「ちょー私はそんな趣味無いってばーー！」

その結果 公衆の面前でイリュとの朝のふざけあいが再び勃発するのだった。

ハジマリノトキ2

「あらあら……朝からお盛んな事で……」

声の先には長い黒髪の眼鏡つ娘。その見た目からは才女を連想させる。確かにクラスメイトの……

「…萌え田崎さん?」

「（ノヽヽ）まつ…前田崎よつーーー！」

物凄い剣幕で怒られた。後ろでイリュが大爆笑していた。

「『めんなさいっ！いつもイリュが言つてるからてつきつ……』

「……なかなかやるわね」

前田崎は乱れた髪を直しながらそう言つた。隣のイリュはまだ笑っていた。

「紫音…………イイネッ！」

そいつ言つて親指を立てる。

彼女は 前田崎 律子 IT業界では有名な「前田崎グループ」の一人娘で「電腦」の魔学士である。しかしその家柄を振りかざすのを嫌い 今はイリュと同じ寮に住んでいる。

「イリュ……またアリア姉さんに言わずに出掛けたでしょ？」
「あははは……だつて紫音の『飯の方が美味しいんだもん。』

本音はそれだつたのか？

「……それはまあ否定しないけど……せめて一言かけなさいよ。」

「……善処します。」

イリュはわうわう言つて 敬礼した。

「……富園も大変でしょ？こんなのに付きまとわれて……」

「そんな事ないよ。前田崎さんこそ何だか大変そうだね（^――^・）

「……律子でいいよ。私も紫音つて呼ぶから……」しつしてゆっくり話すのは初めてかもね

同じクラスなのにね と彼女は笑つた。

「さて……親睦も深まつたといひでわつたと我がクラスに参りましょ
うか。」

イリュが腕時計を指差し先に進む事を促した。

「初めてこの都市に来た時は流石に驚いたわ。」

列車を待つでホームで律子はそう語つた。まだ馴れていない紫音への配慮だったのかそんな話を始めた。

「……そして、初めて乗った列車は隣の幼稚園に行つたんだよな……

茶化すイリュに睨みをきかせ……咳払いをした。

「時にはそんな事も……ある」

と、同時に魔導列車がホームに滑り込む。校門から数十メートル先は駅のホームになっている。学園内に電車が走る姿は今までの常識を打ち碎くには十分だった。

その理由はこの学園が都市である為 その規模は1日がかりでも全てをまわることは無理と言われている。敷地内を巨大なドーナツと仮定してほしい。その中央が学園の中核部（中央特区）だ。職員棟や総合施設 生徒会施設 各役員会施設 購買施設等がある。周囲のドーナツエリアは大きく4つに区分される。乳児 未就学児 低学年学生服を主に教育する（初等部）通常の中学生 高校生に該当する（高等部）専門学科を専攻する（大学院）更にその筋のエキスパートとして生活する為の（学術院）のエリアに別れる。それぞれのエリアの干渉を最低限度にする為 エリア間は巨大な水路により分割されており 渡航手段は学園内を縦横無尽に走り続ける魔導列車か中央特区から行くしかない。三人は車内に乗り込むと近場の席に座る。行き先は（高等部2-7）となっている。つまりこの列車が高等部のそれぞれの校舎に停車する専用列車である。もちろん動力は魔力で設計 製造は学術院の一部企業が監修している。やがて列車は地下に潜り込み停車した。各校舎の地下がプラットホームもあるのだ。

「じゃあ 私は職員室に寄つて行くから……」

一階上の下駄箱で律子はそう言い残し颯爽と歩き去った。いかにも勤勉で真面目……少々堅いイメージを受ける。企業イメージを意識した部分もある為か 真面目を地で行くタイプ……とはイリュの言葉だ。

「…なんで萌え田崎なの？」

疑問に思っていたことをイリュに聞いてみた。現時点では萌えの要素を感じ取れなかつた。

「んー多分今日帰るまでには理解できると思ひ」

と もう一回疑問な答へで返された。後に 動きをもつて理解するのだが。

「…わてと」

イリュは深呼吸して下駄箱を開くと 同時に数枚の手紙が床に散らばり落ちた。

「…また…か」

そう言つて 首のチョーカーの水晶を触る。 彼女の赤毛とよく似た内部で深紅の炎が揺らめいている様に見える不思議な水晶だ。何があるとこれをいじるのが 彼女の癖だと 最近気付いた。その指は 愛である様に優しく この水晶が彼女にとってどれだけ大事な物か理解できた。

「大切な物なんだね」

紫音の言葉が一瞬理解出来ない様な仕草の後 ようやく紫音の視線が水晶を見ている事に気付いた。

「・・・よく見てるね・・・?」もしかして・・・紫音・・・私の事・
・・」

「いや・・それはないから・・

速攻で否定しておいた。イリュはそれ以上はふざけたことは言わず少し思案した後こうつぶやいた。

「これは・・私と彼を結ぶ唯一の絆なんだ・・・」
「えつ・・?」

予想していなかつた（彼）とゆう単語に激しく反応してしまった。今まで行動と共にきていてイリュの周囲に異性の気配が無かつた上に毎朝のあのやり取り・・・本氣で百合つ娘なのかと思い始める寸前の出来事だった。

「・・・今 百合つ娘の癖にとか 考えたでしょ」

・・・ホントにカンがいいのな・・・

「それより・・・彼つて・・・?」

「言葉通りだよ・・・彼は彼 私の全て・・・だからこれはいらな
い」

拾い上げた手紙の束を宙に放ると 一瞬で炎が上がり灰も残らず消し去った。彼女の様に強力な魔力を持つた保持者は初級の魔法や日常生活においての魔力の使用は予備動作 及び呪文詠唱をキヤンセルできる。高度な使用法や上級魔法になればなるほど呪文は長く複雑になつてゆく。各個人の能力や熟練度が大きく影響するといわれている。先にも述べたように学園内は基本攻撃的な呪文は一切無効化される。今のイリュは火の（燃える）とゆう概念だけを行使したのだ。これは上級魔術師のみが行える
(精霊の使役)による効果だった。……正直凄いな…と感心して

しまつ。

今の紫音には精霊はおろか魔力の安定化すらままならない状態だった。

「さっ…早く教室に行こう」

この話は終わりと言わんばかりに、イリュは紫音の背後に回り込み、その背中を押して行くのだった。今の自分の表情を紫音に見られたくないイリューシャの小さな抵抗だった。

ハジマリノトキ③

「お前達… やつさと席に着け」

一人の女性が教室に颯爽と入ってきた。此処2年B・7組の担任 イングリッド・S・ウルガノフだった。腰まである長い銀髪を二つに束ね、教壇の前に来ると、つり上がった眼鏡の縁を指で押し上げた。その奥に輝く金の瞳は見る者を惹き付ける。手にしていた分厚い本を教壇に叩き付けた。

「お前達は私の言葉を理解出来ないのか？ 席につけ！ 一度も言わせるな！」

見た目からは想像出来ない様なキツイ言葉が飛び出す。その名前にあるように「ド・S」な口調なのである。が本人はこれが普通の話しか方であり、もちろん悪気は一切無い。この世界に来て初めて言語を習つた際に不手際が生じた・・・らしい。魔界屈指の魔導師を代々産み出してきたウルガノフ家の次期当主だ。ちなみに S は正式名称でのみ使用する為 発音はしないらしい。

さて このクラスの男子はこのB・7組に入れた事を誇りに思うらしい。その理由はこのイングリッド先生らしい。全学年の全クラスにおいて天界 魔界からの派遣教師はそう多くない。さらにその中でも若く美しい教師など僅かであつた。そうなのだが イングリッドは若く美しい教師なのだ。次期当主と聞いて 皆むさ苦しいおっさんを想像していたらしい。魔界の貴族でありながら地位や権力などには興味を見せないその立ち振舞いは男子生徒だけではなく女子生徒にも受け入れられた。その見事なプロポーションにもかかわらず 終日ジャージで過ごす事が彼女の信念であるらしい。こちらの世界に来て間もない頃にジャージと出会つてしまい

その機能性と簡便性に衝撃を受けたらしい。魔界の貴族ともなるとそれ相応の格好を求められてしまう。それ以来彼女は一日中ジャージ姿で過ごせる職業を探し教師を選んだ・・・・と聞く。

初めてこの先生と話したときは 正直紫音は泣きそうになった・・・

・いや 泣いた。

「貴様が転校生か？少し顔の作りが良いだけの下等生物めー私のクラスに入ることを後悔させてやるぞ！」

転校初日にガクガクブルブルしていた私に 先生の言葉を通訳（？）してくれたのがイリュだったのだ。

先生のキツイ言葉はその逆の意味である事 本当はやさしい先生である事 ドラなんて言われてるけど 本当は少しMつ氣がある事など教えてくれた。このクラスも新学期初日は全員が鬱になってしまいそうな位の状態だつたらしい。校長の取り計らいで イングリッドの誤解も解け今ではこのキツイ言葉にも 「は〜い」と笑顔で応えることが出来るくらいに打ち解けている。中には身悶える者もいるとかいないとか・・・

「よつしー貴様達！来月いよいよ 『全学級対抗魔術選抜大会』が開催される事となつた！このイングリッドの担当するクラスである以上は敗北は許されない！・・・・しかし だー貴様達虫けらのような連中では予選突破すら出来ないだろう！・・・・そこで これより私自らが魔術についての何たるかを貴様達に教鞭を振るつてやる・・・光栄に思つが良い！」

ばしばしと教壇の上の本を叩く・・・一部生徒から「おおっ」と、どよめきがあがる。 担任なんだから教えるのは当たり前・・・
・・・・ 教えてないのでですか？！

「やべえ・・ついにイングリッド先生の授業が受けられるのか・・・」
「生きてて良かった！！神様！感謝します！」

などと 男子生徒が色めき立つた。・・・・・授業・・・進んでないんだ・・・何だからいつも 助手みたいな人ばかりが講義してると思つてたんだ」・・・あと 先生魔族だから神様に感謝したらまずいでしょ？などと考えると前からプリントが回ってきた。ちなみに私は最左列の最後尾 イリュ曰く『転校生の席』にいる・前の一席はイリュだつたりする。

「・・めんどうなあ」

プリントを渡す際にイリュがそつもらした。・・・ふむふむ・確かに。魔法初期講座から技術講座 魔法戦術講座 魔法実践実習・・普通の授業は無いのですか？

今日からのすべての授業時間が魔法に関するものばかりだった。

「先生・普通の授業は無いのですか？」 そう質問したのは 萌え田

崎・・・いや 律子だった。

「うむ 無い」 先生即答。

「いいか 貴様達！これは全学年対象の決定事項だ！これは大会と称しているが 貴様達の魔眼を良く知るためのものもある。世間からは魔眼はクズの様な扱いを受けてはいるが 使い方さえ誤らなければ人命救助や大きな助けとなる場合が多い。本来魔法とはそういうものだからな。十分に理解 認識していない者が馬鹿な低級悪魔や腐れ堕天使にそそのかされて「チャームド」などになってしまう。これを機会に魔法 魔眼に対する認識を私が生まれてきたことを後悔するほど 親切！丁寧にその体の隅々まで叩き込んでやろうっ！・・・しかし 大会である以上は優勝以外は認めないからな！」

ビシイ!と効果音がつきそうな位のポーズで生徒達を指差した。
・・・ありがたい事を言われている気はするのだが・・・学園の思惑よりも先生の思惑が強く感じるのは何故だろうか?・・・いや気のせいに違いない・・・

「・・・優勝出来なかつた時は・・・判つてゐるな?貴様達」

眼鏡の奥の金の瞳が怪しく輝いた・・・数人の生徒が失神したようだ・・・あんた、ホントに教師かよ・・・

「言い忘れていたが 最近市外で不振な爆発騒ぎが起きてるから巻き込まれるなよ。貴様達は無能だから被害に会いそうで心配ではあるがな!あはははははは!」

・・・心配されてる? ちなみに最後には『この中に犯人がいたら覚悟しとけ』ともおっしゃいました。

・・・・・・・・・・・・

「・・・疲れた・・・」

午前の授業が終わり 昼食時 私は机に突つ伏した。イングリッドの授業は完全魔法主義の魔法による魔法のための魔法講座だった。いやいやいやいやこんなの普通の高校生には理解できませんよ?
『火属性の下級魔法(火球・ファイアボール)を対象に着弾と同時に土属性の下級魔法(防御壁・シールド)で対象を閉じ込めた場合 内部の火力は二乗の効果が得られる。では結界内部で核爆発に匹

敵する熱量を生み出すには、ファイアボールが何発必要か』・・とか『敵から情報を聞き出すために有効な魔法は・A・土属性 中級魔法（棘姫：一ードルバインド）（土中から発生した棘によって対象を拘束する。追加効果：毒 麻痺 上級術者になれば即死効果を付与可能）B・水属性中級魔法（氷足枷：アイススレイブ）（対象の任意の部分（主に手足）を凍結 四肢を封じる 上級者になれば形状を変化させ 小さな槍の様に変化させ手足を地面に縫い付ける事も可能）C・風属性低級魔法（雷縛：ライオットスタン）（瞬間に雷撃を発生させ対象を感電させる（スタンガンの原理））』とか・・・物騒な問題しかないじゃないか！－もうこれは授業ではない・・・訓練だ！そんな私の目の前に突然ジユースが置かれた。・・・びっくりした・・・あぶないあぶない・・・念の為顔を伏せたままおかえりと言つ。

購買でパンを買っててくれたイリュだつた。彼女はたまに「朝飯のお礼」と昼にパンを買ってくれる・・・別にいいのに・・・

「しかし 先生にも参つたわね・・・」

隣の席に移動してきた律子がそう言つた。ついでに『一緒に緒しても？と言われたので 快諾した。 彼女は弁当持参派の様だ。

「そつそつ 趣味を履き違えてるな」

イリュもうなずいてパンにかぶりつく・・・「丸」と高野豆腐・・・なかなか渋いチョイスですね・・できれば別々にお会いしたかつた・・・

「午後の実習・・・やな予感するなあ・・・」

イリュ1個目完食・・・2個目「クリームぜんざいパン」・・・うわ

ああああ 何故クリーム？ 普通あんぱんでしょ？！とゆうか・・・
イリュ食べるの早いわね・・私なんて高野豆腐の汁に悪戦苦闘して
るのに・・・イリュは何故か変り種のパンを買うことが多い。 普
通のパンは食べ飽きたからだと言つ・・・変り種すぎじゃね？と思
つてしまふがここはべつと飲み込む。

「・・・・そうね・・出来れば、魔法は余り使いたくないわね・・・

そう言つたのは律子だった。・・・意外だ・・何でも出来そうな感
じなんだけど、苦手なものもあるのか・・・

「・・・・そうか 紫音は知らなかつたつけ 私の魔眼特性は（博識）
の魔学・・・魔眼は（黒の教典・ブラックバイブル）属性は・・闇

私の疑問を感じ取つたのか 律子がそう告げた。・・・属性闇？そ
れつて・・・

「うん 私は人間と魔族のハーフなんだ」

律子は気にする風でもなくさらつとそつと語った。 実際 魔族 神
族とのハーフは多いだがその多くはそれぞれの能力を引き継ぐ可能
性は低い。 人間界で生まれる為 人間のDNAが勝る・・・とゆう
のが一般論らしいが 細かいことはわかつてはいない。 主な遺伝と
しては 律子のような魔眼を遺伝しその多くは知能レベルを引き上
げる（魔学）か 身体能力を向上させる（魔闘）を発現させる者が
大多数だった。 その中でもまれに魔眼を受け継ぐ者も現れる。 律子
は後者のようだ・・・とゆうことはナチュラルの闇属性か・・・理
論上では魔族と同じレベルだが 体が人間の為きつと力はあまり發
現できないのだろう。

「へえ～そうなんだ」

私は余り氣にしない風に返事をしておく。こいつは特殊な魔眼保持者は相手がどう思うか非常に気にする部分が強い。だからそれが普通であるように振舞うのが一番良い。

そんな私の意図が通じたのか、律子は笑みを浮かべた。だから私も笑み返した。

「ホント 貴女とは仲良く慣れそうね」

律子はそのクールな見た目から想像できないくらいの笑みを浮かべた。・・・・成る程・・・これは萌えちゃうかもね。

しかし紫音が『萌え田崎』の真の意味を理解するのは後日のことであつた。

ハジマリノトキ4

終わった……

午後の特別施設においての実技演習が終わった。いや、色々な意味で終わった。特別施設は各クラス棟に隣接して建てられている魔術戦闘技術の実技演習に使用される競技施設のようないい？物だ。内部は空間魔法により普通の体育祭サイズから国一個分のサイズに変更可能だ。授業内容はバスケットから模擬戦闘まで幅広く利用できる。今回の授業ではイングリッドを中心には半径100メートルの荒野を設定した。内部の設定も平野^{ヒラワカルド}、市街地、森^{シティワールド}などあらゆる実在する風景を再現できる模倣結界が使用され更には激しい戦闘にも耐えられる様に最大最強の多重結界十二使徒の魔鏡がかけられている。この結界は合わせ鏡の様に結界が結界を写し無限に増え続ける為

破ることは非常に困難と言われている。当然それは外からの衝撃ではなく内側からの衝撃に対する話である。

「今からお前達は各属性初級魔法の（防御・シールド）を展開し私の攻撃魔法から時間内逃げ続けれろ」

……はい？

リングの通信機能からそう言い終わるや否やイングリッドは両手を広げ無詠唱で魔弾を無差別に打ち出した。瞬時に阿鼻叫喚の地獄絵図と化す。

紫音は咄嗟にリングをはめた手をかざし防衛機能シールドを展開させた。

魔眼を持つキアリアならばその属性防御魔法が使えるのだが無

属性のホルダーは基本魔法が使えない。よって内包魔力を魔導リングにより増幅させ リングの内臓基本魔法を行使させている。何とか初撃を防いだものの 次々と魔弾が降り注ぐ中 既に生徒の半数以上がシールドを破られ魔弾の効果により地面にひれ伏していた。
……今回の魔弾の効果は先生のオリジナルスペル（特殊麻痺：パラライズ ひれ伏せ愚民共！）の様だ…… イングリッドならではのド S 魔法の一つである。

「貴様達は今まで何を聞いていたのだ？シールドは持続させてこそ意味のある魔法だ。己の魔力を安定させて供給する事でその強度を維持できるのだぞ？シールドは一度発動すれば魔力を供給し続ける限りは効果が持続する、敵の初撃を防いだ時こそ最大の好機なのだ。貴様達には徹底的にシールドの魔法を強化してもらつぞ！無能な貴様達でもそれくらいなら出来るだろ？~ではゆくぞ~あははははは

再び魔弾の数が増えた 紫音はリングのある手を突きだし、只耐えるしかなかつた。ふと 隣を見るとイリュが平然とした顔でこちらに向かってきた。

「……全くやり過ぎだつてーの」

イリュの周りには薄い炎の幕が漂つていた。（衣障壁・コートシールド）と呼ばれる 上級者が無意識に纏う防御障壁だ。炎がまるで生き物の様にイリュに迫る魔弾を絡めとり燃やしきくす。平常時から術者に害なす存在に対しては自動で発動する。

「……紫音…防ぐつてイメージしちゃ駄目だよ、硬い盾をイメージするんだよ……」

暫く私の様子を見ていたイリュがそう言つた。ふむふむ…確かに今

の私は防ぐ事を考えていた。……盾か……昔映画で見た中世の騎士の盾をイメージしてみた。

……気持ち防ぐ事に負担を感じなくなつた・なるほど流石は魔術上級者だけあつて適切な指摘だな・・・と感心してみる。そう思つたところで 後ろがにわかに騒がしい事に気付いた。

「わはは 上手いな！カイル！こらセンセもびつくりや！」

見れば3人の男子生徒が一人の男子生徒にちょっかいをかけているようだ。関西弁のややガラの悪い茶髪の生徒がボスっぽい。確か・・・西園寺龍彦さいおんじ りょうげん有力な名家の三男だと聞く。見れば彼の周りにも風が渦巻いている・・・

イリュと違うところは彼がリングのついた手をかざしている事・・・意識的に障壁を展開している点だ。

・・・それなりに力はあるのに家庭での境遇に我慢できず、ただむやみに力を振りかざすだけの愚か者・・・・・とはイリュの言葉だ。後の一人は取り巻きの様だ。（トリーとマキー）と呼ばれている・・・・いやいや 適当に言つてるわけじゃないよ？ 服部君アーリー マギー 横村君らしい・・・まあモブっぽいから解説はいいや。

この3人は先生の隙を見ては 後ろの生徒・・・カイル：アルヴァレルに魔弾を放っていた。彼は必死にそれをかわしていた。

「相変わらず逃げるのだけは天才的やな！お前才能あるで！立派なピヒロになれるで！」

西園寺の言葉に取り巻きが笑う・・・・嫌だな・・・・紫音は顔をしかめ露骨に嫌悪感を表した。イリュも同じような顔をしていた。イリュの性格ならファイヤボールの1発くらいぶち込むかと思つていたが 意外にもそれ以上は何もしなかつた。

・・・救えるだけの力が在りながら・見ないフリをするというのだろうか？・・・親友と思っていたがイリュこの行為に紫音の心はざわついた・・・しかし、今イリュに期待して自分で何もしようとしない自分こそが一番卑怯な人間だと理解してしまった。・・・軽い自己嫌悪に陥りつつも 紫音は勇気を出して彼らに声をかけた。

「ちょっとーー」

瞬間 西園寺達の障壁が土煙と共に消し飛んだ。・・・・消えたのではない 力で斬り取られたのだ！・・・紫音は咄嗟に顔を背けた。・・・・まずい・・・やつてしまつた！－

「くおらあああああああー！－！そこの無能共ー！」

イングリッシュがこちらに気付き集中して魔弾を打ち込んできた。4人の居た場所に魔弾が殺到する。その瞬間に妙な感覚に囚われた。
・・時間がゆっくり流れている？【時間停滞】の呪文だろうか？闇属性なので先生の仕業かと思ったが見る限り先生も停滞している。推測する限りこの演習場全てが停滞している。恐ろしいほどの高密度な魔法が行使されていた。次の瞬間土煙の中から凄いスピードで誰かが飛び出し 空中の魔弾をかわしながら移動していた。【加速】だろうか？精霊の働きが見受けられないから光属性の【光速】だろうか？・・・ん？あれあれ？この組み合わせは何かおかしくないかい？疑問が湧き上がった所に人の気配がした。左側から覗き込まれた。 白金の髪 金の瞳 カイル・アルヴァーレルだった。

「へえ・・この状況で動けるんだ・・・と言つても思考だけみたいだね でも凄いよ」

そう言い終る前に右側に移動していた。

「・・・助けてくれてありがとう・・・でも僕には関わらない方がいい・・・5秒後に時間は動き出す、その時君はこの事を覚えていな
い・・・」

彼の気配が遠ざかる・・・同じく今この瞬間の記憶が白く・・・白く・・・・・・・・・・

「ぐわあああああ！この格好はあかん！――！」

西園寺の悲鳴で紫音は我にかえった。先生の魔弾を受けた3人はM字開脚の様なポーズになっていた。・・・・・くつ！少し笑えた！隣のイリュも笑いを堪えている様だった。・・・・・あれ？何か大事なことを・・・・・まあいいか・・・・・

時間が来たようで先生はもう構えを解いていた。・・・終わった・・・安堵感からその場にへなへなと座り込んでしまった。

私の後ろでイリュは腰に手をあてて反対側を見ていた・・・・・そこには白金の髪の生徒が居た・・・カイルだ・・・ん？何故他にも生徒が居るのに彼を見ていたなどと言えるのだろうか？私はそう思い込んでいるだけ。見ているのはイリュではない・・・私が見ているのだ・・・なんで？

「・・・・・浅かつたわね・・・・・

「えつ？何が？」

「・・・魔弾は防ぐより　かわす方が遙かに難易度が高いの・・・・・まあ覚えておいて・・・」

「? ? ? ? ?」

イリュの言っている内容が良く理解できなかつた・・・とゆうか意

味不明？でもそれは重要な事だと感じた。

カイル・アルヴァレル・・・何故彼がこんなに気になるのだろうか？

紫音は気付いていなかつた。この時既に大きな運命の歯車に自分が巻き込まれていた事を。

ナミダノトキ

「さて……帰る」

ついつい物思いにふけってしまい 気がつけばこんな時間……ちなみにイリュは急用があり慌てて帰つていった。代わりに律子に頼まれて明日の授業の資料の準備をしていたのだが……流石は萌え田崎……イリュの言つていた意味を理解出来た気がした。まあこの辺りは後日にでも

帰り支度をしてから教室を出た。電車の気分ではなかつたので一人歩いて下校した。ふと何気に振り返ると紫音はその光景に息を呑んだ。夕暮れに校舎が赤く染まつっていた。それは紫音の記憶にある赤い校舎がかぶつた。

「……出来損ない……か……」

自嘲的に呟いた。紫音が小学校時代に友達に言われた言葉だつた。

その日は学校の発表会の準備だつた。クラスを飾り付け 全員で劇を披露するはずだつた。……仲良しのあの娘と二人で最後の飾りつけをしていた。彼女は憧れの主役で手作りのドレスで舞台で舞うはずだつた。

(昨日魔眼の人火をつけたのを見たの……凄かつたわ)
友達が興奮したように言つた。紫音は思わず身構えた……しかし
彼女は初めて見た魔法に憧れと驚きの表情で語つた。

(彼女は…私が魔眼だとわかつたら皆の様に離れてしまつのだらうか?)

そんな考えが浮かんだ。だつて彼女は…魔眼を…魔法を嫌つていな
いもの。もしかしたら私の事も…・・・本当の自分を理解してくれ
る本当の友達……(真友)いつしか紫音はそんな考えを持つようにな
つていた。

(……ちゃん…あのね…これは絶対秘密だよ…実は私…)

幼い心は重大な判断を軽く見てしまう。言つてはいけないと母と
約束したにもかかわらず…

(ホントに?! 紫音も火を出せるの?)

(…えつ? ……あんまり上手くは出来ないけど……)

せがむ友人に気圧されて(光:ライト)の呪文に挑戦 ……成功
手のひらに小さな明かりが螢の様に灯つた。

(うわあ凄い!みんなー!紫音が凄いんだよ!)

突然 その娘がクラスに向かつて叫んだ。何事かとみんなが集まつ
てくる。

(えつ? ! ……何で? 秘密だよつて言つたじゃない!)

(だつて…面白いじゃない)

オモシロイ? ナニガ?

幼い心は時として残酷な結果を招く

その純粹さ故に

その幼稚さ故に

他者の痛みを知らぬが故に

他人の気持ちをまだ理解出来ないが故に

幼い希望を無惨にも踏みにじつてしまつ。

紫音の周り殺到する子供達 自身が好奇の目に晒される恐怖 紫
音は耳を塞ぎしゃがみこんだ。

(早く魔法を見せてよ) (わつーーいつ目の色が変だぞ?!) 彼等
の言葉が紫音の心を追い立てる。

(やめて――――――)

紫音の叫びと共に教室のあちこちに炎が燃え上がった。蟻の子を散らす様に子供達は悲鳴を上げて逃げ惑つた。

(紫音！やめて！紫音！私のドレスが！)

彼女の叫びに紫音ははつとした。騒ぎを聞いて駆けつけた教師によつて生徒は外に連れ出されていた。

私の隣では相変わらず彼女が喚いていた。止めてあげたいけど……こうなると無理なんだ……彼女が着る筈だつたドレスは目の前で炎に包まれ灰になつていつた。

(「めんなさい……止められない……止められないの……）

この時はまだ、紫音は魔眼の力を「ントロール出来ないでいた。内包する魔力が大き過ぎるのかそれとも幼い子供だったからか……結果は感情に左右されやすかつた。

(何とかしなさいよ！……この……出来損ない！)

ああ……そうか……私は出来損ないだつたんだ……

その時の彼女の目を私は生涯忘れないだろう。

私を憎んでいた。

私を非難していた。

私を呪つていた。

私の存在を否定していた。

私はその場から逃げ出した。教室を飛び出し階段を駆け下りた。怖かつた……自分の力が。後悔した……自分の愚かさを。信じたかった……友達だつたあの娘を。振り返ると夕陽に赤く映えた校舎が紫音を威圧した　まるで彼女を責める様に。

そこから先は余り覚えていない。会いに来た先生にも会わず部屋に閉じ込もつていた。幸い怪我人もなく教室の一部と道具が燃えただけで発表会も無事に終わつた。先生はそう言つていたらしい。両親は怒る事無く私の話を聞いてくれた……そして私はまた転校した。

思考を一区切りすると顔を上げた。気がつけば通学路の近くの庭園にあるベンチに座っていた。既に日は落ち辺りは薄暗くなっていた。

あの時は涙ひとつこぼさなかつた。ただ怖かつた・・・それだけだつた。しかし今は違う……

「…………」

押し寄せる感情の波に堪えられなくなり嗚咽を漏らした。

(出来損ない)

鋭い言葉の牙が時間をかけて今やつと紫音の心に突き刺さつた。

紫音はその痛みをどうする事も出来ず、ただ体を抱えて涙するしかなかつた。

ヤミノフルヨル1

「……間に合わなかつた」

紫音はシャッターの閉まつた店の前でガックリと頃垂れた。今夜はこの（浜中精肉店）の手作りコロッケ（120円）にしようと決めていたのに……。具沢山な所が母親の作るコロッケに似ていたので気に入つてた。この店はコロッケを看板商品にしている事もあり主な商品が売り切れるとその時点で閉店してしまう。まさか自分があんなに泣いてしまうとは……。予想以上に自分が我慢していたのだらうか……？　朝のイリュの言葉を思い出す。

（そんな風に見えていたのだらうか？　見えてたんだらうな……）

先程の自分を思い出し少しだけ恥ずかしくなつた。…………しかし幾らか気持ちが軽く感じる事気がした。

「さて……仕方ない……今夜はあそこのスーパーで買って帰るか……」

紫音は気を取り直してトボトボと歩き出した。この店はアパートから離れた場所に在る為いつも買い物をする商店街までは少し歩かなければならなかつた。週末のこの時間では人通りもまばらで一般家庭では夕食後の家族の団欒の真っ最中であらう。

「……さて」

紫音は三差路で立ち止まる。右にいけばそれなりに店の立ち並ぶ明るい道……しかし時間はかかる。左に行けば既に暗いオフィス街

目的地迄は一直線だ。……暫く悩んで左を選んだ。……理由はただ早く家に帰りたかったから。

オフィス街といつても広い道路に並木道が並ぶ……な感じではなくて 路地裏みたいな道に一流二流企業が箱詰めされた雑居ビルが立ち並ぶエリアだ。昼間はサラリーマンやOLさんで賑わうこの道も夜は全くの別世界 だった。

(……物語とかで野良猫とか出てきそうな雰囲気ね …… その角のゴミ箱とかひっくり返して…) などと他愛もない 想像をしながら歩いていた。

次の瞬間 想像通りにゴミ箱が弾き飛ばされ何かが路面を転がった。

「なつ？！何つ？！」

紫音は鞄を抱きしめ身構えた… だつてそれは猫なんかよりも大きくて… ゆっくりと一本足で立ち上がったのだから… ……え？ 立ち上がるつ……て

ソレは身の丈は一メートルほど在る猫だった… いや… 不細工な猫だ。茶色い毛で全身を覆われておりその両手（？）の爪は鋭く長い。口は耳元まで裂けた様に大きく その口には鋭い牙が乱雑に並んでいた。その目は細く鋭く憎悪に燃えるかの様に赤く輝いていた。ソレはふらふらと立ち上ると自分が飛んできた方向に向ける

背を低く構えると 威嚇の声を発した。次の瞬間 その方向から火の玉が飛んできた。：（火球：ファイアボール）の呪文だ。火属性の初級呪文だが この速度 精度 威力を見れば、使用者がなかなかの熟練者だと推測できた。魔法は術者の熟練度によってその姿を変える。初めてファイアボールを使用した者には火の玉を作り出す作業でしかない。熟練してゆくにつれ 攻撃力 魔力消費量

軽減 詠唱破棄 貫通 多重効果付属など 術者と共に進化

して行くのだ。再びファイアボールが三発 ソレに向けて襲いかかつた。ソレは敏感に反応して一発をかわした先で三発目の直撃を受けた。瞬時にソレは火だるまと化した。

「ギニーヤアアアアアア……」

猫っぽいソレは猫っぽい断末魔の叫びをあげて木つ端微塵に吹き飛んだ。その残骸は大気に溶け込む様に煙と化して消え去った。

「…………」

紫音はその場に尻餅をついた。……何なの？これ？ 最後のファイアボールには「加速」「殺傷力上昇」「爆発」の効果が付与されていた。最初の一発は廻……対象を目的の位置に誘い込むためのモノだ。その証拠に最初の一発は加速の効果が強く付与されていなかつた。避けさせる事が目的だからだ。三発目には強い殺傷力を感じられた。

こんな状況でありながらも紫音の（眼）は分析^{アナライズ}していた。別な方角から三匹のソレが現れた。「ワイルドキャット」そうアナライズされた。…連中はまだ紫音に気がついていない…

「……逃げないと……」

紫音はふらふらと立ち上がり後ずさりした……が見えない壁に阻まれた。

結界だ……そんな筈は…自分がついさっき歩いてきた場所なのに……
模倣結界^{ヒーロールド}十一使徒の魔鏡^{マジックスター}…紫音の目によりアナライズされた結界を瞬時に理解する。この区域に学園の演習場と同規模かそれ以上の結界が張り巡らされていた。故に紫音は追い詰められる形になってしまった。

(… 何故こんな事に? …)

恐怖で膝が震えていた……どうする?逃げる事も出来ずこのまま見つからない保証もない……見つかるのは時間の問題だ、この場所では戦闘が行われていた……このワイルドキャットと敵対する存在もあるという事だ。……それが味方になつてくれるとは限らない。

ワイルドキャットの一匹が紫音の存在に気付いた様だ……威嚇の唸り声をあげてこちらに向かってきた……初めて直面するこの事態に紫音は「死」を意識した。それは遠い存在と思いながらも、こんな日常のすぐ近くに潜んでいたのだ。

(こ のま ま・・・死んじやうのかな?)

(そ れ は・・・嫌だ!)

(ど う す る?・・魔 眼 し か な い?・・・でも・・・)

(?? や る し か な い つ ! !)

魔導リングに意識を集中させてシールドを展開……飛び掛かつてきた一匹田を防ぐ。その凶暴さと鋭い爪は今にもリングの障壁を破りそうだった。見れば後方の一匹もこちらに向かつて来ていた。
……二匹は防ぎ切れない……

紫音は覚悟を決めた。このままやられる位なら……やつてやる!

震えは止まつた……あの日の様に。

その瞳には強い決意が見えた……あの日の様に。

しかしあの日とは違う、これは……逃げる為の決意ではない……前に進む為の決意だ! 紫音は田を閉じて叫んだ。

「魔眼発動!」

ヤミノフルヨル2

「魔眼発動！」

その声に反応して紫音の周囲に風が巻き上がった。結い上げた髪は風になびきその全てを周囲に晒した……その美しい黒髪は毛先から変色してゆく……紫へと。ゆっくりと目を開ける 右の瞳だけ紫に変色していた。障壁の強度が一気に増した。

……出来ればこの力だけは使いたくなかった。彼女の人で苦しみを与え続ける紫の魔眼……正体不明過去にも前例の無い魔眼であった。属性はおろか効果 使用できる魔法など全てが謎であるり とにかく紫音にすらコントロールが出来ないのだ。全ての属性魔法が使えるかと思えば次の瞬間には全く使用出来なかつたり、魔学士や魔闘士ほど強化されなかつたり 未知の力が使えたりもしなかった。使用する魔法の威力も初級からマイスターレベルまで完全ランダムなのだ。

「ソニックブーム
衝撃波！！」

リングをつけていない右手を突き出すとワイルドキャット達が見えない力によつて吹き飛ばされた。……何とか成功したみたいだ。しかししながら効果はまちまちの様だ……一匹はそのまま動かなくなつているが、他の一匹は直ぐに起き上がり再び襲い掛かるうとしている。紫音は直ぐに次の行動に出る。障壁ひ解除し自らの前にリングを使い魔方陣を描く……リングの宝の輝きが軌跡となつて魔方陣を形成する。

「『荊の森の王よー我等に仇成す彼の者に戒めを！……荊の呪縛！』（トドルバインド）

「

詠唱が成功し魔方陣が光の粒子になり消えてゆく……ワイルドキヤツトの影から黒い荊の影が現れその体を串刺しにした。と言つても本当に串刺しにする訳ではなく影によつて動きを封じるのだ。気絶しているヤツには効果が無かつた。残りの一匹は影に絡めとられ身動き出来ないでいた。……今のうちに安全な場所を探してここを脱出する方法を……視界の片隅で影が動いた。気絶していたワイルドキヤツトが立ち上がつた。気付くのが一瞬遅れた為 対応が出来なかつた。突然体当たりを受けてよろめいた。鋭い爪が狙いを研ぎ澄ました。

「……痛つ……」

咄嗟に身体強化・速度上昇を無詠唱で発動し体を反転させた。……がかわしきれず右腕を少しきり裂かれた。そのまま距離をとる時間がない。失敗は許されない。比較的得意な水・風属性混合の氷刺ピックを発動する。紫音の背後に氷の矢が三本現れる。ワイルドキヤツトが飛び掛かると同時に矢を放つた。縛られていた一匹に命中。そのまま煙の様に消え去つた。飛び掛かってきた一匹は更に高くジャンプしてかわした。……筈だつた。

「? ! ニヤ ? !」

ワイルドキヤツトの胸にはかわした筈の矢が刺さつていた。最後の矢には（追尾）の効果が付与されていた。

「IJの状況で失敗する訳ないでしょ」

ワイルドキヤツトは自らに起じつた出来事を理解する間もなく消え

去つた。……と 同時に紫音の髪も瞳も元の黒に戻つた。

「さつかり5分ね……」

あの日…あの少年は私を救つてくれた……この得体の知れない魔眼のせいで私は酷く消耗していた。制御出来ないこの力は私の心も蝕んでいった。

とにかくこの皿をどうにかしたい一心で両皿を抉り出そうなどと違う異常な考えに至つてしまつた。…………うん、今はその考えが異常だと思える。

でもあの頃の私にはそうする以外に逃げ出す方法が見つからなかつたのだ。

そして あの少年は教えてくれた……別な方法を！

～開幕～キオク

「……終わったよ」

彼の声に私は目を開けた。彼は私の目の前にいて 私の肩を両手で
掴んでいた……少し疲れた顔をしていた。

「大丈夫？」

「うん……思ったより君の力が凄かつたんだ……もう大丈夫……とは言
えないかも。」

「えつ？」

彼の言い回しに少し不安になつた。そんな様子に気付いたのか彼は
優しく笑つて ごめん と言。

「見て」¹りさ

そのまま体を反転させられた 目の前には鏡に映る自分がいた。
……その髪と瞳は私の嫌う紫ではなく……

「わあつーお母さんと同じ真つ黒だあー！」

紫音は夢にも思わなかつた自分の変貌に心踊らせた。夢では無いだ
ろつか？いや……夢だつたら嫌だな……
軽くほっぺをつねられた。

「……いひやい」

「夢かも……とか考えてそうだったから……」ごめん

……彼は申し訳無さそうに手を離した。でもそんな彼の心遣いが嬉しかった。私は振り返り彼の両手を握った。

「ありがとう…私…私…」

お礼を言いたいのに涙が溢れて言葉を繋ぐ事が出来なかつた。彼は私を抱き寄せて泣き止むまでずっと髪を撫でてくれた。

「…落ち着いた?」

「…うん…その…服…」めんなさい」

彼の胸元は私の涙で染みを作っていた。……鼻水ではない！

「それから…ありがとう」「どういたしまして……でもね…これはあくまでも一時的な方法だから…今から言つ事は忘れないで。」

彼が言つには私の眼力が無くなつたわけではなく 強制的に休眠状態にしているらしい。更に色々制限があつた。要約すると。
魔眼保持者から適合者扱い（魔法は使えるが自制する様に）
使用した場合の成功率は著しく低い。（魔力の根元の眼が休眠している為）

一時的に魔眼を発動させる事が可能…強く念じる（その場合限定期的な解除の、使用時間は5分間）

強い感情に反応して魔眼が発光する場合がある。（強い驚きや衝撃…特に怒りの感情には反応しやすい）

等々細かい指摘事項は有るもの今までの状態から考えると至つて大丈夫だった。（後に色々苦労する事は考えもしなかつたのだが…）

「……うん…大丈夫…生まれ変わったつもりで頑張るよ」

紫音は小さくガツツポーズを作る。彼は笑う……うん、頑張つて…
と

「…………私からは…あなたに何もしてあげられないけど……」
「気にしないで…君が頑張れるなら…それでいいんだ」
「でも…これは…私の感謝のしるし…」

紫音の両手が彼の頬を包み込んだ。ふつ と 柔らかな唇が重ねられた。それは短く重ねるだけの幼稚な口づけ……しかし紫音の感謝の気持ちと精一杯の勇気が伝わってきた。

「……い…一応私の初めて何だから感謝してよねっ」

照れ隠しこんな事を言つてみた。彼はありがとうと言つて笑つた。
……不意に真面目な顔付きになると

「……君の名前は?」

そつこえぱお互いが名乗つていらない事に気付いた。

「……紫音…紫の音つて書いて紫音」

「紫音か……君にピッタリのいい名前だ」

「…………ありがとう」

「…………僕の名前は＊＊＊＊＊＊……」

「…………＊＊＊＊＊＊……」

「うん…でもこの名前は忘れて……もしも君がこの名を覚えていた

「.....」

再び記憶が曖昧になる.....彼の名前.....なんだつたかなあ.....

ヤミノフルヨル3

〇 一二三 紫音は暫く路上に両手をついて頃垂れていた。

いくら子供とはいえないつー…………夢見る子供かっ！…………いや子供
だつたんだけど…………ね。

過去を回想するついでに血の恥ずかしい初体験も思い出した紫音
は思いつき凹んでいた。

なんとか立ち直るとハンカチを腕の傷に巻き付けた。

……へんなバイ菌とかいないうな……

先程まで命の危険を感じていたが一度の戦闘が紫音の気持ちを切り替えていた。紫音は鞄を抱えると奥に向かって歩き出した。このまま此処にいても事態は進展しそうに無いし…………未だに戦闘の気配が奥から感じられる。再びさつきの猫ちゃん達に出会つ可能性もあつたけど…………私の心の声が（進め）と告げていた。

……気配が濃くなつた…………いるつ？！

再び鞄を抱えシールドを開けるべく構えた。前方の路地の暗闇に無数の目が輝く…………その数およそ十数匹…………これは流石に防げ無いなあ……

紫音は咄嗟に駆け出した。先程の戦闘で動きを見る限りそこまで足が速いとは感じなかつた。…………一足歩行だから？

追いかけてくる奴は鞄で殴り飛ばした。…………魔眼を発動させたいが一度発動させると次までは30分位時間を空けないと無理なのだ。…………発動したからといつても成功率は相変わらずなのだが…………

（……やつきのファイアボールは「ちらから來た筈だ。）

ワイルドキャットと敵対する者が味方になつてくれると判断した行動であった。……まさか犬が相手だつたなんて事は無いはず……そう信じたい。違つた時は……そんときやそんときだわつ！

路地を突つ切つた先の階段を駆け上がりその先の小さな公園を目指す。改めてこの結界の規模に驚く。このまま紫音のアパートまで帰れるんじやないかと思つてしまつほどの広範囲だった。公園を渡り切る前に紫音は足を止めた。やはり数が多い為か逃げ切るのは不可能だつた。リングの補助を受けて紫音の使える初級魔法で戦うしかない。

最初に飛び出してきた奴に感電^{スタン}の魔法を見舞う。それを見た他のキヤツト達は警戒しそれ以上は飛び掛かつてこなかつた。

(…どうする? ここには一発逆転狙いで炎の壁ファイアウォールで行くか……)

問題はその成功率だ。初級魔法はそこそこの確率で成功するが、中級となるとその成功率は三割を切る。魔眼が不安定な事もあるが、紫音が頑なに魔眼の使用を避けていた為 熟練度が著しく低いのが原因でもある。しかし背に腹は変えられない！

「ええい！ ファイアウォール……」

紫音が腕を突きだし魔法を行使しようとした時 周囲に爆炎のの壁が巻き起こつた。周りにいた何匹かのワイルドキャットが巻き込まれて消し炭になつた様だ。

その規模と熱量に驚いた紫音は後退りしながらも躊躇して尻餅をついた。

ななななな何よこれつ？！ 私つ？！私がやつたの？！ 私SUG
EEEEEE！……

「貴女大丈夫？……つて紫音？！」

背後からの声に振り返った。そこには毛先に赤く燃える炎を灯したイリューシャがいた。彼女がここに居ることは驚きだつたが……彼女もここに紛れ込んだのだろうか？それにしてもやけに落ち着いた雰囲気だつた。・・・ああ・・そうか・・先ほどのファイアボルの主が彼女であることに気づいた。イリュが差し伸べた手によつて引き起こされる。彼女も私が居たことに対して驚いているようだつた。

「！？イリュ？……燃えてるつー！」

紫音は彼女の髪先に火を見つけ、慌てて彼女の毛先に燃える炎を叩いた。しかしそれは一向に消える気配を見せない。・・・とゆうか熱さを感じないのだ。

「あはは……紫音大丈夫だよ。それは私の魔力の現れ……体の一部だよ。」

「はつ？」

「……それよりも紫音……その腕……」

イリュが腕に巻かれたハンカチに気付いた。

「あはは……わつきあいつらに……？イリュ？」

瞬間イリュを取り巻くオーラが変わったように感じた。炎の暖かさから氷の様な冷たさに……

「よくも……よくも私の可愛い紫音に傷を……！…！」

彼女を取り巻く炎が一層燃え上がる。……えつ？……私のつて言つた？いやいや今はそんな事は放つといで……
イリュの身体に変化が現れた。髪は肩から先は炎となり 手首 肘膝にも炎が燃えていた。……あれ？イリュの耳つてあんなに長かつたつけ？

極めつけはスカートの下から覗いてる……アレは何？ふりふり～ああなんだ…尻尾か……尻尾？！

そこでイリュは声高らかに自分達を取り囲む妖魔の群れに向か、名乗りを上げた。

「下等な妖魔の分際で我が逆鱗に触れた事を後悔するがいい！！我が名はイリューシャ ハイヴアリエル！誇り高き焰魔族最後の戦士なり！」

ヤミノフルヨル4

「……ふむ……こんなものかな？」

結界を張り終えたイリューシャは一番高い雑居ビルから周囲を見下ろした。

今回召喚されたのは（ワイルドキャット）…低級妖魔だ。個体での能力は高くないが奴等の強味は群れる事だ。魔界で異常発生したワイルドキャットに村が一つ滅ぼされた……なんて話もあるくらいだ。……気配を探ると…50匹程度か……ん？…んん～？妖魔の気配に混じつて違う気配を感じ取つた…一般人が紛れ込んでるう？！あわわわ！マスターに怒られちゃう～！

イリューシャが妖魔と戦い始めたのは2ヶ月前。何者かにより町中のあちこちに召喚の魔方陣が書き込まれていた。それに気付いたマスターが結界で空間を隔離して人知れず処分していた。それに気付いたイリューシャが手伝いを申し出た。

イリューシャはそのまま空中にダイブした。彼女の周囲に炎が具現化した。（魔装）と呼ばれる魔力の鎧だ。その身体は強化されあらゆる外敵からの攻撃を半減、無効化させる。アスファルトにクレーターを作る程の衝撃で着地してもイリューシャには何のダメージも無かつた。起き上がり様に周囲のワイルドキャットにファイアボールを見舞う。一瞬で灰となり崩れ落ちて行く哀れな妖魔に一警をく�れてやると気配の元に急いだ。

「……くそつーこいつらキリがない！」

召喚用の魔方陣が未だに働いている為が次々と現れるワイルドキャ

ツトのせいでなかなか気配の元に辿り着けないでいた。先ほどから感じる気配が自分の知る物に類似している事に、若干の焦りを感じていた。

(あの角を曲がれば……くそつー)

眼前に現れた群れに後退を余儀なくされた。向こうに向かおうとしている一匹にファイアボールを放つ……くそつーかわされた！

イリューシャの周りに殺到した妖魔を炎の剣（フレイムブレード）で両断する。先程の逃がした妖魔に向けて三発のファイアボールを放つ。三発目は（特別製）だ。これで危険を察知して上手く逃げてくれたら良いのだが……模倣結界は私が作り出したものだが、十二使徒の魔鏡はマスターのものだから抜け出す事はまず不可能だろう。…………？ おっ？ 僅かな魔力の流れにイリューシャは驚いた。紛れ込んだ訪問者は戦うつもりらしい。この状況でこの機転の切り替えの早さは好感を覚えた。それは自分が戦闘種族である為か、感じじる魔力が心地好いものだからなのかはわからないが……

側面から襲いかかる妖魔を再び炎の剣で切り伏せる。あちらはなんとか切り抜けてくれた様だ。どちらにしても早く救助に向かわなくては……？？

ここでイリューシャは違和感に気付いた。魔力の流れによれば……ソニックブーム……ニードルバインド……アイスピック……か……風土水……属性もレベルも関連性がなく出鱈目だ。属性には相性が存在する。火は水に弱く 水は土に弱い 土は風に弱く 風は火に弱い。この流れからいくと

訪問者は最後のアイスピックの精度の高さ、魔力の濃縮率をみれば水系列に属していると推測する。ならば土属性は成功率は限り無くゼロに近い筈だが？ イリューシャ自身水系魔法は全くと言つて良い程成功しない…………いや……まさかね……

イリューシャが一番気になつたのは「一番目の魔法だつた。基本土属性の植物を操り敵の動きを封じるものだが……僅かに闇属性の働きを感じた。

（……しかし魔導リングの属性補助もあるから……この場合の属性感知は余り意味がないかもな）

魔導リングはあくまでも術者の補助をするアイテムだ。たとえそれが術者自身の不得意とする魔法であつたとしても……そう考えている間に訪問者に動きがあつた。……こちらに向かってきてる？！…………この状況下で迂闊に動き回る事は危険きわまりないのだが……どうやらこちらが味方だと判断したらしく……本来ならば結界内を駆け回り、敵を引き付けるのはイリューシャの役目だつたのだが……

（結果としては好都合……利用させてもらひつわよー）

訪問者のサポートをしながらその目的達成の為に動き始めた。……周囲の敵を排除し終えた頃には訪問者は広場に追い詰められていた。もとい計画通りの展開にマスターの計画かと思わず疑いたくなつた。……いや、マスターと私の間には嘘や偽りはない。だから今回は恐ろしい偶然なのだ。

イリューシャは知らなかつた。これは偶然ではなく必然であつたことを……

訪問者は追い詰められ、妖魔に取り囮まれていた。遠目に見ても女性だとわかつた。……この魔力の感じは……いやまさか……ね。精靈の動きが活発になる……炎の壁か……なかなか良い判断をしている。残念なのはこの魔法が失敗した事だ。術式が上手く精靈に伝

わっていない様だ。……惜しいな。

イリューシャは新たに炎の壁の術式を再構築する。訪問者の失敗した炎の壁に更に自分の炎の壁を重ねる。結果としてそれは巨大な炎の壁を作り出した。訪問者は驚き尻餅をついた。

今頃（何これ？！私SUGEEEEEー）とか思ってるのかな？そんな彼女に声をかける。

「あなた大丈夫？……つて紫音？」

やつぱり先程感じた魔力は紫音だつたのか……でも何故？

「？！イリュ？……燃えてるつー」

私の魔装の炎を見た紫音が慌てて髪をはたいた。かわいい奴め。

「あはは……紫音大丈夫だよ。それは私の魔力の現れ……体の一部だよ。」

「はつ？」

まあこれが普通の反応だわ……魔装なんて一般的には知られてないからね……

ふと紫音の腕に巻かれたハンカチに気がついた。

「……それよりも紫音……その腕……」

「あはは……さつきあいつら……？イリュ？」

ハンカチに滲む血を見て自分の中には激しく渦巻く魔力の奔流に気がついた。

そう……許せないのだ！

「よくも……よくも私の可愛い紫音に傷を……！」

怒りの感情が私を支配する。ああ……ヤバイなあ……体から漏れ出す魔力が制御できなくなり、魔装が怒りのせいで（魔身化）しているのがわかつた。マスターに怒られるかなあ……紫音……きっと驚くだろうなあ……しかし 親友であるはずの彼女を傷付けられた事はイリューシャにとつては我慢ならなかつた。

「下等な妖魔の分際で我が逆鱗に触れた事を後悔するがいい！！我が名はイリューシャ ハイヴァリエル！誇り高き焰魔族最後の戦士なり！」

熱い炎が体中を駆け巡る様に本能の囁きがわたしをしほいする……ちからのかぎり、てきをなきはらい、そのからだをひきさいてやれ。わがちからハむてきナリ。おそれルモノはナイ。ワガコエにシタガイソノチカラヲカイホウセヨ！メニウツルモノスベテハカイシロ！「ワセ！モヤセ！」「セ！」

……じげて……しおん……

押し寄せる暴力と破壊の感情に薄れゆくイリューシャの意識の中でその言葉は彼女に届くことは無かつた。

ヤミノフルヨル5

大気が震えていた。

イリューシャから放たれる膨大な魔力は妖魔達を圧倒していた。彼女を取り巻く炎は今や赤から青に変わりつつあった……実際に温度が上がっている訳ではないが、魔力が確実に上昇している事は間違いない。ゆっくりと起き上がったイリューシャの顔はいつも愛嬌を振り撒くものではなく、目の前の獲物に歓喜する獣のものだった。

瞬間、妖魔の傍にイリューシャが移動した。そのまま長く伸びた爪で両断した。この妖魔は自らが斬られた事すら理解していないだろう……そして炎に包まれた。

状況の飲み込めない紫音は呆然と立ち尽くしていた。無理もない親友が実は魔族でしかも燃えていてさらに別人みたいに妖魔相手に虐殺の限りを尽くしているのだから。

「…………イリュ…………どうしちゃったの？」
「暴走だよ」

紫音の何気ない言葉に背後から答えた。咄嗟に振り替えると黒髪の男がイリュを見つめていた。年の頃は私と同じ位だろうか？黒のズボン、黒のタンクトップ、黒の革靴、革手袋 全身を黒一色で統一された出で立ちは息を飲むものがあった。その中でも目についてしまうのはその右肩にある剣と十字架を思わせる刺青……

そう思つた瞬間、剣の柄の部分の模様が蠢き（眼）が開いた。その眼が私を見るな否や六芒星を浮かび上がらせた。

「魔導魔眼？！」

魔導魔眼……別名第三の眼とも言われる代物だ。精靈や幻獸などの上位存在との契約などにより手に入れる事が出来る「秘技」だ。非常に扱いが難しく、暴走すると宿主の魔力はおろか生命力までも根こそぎ吸い取り消滅すると言われている。

「よせ……彼女は敵ではない……」

彼の言葉に一瞬上目遣いに、彼を見ると静かに閉じた。自立式のものらしい……只でさえ魔眼に魔力を供給する必要があるのに……自立式となるとその消費量はとんでもないはずだ。この男……一体……

「よく知っているな……それにお前の魔眼も興味深い……しかし今はそれよりもイリューシャが問題だな。」

「貴方……何者?」

魔眼について触れられた事により、紫音の警戒心は最大のものになつていた

「……そんな怖い顔すんなよ……別にどうもしねえよ……俺は……まああいつの相棒みたいなものだ。」

そう言ってイリュに向き直る。イリューシャは逃げる妖魔を追つて公園を飛び出した。その手から放たれた火球は眼前のビルの一階を吹き飛ばす程の威力だった。此処が結界の中でなければ……そう考えると恐ろしい。

既にワイルドキャットは殆どのが焼き死んでいた。……残されたのはまだ小さな個体……子供だった。それでもイリューシャの炎は消える事無く彼らを追い詰める。ふと子供の頃の記憶がフランクシユバックする。

——夕日の公園——逃げる少女——— 同い年の子供達にはやし
立てられ——

——「お前の眼は—— - - - 「悪鬼の眼—— — —

「 つ——」

ついに見かねて飛び出していた。後ろからあの男の声が聞こえたが、そんなことはどうでも良かったこれ以上イリューシャの暴力的な行為を見過ごせなかつたのだ。それは彼女を救うためなのか・・・それとも幼い日の自分を救う為なのか——

ビルの片隅に追い詰められた一匹のキャットにイリューシャは何の躊躇いもなく業火の火球を見舞つた。その顔には歓喜に満ちた笑みすら伺えるほどだ。憐れな妖魔は痛みすら感じる事無く灰になる筈だった。

加速の魔法で合間に割り込んだ紫音は妖魔を抱き抱え地面を転がつた。その背後のビルで爆発が起きた。

「やめて！イリュ！」

起き上がりながら紫音が叫ぶ……しかしイリューシャからは何の返事もない。むしろ邪魔をされた事により嫌悪感を漂わせていた。再び振り上げられた手に火球が宿る 呪文詠唱破棄 意思が行動により具現化する程のレベルだ。その手のひらの炎が一瞬収縮した瞬間紫音はその場を飛び退いた。

激しい轟音と爆風が紫音を更に吹き飛ばした。土煙の中に巨大なクレーターと無惨に崩れ落ちるビルの姿が見えた。『冗談！あんなの食らつたらひとたまりもないわ！

起き上がりながら胸に抱いた子猫妖魔が震えている事に気付いた。今は私に襲いかかる気は無い様だ・・・

先程は身の危険を感じてこの妖魔の仲間の命を奪つたが……

「……生きてる……」

腕の中の温もりに自分と同じ生命の鼓動を感じた紫音は自らの判断を悔いた。自分の身を守るためとは言え 先程の妖魔も生きていた。自分と同じ命を宿していた。無差別に命を奪うイリューシャを止めたいと願いながらも 自らの行動にもなんの違いもない……なんという偽善！－その罪滅ぼしの為にこの小さな命を救おうといふのか？ そうする事で自分は許されるとでも？－

「田を覚ませつ！」

その声にハツとした。思考のループに囚われてその場に立ち戻りしていった。

振り替えると紫音とイリューシャの間にあの男が割つて入る形での右手にはファイアボールが握られていた。

苦悶の表情を見せた後そのまま握り潰した 呪文解除だ。^{ディスペル} しかし普通はこんな出鱈田なやり方はしないのだが……

「だ…大丈夫？！」

「そんなわけないだろ…ちくしょう…やつてくれるじゃないか…イリュ！」

駆け寄りその手を見るが酷い火傷を負つていた。……私を助ける為に？

「おこ……あいつを止めるから手を貸せ」

「……どうすればいいの？」

力の差は明白だが、気がつけばそう答えていた。男は一瞬意外そうな顔をして笑顔を見せた。

「……氣に入つたぜ……お前名前は？」

「紫音……宮園紫音」

「紫音か……良い名だ」

その台詞に一瞬身を止めた……いや、今はそんな事はどうでもいい

「……それで何をすれば？」

「今から3分……時間を稼げ。」

そう言って、無事な左手を使い魔方陣を開けさせた。それも4つそれぞれ文様が違うことから高難易度の最上位魔法を使う様だ……まずは自分の手を治療すべきだろつに……不思議とこの謎の男に好感が持てた、この件に関しては信頼に値する……と。抱いていた子妖魔をそっとおろす。迷子の子供のように不安げな目を向けてきた。

「隠れてなさい……大丈夫だから」

と微笑んだ。意味を理解したのかそのままビルの影に走り去った。

「さて……私がイリュにどこまで通用するか……やってみるしかないね！」

拳に力を入れると再び彼女と対峙した。

「魔眼發動！！」

ヤミノフルヨル6

「さて……お手並み拝見と行くか

魔方陣を展開した後、呪文構築は魔導魔眼に任せて一人の戦いに目を向けた。魔力 戰闘経験 熟練度 全てにおいてイリュが上であることは間違いないが、あの魔眼を見てしまつては期待をせずにはいられなかつた。

「……………
高速詠唱！！」

魔眼の発動と同時に呪文詠唱の高速化に成功した。イリューシャと違い私は詠唱破棄など出来ない。まずその差を埋める所から始めた。立て続けに「身体強化」「属性限定強化」「身体加速」を構築した。イリューシャはこちらの出方を伺つているのか、その顔には笑みすら見てとれる。ああそうですか……眼中にはありませんか……でもイリュは大変な勘違いをしているよ……それを今から判らせてあげるね。

「舞え！凍える者よ！（氷水の剣・アイシクルビット）！」

移動しながら右手から呪文を打ち出した。小さな氷水の塊が弧を描きながらイリューシャの周囲を周回する。

その回転により気温が低下し新たな氷水を生む。それがランダムのタイミングで襲いかかる。

360度全方位からの攻撃だ。しかしイリューシャの纏う炎の魔装

はこと」「とく氷水の塊を蒸発させる。一見地味に見える攻撃だが一度発動すれば自己増殖により無限の攻撃を繰り出す事が出来る。イリューシャにはダメージを与えるまでには至らなくとも本人の性格上、かなりストレスを感じるだろう。……ゆでたまごの殻を剥ぐのを嫌がっていたイリュの姿を思い出す。伊達に毎朝ただ、ご飯を食べさせていた訳じゃ無いんだからね！・・・それは彼女にとつてかけがえの無い幸せな時間でもあった。

やがて広げ払う仕草をとりはじめ遂には炎の波動で呪文自体を燃やし尽くした。イリューシャと目が合つ。

……すつごい睨まれた。

次の瞬間イリューシャは両手を振り上げ巨大な火球を造り出していた。あれを喰らえば相手が誰であろうとただでは済まないであろう。しかし紫音はこの瞬間を待っていた。

「流れよ！満ち落ちろ！（激流・フラッシュ）！」

「無限の振り子よ！無限の軌跡を刻め！（夢幻振り子の結界・ペンドコラム・デジヨン）！」

間髪空けずに待機状態で準備していた呪文を発動した。イリューシャの頭上に大量の水が発生し彼女を呑み込んだ。同時に結界が現れ、その中に水もろともイリューシャを閉じ込めた。彼女を中心には無数の氷の振り子が空中で衝突し更に結界の強度が増してゆく。いずれも難易度の高くない初級 中級に当たる呪文だ。しかし水の量は尋常ではなく結界の振り子も通常では4～8とされるところが16もの振り子が結界を強化し続けていた。

「限定属性強化」

使用属性を限定する事でリスクを生み出し効果を倍増させる特殊な効果呪文だ。結界中のイリューシャは水に呑まれているものの溺れる事もない……その火球の火力はあの量の水をも蒸発させていた。

……全て紫音の計画通りだとも知らずに……

この結界を破る事は簡単だつた。

あと少しこの火球に魔力を注入すれば良いだけだ。結界を無限に強化するとは言え全ての面に強化が施される訳ではない。振り子の数には驚かされたが……それだけだ。

さあ そろそろ終わりにしよう……

憐れなこの娘の友人よ……

イリューシャが火球に魔力を注いだ。

火球が膨れあがり結界を破壊——

辺りが閃光に包まれた。

夢幻振り子の結界に亀裂が入り、激しい爆発が起こった イリュの炎により蒸発した水は水蒸気となり結界内の高密度な空間内で膨張を続けていた。イリュが炎を強化した為、その均衡が崩れた。

水蒸気爆発。

これこそが紫音の狙つていた結果だつた。その威力に結界は碎け散り、その衝撃に周囲のビルの全ての窓ガラスが雨の様に降り注いだ。

熱波と爆風が周囲を嵐の様に駆け巡り、紫音の視界を遮つた。紫音は咄嗟に両手を差し出し障壁を展開させた。と、同時に巨大な火球が彼女の障壁を砕きその左腕を掠めた。

そのまま軌道のそれた火球はビルの屋上部分を破壊すると

十一使徒の魔鏡を突き破る勢いで接触した。数十枚の結界を砕き火球は消滅した。……双方の異常な威力に啞然とするしかない。掠めただけでも紫音の左手は酷い火傷をおつていた。

眼前にイリューシャが現れ首を掴まれた。……息が詰まる……そのまま吊り上げられた。

「……オノレ……一ソゲン……チヨウシニノルナ……ザンネンダガ
ロコマテダ」

イリューシャは額から血を流し呼吸も乱れていた……あの爆発の中でこの程度だなんて……やつぱりイリュは凄いなあ……

薄れる意識の中で右手をイリュの頬に添えた。優しくその頬を撫でる。

勿論イリューシャならば耐えるだろ?と予測しての行動だったのが……

血を流す友人の姿は見るに耐えないものだった。自分がそうさせたとなれば尚更だった。

紫音の瞳から涙が零れた。

「……イリュ……ごめん……ね……痛かったでしょ……」

「……ムスメ……ザンネンダッタナ……ワタシノカチダ」

「……フフッ」

その言葉に思わず微笑んだ。

「?……ナニガオカシイ」

「それもごめん……この勝負は私の勝ちだよ」

その瞬間イリューシャが光の柱に包まれる。イリューシャの手が緩み紫音はその場にゆっくり崩れ落ちる。

「……3分、経つたからね」

そこまで意識はなくなつた。

ヤミノフルヨルフ

気が付くとドアの前に立っていた。何処かで見覚えのあるドアだつたが……気のせいかもしれない。

(入りなさい)

そんな声が聞こえた気がした。

ゆっくりとドアノブを回し中に入った。中は円筒形の部屋になつており、中央にはドーナツ型の円卓があり、さらに中央に巨大な水晶が鎮座しており、外の様子を写し出していた。

そこにはイリューシャと対峙する私の姿が写っていた。

先程の戦闘でも感じられたが魔眼の発動と同時に私の意識は分割されるらしい……（思考分割）と（思考加速）の一いつが自動的に発動するらしい。本格的に使用したのは随分と久しぶりだったので過去もそうだったかは定かではない。戦っている私に対して指示みたいなものが出ていたのがうろ覚えに思い出された……その正体がこの思考分割の様だ。

(そう……ここには思考分割により作り出された脳内世界……私たちは分割された貴女自身)

水晶の奥に一人の人物が円卓に着席していた。一人は髪の毛も服も全てが白に統一された『私』もう一人は同じく全てが黒に統一された『私』

(座れ)

先程違う、やや高圧的な口調……黒の方だな。

取敢えず言われた様に座る。

(私は貴女の中にある保守的な思考から生み出された紫音)
(俺は攻撃的な思考から生み出された紫音)
「はあ……」

つまりこの謎の魔眼のオプションとして発動したら思考が分割され 相談役が一人用意される……と

(……やけに軽い例えだが…… まちがつたりやしない)
黒紫音が呆れた様な顔をする。

あれ?喋つてないのに答えてくれた…

(私達は貴女の思考の一部ですか?… 答えていろ)と今は共有されています。)

成程……それで……今から何をするの?

(…作戦立てるに決まってるだろ)

(無策ではイリューシャを三分間抑えられませんよ~)

「つむむ……確かに。

(マジで無策なのかよ?……)

(その為のこの『チャットルーム』ではありませんか)

……なんか楽しそうだね。

(さあ早速ですが本題に入りましょう!… 基本知識を転送します。)

白紫音が目を閉じると脳内に情報が流れ込んでくる。

『チャットルーム使用規約』

ルーム内の時間はほぼ停止状態に近い。

三人の考えは共有される 秘匿権はオリジナルの紫音のみが保有

論議により決定された件はオリジナルの紫音の行動に反映される。

時間の流れは変更可能 巻き戻す事は出来ない。（決定された行動はほぼ取り消し不可）

魔眼発動時以外でもオリジナルの紫音が望めばチャットルームに入室可能。等々……

ふむふむ……

（では、イリューシャとの対戦については……）

（まず正面からは無理だな：動きを止める方法から考えるか？）

（黒紫音の意見には賛成です。紫音は何か考えが？）

「……ついん呪文が勝手に足止めしてくれるのは無いかな？」

（……影の捕縛者などはそれなりに有効かと？）

（まてまてー白紫音ーその呪文は上級呪文だ。成功率に不安がある。）

（ふむ確かに……黒紫音の言つ通りでした。成功率は28%ですね）

「……」

（うーん……まずは高速詠唱で力量差を詰めよう）

（黒紫音ーそれは良い考えですね）

（身体加速と身体強化も欲しい所だな。白紫音、熟練度の差をどうにか出来ないかな？）

(…そうですね…限定期性強化はいかがでしょう?)

(なるほど…リスクはあるが水系列限定期にすればそのリスクもあつて無いような物だな…どうした?紫音?)

「いや…白紫音とか黒紫音とかわかりにくいから…シロンとクロンとかどお?」

(……)

(……)

「あれ?もしかして嫌だつた?」

(……紫音…今はそれ所ではないでしょ!…イリューシャを救うために有効な手段を選ばなくては……)

(そうだぜ!シロンの言つ通りだ!…べだらないことに言つてないでお前も考えるよ!…)

(話を戻しましょう。クロンの言つおりにまでは自身の強化を……)

少し嬉しくなった。いくら私自身の思考とは言えなんだか友達と話をしている錯覚にとらわれた。

クロン辺りは『べつ…別に気に入つたりしたりしてないんだからなつ!』とか言つてくれると萌えるかもしれないけど……

(あるあ…ねーよ!私はシンデレージやないしつ…)

「しまつた!思考を共有してたんだつた!」

(別に私は氣に入つてますよ?)

「…」の思考に関してはもう触れなくて良いです。

「」の後は真面目に議論して水蒸気爆発起こさせる方向で話をまとめた。

やがて時は動きだし、私とイリュの戦いが始まった。中央の水晶に写し出される自分の姿はまるで映画か何かを見ているみたいで…

…でも目を閉じて意識すれば戦っている自分の意識も感じられる。

巨大な爆発をみるとシロンとクロンが立ち上がった。

(私達の勝ちね…三分経過したからね…それでは紫音…またの機会に)

(じゃあな…べつ…別にこの名前を気に入つたりしてないからなつ!)

クロンが意味ありげな笑みを浮かべてそう言つた。…少し萌えた。

私は立ち上がり入つてきたドアから退室する。ゆっくり目を閉じて…意識が一つに統合される。

ゆっくり目を開ける。身体中が悲鳴を上げているように軋む。目の前には天空から降り注ぐ光の柱に閉じ込められたイリューシャがいた。これなんだっけ?

「聖天使の光牢獄だ」

セラファイムコキューション……天界人が魔界人との戦いの為に生み出された

上級捕縛結界…魔族の体内の魔素に作用してその動きを封じる…

…だつたかな?

背後から聞こえた声に少し体を起こした。あの男が私の側にいた。…左手の傷を癒してくれているらしい。

「応急処置だ…あまりこちらに魔力をまわせないから気休めにしかならないが…」

癒しの光…どちらも光属性魔術だ… その癒しの効果が心地

ヘルライト

よくてこのまま眠つてしまいそうになる。自分の手も酷い有り様なのに……彼がイリューシャの『マスター』だろうか？

「……オノレ……マタキサマーシテヤラレルトハ……」

イリューシャが呟く……でもその声は別人もモノだ。地面に横たわったままイリュを見た先程の様な殺氣は感じられない。

「……コンナコムスメニシテヤラレルトハ……オマエハコノムスメニトツテモ、トクベツナソソザイラシイ……」

「……お願い……イリュを返して！」

軋む体に鞭打つて体を起こした。

「……コレイジョウ、コノカラダニキズヲツケラレテハカナワンカラナ……キヨウハソノムスメニメンジテテヲヒコウ……シカシ、ツギハナイゾ」

そう言い残すとイリュはがくりと頃垂れた。からだを取り巻いていた炎も消え去りいつも通りのイリュに戻つていた。

「……大丈夫だ」

直ぐに駆け寄つた彼がイリューシャの容態を見てそう言った。

「よかつた……」

その言葉を聞いて紫音は意識を手放した。

イリューシャが気絶したことにより、いまや瓦礫と化した模倣空間の効果が切れ、光の粒子となつて消えてゆく……と、同時にこの一帯を隔離していった結界を解除する。折り畳まれて行くように結界が収縮され、やがて 地面に吸い込まれる様に消え去った。

結界は現実世界にはダメージを残す事無く その役割を十分に果たした。

視線に気付いて振り替える。建物の陰から顔を覗かせているのは 紫音が救つたあの 妖魔の子供であつた。 本来ならば存在を許す訳には行かないのだが……暫く考えた後背を向けた。暫く様子を見てみようと思った。 あの妖魔の中に僅かだが変化を感じとれたからだ。

「……さてと」

横たわる紫音を脇に抱え、イリューシャは肩に担いだ。

「…まるで人さらいじゃないか

ビルのガラスに映る自身の姿を見て、そう言わずにはいられなかつた。どちらにしろ 人よけの効果も切れる頃だ……こんな姿を見られたら本当に通報されかねない。

ゆびさきで印を空中に描くと 自動ドアの様に空間が割れ その中に姿を消した。それを見つめていた妖魔だけが後に残された。

ワカクサノーワー

あの人の部屋から物音が聞こえた気がしたので、読みかけの本に栞を挟むとドアから顔を覗かせた。

中央が吹き抜けの階段になつていて、上三階にあるあの人の部屋のドアが良く見える。

やはり微かに物音が聞こえる。時計の時刻は既に10時を過ぎていた。

今夜は大したこと無い……なんて言つてた癖に、それに今夜は少し胸騒ぎがしていった。

階段をゆっくり登り、あの人の部屋のドアに耳を済ました。……微かな物音にあの人の呻く様な声が聞こえた。

ノックをすると返事がかえってきたので、ドアをゆっくりと開いた。中にはイリューシャと見知らぬ女性をベットに横たえていた彼の姿があった。

「…………ひと、さらい？」

「…………やつぱりそう見えるか？」

私の言葉にあの人笑った。自分でも同じ想像をしていたらしい。ふと視線をベットに移した。見たことのない顔だった。制服がイリューシャと同じ様なので、学園の知り合いだろうか？

「…………誰？」

「…………イリューシャの友達だ」

「…………何があつた？」

第三者を巻き込むなんてらしくない。今までにない事態にそう問う

かけた。

そもそもイリューシャ達がこいつした戦闘行為をする事自体間違っているのだ。

「……んー 実の所俺にも良くなわかんねー …… 説明は後でするから先にこいつの手当をしてくれる?」

そう言つて氣を失つている黒髪の女性の左手を指差した。……火傷の痕……イリューシャとケンカでもしたのだろうか?……もしかしたら彼女が噂に聞く「紫音」かも知れない。

「アイリス」

名前を呼ばれての人を見た。ベットからイリューシャを抱き直していた。

それを見たとたん 私は複雑な気分になつた。

「…… 「手当て」?」

「……何だよ…何だか不機嫌だな。」

生まれつき感情を表に出せない私の些細な変化を感じ取ってくれた事はとても嬉しいのだが……今はそれはそれ。

「……なんでもない」

自分で出来る精一杯の嫌悪の態度を示してみた。棒読みのその台詞に一層嫌味を込めてみた。

それを見たあの人苦笑いを浮かべて私の頭に手を乗せた。私の蒼白金の髪をそっと撫でる。私の髪は魔界でも珍しい色をしている。母が白金色、父が蒼色なので一人の良いとこ取りと思っている。

「今夜は必要ない……彼女の後は俺も手当してくれないかな？」

「？！」

そう言つて見せた右手は悲惨な有り様だつた。皮膚は焼け爛れ一部は炭の様になつてゐる。繋がつてゐるのが不思議なくらいだ。

「……馬鹿なの？死ぬの？」

損壊具合からして優先度はこちらが先だ。使い物に成らなくなつてしまふ……一刻も早くこの現状を維持しないと……良く見たら「時^ス間停止」^{トッピング}の呪文が施されていた。これならなんとかなりそうだ。

「……馬鹿では……ないみたい……」

「そうか……じゃあ頼むな」

そう言い残し あの人はイリューシャの部屋に向かつた。

あの人ベットに横たわる紫音を見た。……なるほど可愛らしい顔立ちをしている。イリューシャが最近入れ込んでいる存在だと聞く。椅子を隣に置くとその腕の治療を始めた。まずはその左手を指定範囲に認定し

「再生」^{リカバリー}を施す。淡い光が患部に溢れ、その傷を癒してゆく。その他には外傷はみられないで暫くすれば気が付くだろう。静かに立ち上がると部屋の灯りを落として階下にむかった。

あの人部屋を出たところで隣のイリューシャの部屋から出てきたあの人に出くわした。その目が紫音の容態を気にしていたので大丈夫の意味を込めて頷いた。

「……次は貴方の番」

「 よりしへ頼むよ 」

二人揃つて一階にあるオープンリビングに向かつ。この建物は一風変わった様式で、円筒形の構造をしている。吹き抜けの中央は一階から三階までを繋ぐ階段で各階にキッチン、浴室、オープンリビングを完備している。一階部分は通常の建物と変わらず、管理人室、キッチン、食堂、談話室、書庫などが完備されている。

…… そう、此処は学生寮なのである。と言つても寮生はまだ私を含め4人しかいない。かくいう私も昨日此処に到着したばかりなのだ。の人とイリューシャは面識があつたがもう一人にはまだ会っていない。週末は実家に帰るらしいので顔合わせはもう少し先になるみたいだ。

オープンリビングに来るとお互いに向かい合わせにソファーに座つた。

「 … 時間停止を解除して … 」

「 … ん … お手柔らかに頼む 」

腕を覆つていた重い空気が霧散した。すかさず「固定」と「治癒再生」^{ホルム}を施す。淡い光が腕を包み、炭酸水の様な気泡が傷を癒していつた。

「 … お見事 」

「 … その気になれば … 自分で出来る筈 」

「 僕は雑な性格でね … 元通りにはならないかも知れないからな 」

そんな事は嘘に決まつている。しかしそれが私の為につかれた嘘なので内心嬉しい気持ちが沸き上がつた。

(ああ … 何度味わつてもこの『嬉しい』気持ちは実に心地が良い)

私は生まれつき感情というものが解らなかつた。怒りつてなに？悲しいつてなに？目の前に起こる事が全てであり、ただそれだけだつた。赤子の頃から手のかからない子供…と思われていたみたいだが、実際は表現出来なかつただけなのだ。当然感情による涙や笑いなどとは無縁であつた。

原因は私の生まれに起因するものだが、もうひとつはそれに伴い体内の魔素の生成異常が原因だつた。

基本的に魔族は体内で魔素を生成している。人間にしてみれば、魔素を取り込む事と同じだ。それぞれ個体に合つた魔素を生成し循環、排出している。その配分は多くても少なくとも身体に異常をきたすのだ。ましてや体内で生成出来ない事は致命的であつた。両親から近い配分の魔素を体内に送り込んでもらう事で生命活動を維持する事で精一杯だつた。故に感情を表現できないでいた。但ただ、生かされているだけの存在、それがこの私、アイリス・H・ギゼルヴァルトなのだ。

ワカクサノーワン

「…………？」

目覚めると見知らぬ天井だった。体を起こすと室内にも見覚えはなかった。クローゼットと机、必要なもの以外置かれていない部屋だつた。部屋の時計の音がやけに大きく聞こえた。針は11時を指していた。記憶を手繕り……ふと左手を見る。あの時受けた傷は何処にも見当たらない。魔眼を使用した後にくる倦怠感も今は綺麗に消えていた。

不意にドアが開き女性が入ってきた。蒼くそして白い幻想的な色の長い髪に、魔族特有のつり上がった耳……その手にはティーカップやポット一式が載せられたトレーを持っていた。

「……気がついた？……どこか痛い？」

「だつ大丈夫です……あの……此処は……それからイリュ……イリューシャは……」

その女性は室内のテーブルに一式を置くと紅茶を入れ始めた。

「……此処はイリューシャの寮……彼女は眠てる……無事」

その言葉に紫音は胸を撫で下ろした。
慌てて女性に向き直る。

「わ……私紫音つて言います、貴女が手当してくれたのですか？」
「……応急措置はあの人人がした。私は仕上げだけ。……紅茶で良い？」

その淡々とした動作には何処か作業的な物を感じた。言葉に飾りがないと言つか……必要な事以外は話さないと言つか……

「……愛想悪いから……氣を悪くしたら」「めんなさい」

「いえっ……とんでもないです」

顔に出ていたのだろうか？彼女にそう言われて紫音は身なりを正した。そんな紫音の心を知つてか彼女は尚も続ける。

「……私は感情表現というものが苦手……簡単に言つと病氣の様なもの」

人形のような白く整つた顔から語られる言葉はそれだけで美しく眞実味を一層引き立てた。やはりその表情から感情を読み取る事は出来ない。

「……でも今は理解は出来る、表現は出来ないのけど……」紫音も学園の生徒？」

「ええ……じゃあ貴女も？」

返事の代わりに頷いた。

「……昨日来た、通うのは来週から……自己紹介忘れてた、私は……アイリス……よろしく」

そう言って手を差し出した。

つられてその手を握り返した。アイリスはその手をぶんぶんと振るとそつと離した。

「……紫音も……友達……嬉しい」

表情こそ変化は見当たらないが、その頬に微かに赤く染まつた。それを見た紫音も嬉しくなつた。

「いじらじそ……よろしくね」

笑顔を見せると差し出された紅茶を受け取つた。

「やっぱ……あの入ってあの黒髪の男でしょ？」

「……アーガイル？」

「うか……アイツ……そんな名前だったのか……いかにもオレオレっぽい感じだつたしね……」

「で……彼は今何を？」

まさか寝てる……なんて事は……

「……多分……管理人さんの所……それよりも……紫音……お風呂……」

……

アイリスは足元からタオルとガウンを取り出した。その両方に学園のエンブレムが在る事は、此処が認定された学生寮である事を表していた。

「ああ……そうね……お言葉に甘えてやつさせて貰つわ」

「……一緒に……入つてもいい？」

「えつ？……うん、いいよ」

相変わらずアイリスの表情からは感情を読み取れないが、一瞬、雰囲気が柔らかくなつた気がした。

「あ……下着どうしよう…」

上はともかく、下は流石に穿かないわけには。するとアイリスが立ち上がり、大丈夫と告げた。目を閉じ、胸の前で両手を合わせる形で魔力を集めた。やがてそれは球体となり、アイリスの魔力が注がれる。それは形を取り始め……一枚の女性下着が出来上がった。それを手渡される。淡い水色の兔のバックプリントが目立つ。

「……創造魔法・下着生成パンジーーカリコエイト」

やり遂げたアイリスは何処か誇らしげだ……ええ……凄いです……凄いですとも……名前も凄くしつくりきますよ、魔力を物質に変換する創造魔法ってだけで凄くレアですけど……生地だつて申し分ないですよ?この兎ちゃんが可愛いのは認めますが……これを私に穿けと?この手の物は随分と昔に卒業した筈の私に穿けと仰るのか?

アイリスが眩暈を起こしたみたいにして椅子に座り込んだ。目を閉じてもたれ掛かっていた。

「大丈夫?！」

「……魔力使いすぎた……」

パンツにどんだけ使うんだよ……創造魔法恐るべし。特に私が出来る事もなく、ただあたふたとするばかりだった。暫くするとアイリスは普通に目を開けた。

「……魔力を補給していくから……先にお風呂入つて……場所はこ

の階の向いの側のドア 「

そう言ひとドアを開けて出ていつてしまつた。……えーと……取り敢えずお風呂に行けば良いのかな？ 管理人さんとかに挨拶とかしないで大丈夫だらうか？ まあなに話していいかわかんないし……いいか？

何か体に先程の戦いの余韻が残つてゐるみたいで早く洗い流したい気持ちもあつた。お風呂セットを抱えると部屋の外に出た。

「…………うわあ…………」

その建築様式に息を飲んだ。普通の一般家庭で育つた紫音からみればこの建物の構造は映画などで見る海外の ホテルの様で感動を覚えた。円形の廊下の脇にはそれぞドアが3室ずつあり 正面にはオープンリビングとその横にバスルームらしいドアがあつた。中を覗くと 大きな鏡台 洗面台 洗濯乾燥機が見えた。……更に奥の開き戸を開けると露天風呂風の造りをした浴槽が広い空間に広がつていた。……あれ？ 広すぎない？ このバスルームだけでさつき部屋の倍はあるけど……確かに学園にも似たような場所がある事を思い出した。空間魔法と呼ばれるもので 中身は別の場所と繋げられていると聞いた気がする。

「…………じゃあ 早速…（^o^）」

衣服を脱ぎ去り洗濯乾燥機に放り込みタイマーを回す。 はやる気持ちを落ち着かせながら浴槽へ……

「…………ああつ…………生き返る～～」

自分のアパートのユニットバスではこんなに体を伸ばして入る事な

ど出来やしない……久しぶりに味わう解放感にただただ酔いしれていた。

二つの針が交差して、これから始まる紫音の長い一日の幕開けを静かに告げていた。

ワカクサノーロ

目覚めるとベッドの中だった。自分の部屋だと認識するまで時間がかかった。……記憶を手繰り自身に起じた事を思い出して行く。

(「に帰つてきたって事は…全部終わつたって事か……）

暴走した内なる魔性が紫音と対峙した事を思いだし嫌になる…親友に対してもうて事を…暴走したとはいえ、この手にかけようとするなんて…一人で唸つて枕に顔を埋めた。

(……そう言えば紫音はどうしたんだろう?..)

アーガイルが彼女の住まいを知っている筈はないし、紫音も怪我をしていたから…此処に連れてきたと考えるのが妥当だった。一体、自分はどんな顔をして会えれば良いのだろうか?

(あはは…殺しかけちゃつてごめんねつ…)

ないな…それにこんな自分をどう思つだらうか? 故郷では化物と呼ばれ忌み嫌われていた自分の正体を見せてしまったのだ。頭を搔きむしりながらベッドを跳ね起き、室内をうろつろし始める…

(…もう以前の様には出来ないかも)

そんな考へがイリューシャの気分を更に落ち込ませた。思い起こせば、紫音が転校初日にイングリッシュのドリロ調に困惑していた所に声をかけたのがきっかけだった。……普段ならそんな事はしない筈

なのに…マスターに救われこの世界にやつて來たが、自分の存在意義を見いだせずにいた日々が続いていた。ハツ当たり的に始めた彼らとの討伐も紫音と出合つてからは気持ちに変化が現れていた。

守りたい。

紫音やクラスメイトのここの世界をこの学園を…

私の力は破壊してしまうものだけ…それでも私はこの瞬間を守りたいと願つた。しかし…

「…駄目だなあ…私は…」

再びベッドにダイブすると同時に何処からか悲鳴らしきものが聞こえた。

「?…紫音…」

イリューシャは飛び起きたと部屋を飛び出し声の主に向かつた。

ワカクサノーワ4

「お風呂～お風呂～」

アイリスは軽快に階段を駆け上がり自室の部屋に飛び込んだ。直ぐにクローゼットから着替えを取り出す。紫音との入浴の為だ。

誰かとお風呂に入るなんて随分と久しぶりだ。アイリスの二人の姉も今は多忙の為にゆっくり過ごせる時間は少ない。それでも自分に会いに来てくれるだけで嬉しかった。しかし今回はまた別の楽しみなのだ。家族以外との入浴など初めての経験だったのだ。

「……紫音驚くかなあ？」

今の自分で見て。魔素を補給したアイリスは先程の物静かな面影ではなく躍動感に溢れていた。

アイリスは自分をよく携帯電話みたいだと思つ。

今の自分が充電直後の

(全ての機能が使える状態)

時間の経過と共に魔素を消費して行き

行動に制限がかかり始める状態……

(電池残量が不足しています)

魔素を激しく消費し貧血の様になる自分、……やがては命を落としかねない。

(充電してください…………ピー)

電源の切れた携帯電話は豊富にある手段で充電すれば再び復活するが、

私は魔素が尽きると死んでしまう。もつひとつはアイリスの充電手段は限りなく少ない事だ。

もしもその方法を間違えれば激しい拒絶反応で生死の境をさ迷いか

ねない。

着替えを抱えると、部屋を飛び出し廊下の先にある浴室に駆け込む、同時に衣服を脱ぎ去ると浴室の引き戸を思い切り……

「紫音お待たせ——！」

……開け放つた……………が 紫音の姿は無かつた。

「…………あれっ？」

田の前には檜の香りが漂つ和風の浴槽が在るだけだった。

……あれ? 何だらうこの違和感は?

私は間違いなく一階の自分の部屋から此処に来た。……廊下の向かい側のこの浴室に。

……紫音にもちゃんと伝えた。廊下の向かい側にある浴室の場所を

……あの人部屋で……？！……二階にあるあの部屋で！

違和感の正体に気付いたと同時に紫音悲鳴が聞こえてきた。

ワカクサノーロ5

「…………」

なんで紫音が此処にいるんだろう?

それも……裸で……いや、自分も裸なんだが。

自分は浴槽の引き戸を開け放つたままの格好で
彼女は浴槽から立ち上がったままの格好で……

「…………いつ…………」

「…………いつ？…………」

いやああああああ…………

……5分前に遡る……

「…………疲れた」

部屋に戻ると紫音の姿は無かった。

ああ……アイリスが一緒に風呂に入ると喜んでいたな……

そのままベッドに倒れ込む。 いつもの自分の布団の匂いと 柔ら

かな甘い香りがした。先程まで此処に眠っていた紫音の事を思い出した。

(…………いい)

はつー？ イカンイカン……何を妄想しているんだ！

身体を起こすと大きく伸びをした。ふとガラスに映る自分の姿が目についた。長い銀の髪……それは先程までのアーガイルの黒髪ではない。アイリスに魔素を移植する為に本来の姿に戻っていた。

カイル・アルヴァアレル

それが彼の本当の、しかし偽りの姿。

しかし……彼女を巻き込むつもりは無かったのだが……何でも無いって訳には行かないだろ？ しなあ……

彼女の力には興味があるが、こんな事に巻き込んではいけない存在だ。出来れば今後も変わらない平穀な日々を送つて欲しいのだが……

実習の時の様に メモリー・ロスト 記憶消去を使うには経過時間が経ちすぎているし、内容も強烈過ぎて消せない割合の方が高い。そしてなにより紫音への影響が懸念される。

「…………こんな時にはわっぱりするか……」

ドアから出ると浴室に向かつた。

廊下を歩いていると 下の階の廊下をアイリスが走つて行くのが見えた。

普段なら感情が読み取り辛いのだが……

今の彼女は全身で喜びを表しているのが一目で解るほどだ。

脱衣所に入ると衣服を脱ぎ去り引き戸を開いた。

疲れていたからか……不思議に思わなかつたんだ……洗濯機が動いていた事に。

* * * * *

「…………アイリス遅いな…………逆上せりやつよ…………」

湯槽でぐつたりとした表情で紫音は咳いた。…………いかん……このままでは溺れてしまいそうだ………………いいまひとつシャワーでも浴びて…………

ふらふらと湯槽から立ち上がるのと入り口のドアが開かれたのは、ほぼ同時だった。

「…………」

「…………」

アイリスが来たのかと思つたが何か違うようだ。…………アイリスではない見覚えのある顔…………！！

カイル：アルヴァレル！――何で此処に？――…………とゆうか、何故に裸

つ（ノ）（）――！

……いや、風呂なんだから当然か……

までまで！紫音！何を納得しちやつて…………てゆうか何処を見ようとしてるのよつ！見ちゃダメだ！見ちゃダメだ！見ちゃダメだ！見ちゃダメだ！見ちゃダメだ！見ちゃダメだ！見ちゃダメだ！…………カイルは何見てるの？

彼の視線を辿ると……私自身にたどり着いた。

…………あつ…………あ

ああああああああ？！

「……………いつ
……………いつ
……………？」

そして、私は力の限り叫ぶのだった。

ワカクサノーロ

叫び終わった後、足元がおぼつかなくなつた。

ああ……やつぱり長湯しそぎたなあ……

……何かを叫びこちりに向かつて来るカイルを見たのを最後に意識を失つた。

わつわから氣絶してばかりだな……私

「……おひ……おこひ……」

叫んだ紫音はそのまま糸の切れた人形の様に湯舟に沈んでいった。慌てて飛び込み 寸前で抱き抱えた。

ちくしょー!……皿のやつ場に困るじやないかー! 下を見る
な下を見るなー! ! ! !
取り敢えず脱衣所に…………柔らかいな…………
!? いかんつー考えるな考えるな!
えーとえーと

ブランク定数のCO DATAの 推奨値は $H = 6 \cdot 626$ 06
9 5 7 (29) $\times 1 \cdots H$ エッヂだと?……いや! これは
事故だ! それにこれは救命行為であり、柔らかいけど、やまし
い事は何も無い!
……肌が密着し過ぎなんだよおおおおお ! ! ! すべすべじゅ

んかあーー！

何とか脱衣所まで運ぶとタオルを巻き付けたが、色々と田に焼き付いてしまった。……不可抗力だ。

……でも

あああああ……俺いろいろと駄目かも

いや大丈夫だ。ここは防音だから聞こえてはいない筈、まずは服を着てからなに食わぬ顔で無かつた事にすれば……ズボンに手をかけた所で激しくドアを開け放ち、イリュとアイリスが踏み込んできた。そうか……魔族つて耳がいいもんな……いや関心している場合じゃねえか……何でアイリスまで裸何だよー

「……お前達ちよつび良かつ」「……何をしたの?」

俺の言葉はイリューシャのやけに凄味の効いた言葉に遮られた。

「……いやこれは……「変態」……」

弁解の言葉もアイリスに両断された。

いかんな……誤解されている…………まあ無理もないナゾ

「……これはだな、風呂に入らうとしたら何故か紫音が入浴していくだな……」

俺は悪くないー……しかし言い訳つたらしく弁解しつつ、いよいよズボンを履く姿は……なんか泣けてくるな……

「?ー……紫音の身体の自由を奪い、あんな事やこんな事をつー

……俺の話は聞いてくれて無かったのですね（Ｔ・Ｏ・Ｔ）

イリューシャとアイリスの魔力が跳ね上がった……逃げるが勝ちだな。

（空間跳躍）で室外に転移しようとしたのも束の間室内の色が失われ、白と黒のモノクロに染まる。

「！？（ラプラス）！てめえ！」

この空間のみ 外部と遮断されてしまつていた。
イリュ達の魔力を感知した この建物を管理する存在が被害を最小限にする為の手段を実行したのだ。

しかもイリューシャとアイリスはそれぞれ火球ファイアボールと氷球アイスボールを発動中だ
……何で魔族は直ぐにキレて魔法をぶつ放したがるのかね……イリュはともかく、アイリスは見た目は父親には似てないが、性格は似ているのかも知れないな……

自らに迫る危機にも関わらず、そんな呑気な事を考えている。
この程度何て事は無いのだが……自分の足元には気絶したままの紫音がいる。

……やれやれ……あいつらそんな事したら紫音まで危険だとわからぬのかね？

回避する為に紫音を抱き上げ様と手を伸ばした……

その肩に手が触れた瞬間 紫音が目を開けた。

「…よう、気がつ…」「Jの変態…」「

突き出された掌が見事に顎を捕らえ、カイルの脳を揺らした。それだけに留まらず、蹴り上げられた右足が股間に決まった。

「…………」

流刃のカイルも護るべき対象からの攻撃は予想外だった様で、男性としてはどうする事も出来ないこの痛みに悶絶するのだった。

「……厄日だ…」

そう言い残し前のめりに紫音に倒れこんだ。

「やつ…ちょっと…！」

のしかかられてジタバタする紫音を見て、イリューシャとアイリスは我に返った。

「…カイルっ…！」

慌てて駆け寄るが見事なまでのコンボ攻撃は、カイルの意識を見事に刈り取っていた。

「カイル…カイル…死なないで…！」

ポロポロと涙を溢すアイリス…………いや…死にませんから。

周囲の風景が色を取り戻す……（ラプラス）が安全性を認識して、周囲との遮断を解除した。……と、同時に脱衣所の扉がゆっくりと

開かれて一人の女性が仁王立ちしていた。

イリューシャとは違う柔らかい印象の赤毛は毛先がくるんくるんにカールしており、そのピンクのネグリジェと良く似合っていた。

「……この寮では健全な性行為以外はみとめませんよっ！」

管理人　　アイリシアであった。

ワカクサノーロ

……前略お母さん。

私は今何故か正座させられています。

イリュとアイリスも一緒に。

目の前のソファーにはカイルが顎を冷やしています。その隣でアイリシアさんが笑顔なんだけど……笑顔なんだけど、決して笑ってはいません……怖いです。

「あのね、使い物にならなくなったりどうの?」

……どうするのでしょうか?

「困る」

「悲しい」

「……わかつません」

イリュ、アイリス、私の意見だ。

「それにこんな夜更けに大騒ぎして……変態変態と連呼して、通報されたらどうするの?」

「困る」

「悲しい」

「……すいません」

「……まあいいわ……監督我も無かつた事だし……」

「……俺は?」

「あのね、カイルちゃん、良い思いしたんだからそれくらいは我慢

して当然と思うのだけど……ねつ？」

何故かこちらを見るアイリシアさん……見ないで……（Ｔ・Ｏ・Ｔ）制服は洗濯してしまったものだから、代わりに大きなＹシャツを着ている。これはアイリスが貸してくれた。

ふとカイルと目が合い何となく気まずい雰囲気になる……とゆうか恥ずかしい。

「……それと、あんた達！ 直ぐに魔法を使わないの！ キレたらポンポン爆破してくるから魔族はアホの子だつて思われるのよ？」

立ち上がるトイリュとアイリスの頭をペしぺしと叩いた。

「……でも……お姉ちゃん……」

「……アイリス……貴女にとつて魔力は命そのものなのよ？ 痴漢退治に半分も魔力を使つたりしたら駄目でしょ？」

「……痴漢じやねえよ……」

「……姉妹なの？」

「いや、こちらの世界でつて意味で」

「お前ら、本つ当に人の話聞かないのな」

カイルは弁解は無理と察してそのまま黙りこんだ。

「……さて、えーと紫音だつけ？ あんた今日は泊まつていきな」

「えつ……はい……良いんですねか？」

「良いもなにも、こんな夜更けに帰らせる訳にもいかないしなあ……なあカイル？」

「……何で俺に振るんだよ」

「べつにつつきししし」

アイリシアが意味ありげに笑う 隣のアイリスが カイルが泊めてくれる様にお願いしたんだよ と教えてくれた。

「うん、素直に感謝しておこう。」

「…まあ折角だからね、さて布団の用意でもするかね」

「…私も手伝う」

ソファーから立ち上がったアイリシアを追つてアイリスも廊下に向かつた。

「紫音…私の部屋で眠りなよ」

イリュが話しかけて来たが…何かよそよそしいな…気にしているのかな?

「…うん…イリュは大丈夫?」

「ああ…その…紫音さつきは…」

「私は気にしてないから。」

らしくないので先に言つてやつた。

「あ、でも私の眼の事は皆には内緒にしといてね。」

「…うん…出来れば私の事も内密に頼む」

「…わかった…お互いの秘密を共有するなんて…でも、親友だからいいか」

「…そうだな、紫音なら」

お互い顔を見合せて笑つた。

「……ついでに俺の事も内密に頼む」

「…………わかつたわ……覗きの件は忘れてあげる（＝＝）」

「ああ助か……ちげーよーてか覗きじやねえし…（ノヽ＼）」

いたずらっぽくいった言葉に見事にボケてきた……ソニツ…ノリツ
ツ「ノヽ＼上手いな…

氷を脇に置くと私の正面で膝に肘を付けて両手を組むと真っ直ぐに
その澄んだ蒼眼でこちらを見つめてきた。白銀の長髪がはらりと…
しなだれる……初めてまともに見たけど……ソニツ…イケメンだ
つ！

？……ふと違和感を感じた。

学園でも彼を間近で見た気がする……その髪は白銀だつただろうか？
その瞳は蒼眼？ 駄目だ駄目だ！ 本能が警鐘を鳴らしている。これ
以上踏み込むと戻れなくなる と。

その答えが喉元から出かかっていたその時　彼・カイルが不適に
口許を歪めた。

「……わかつた、その件については忘れない……記念に覚えて
おこう。…………お互いにな」

「はつ？…………あ…………ああああああああああつ？…」

お互いに……そ、私としても忘れる事が出来ない位に見ちゃつた
けど……私だつて見られちやつてるのみのよね……

「じゃあ、そうゆう事で」

「ちゅつ……待つた待つた！ わかつたから…………ああああつ…」

引き留めようと立ち上ると、慣れない正座なんにしてたものだから、足が痺れてそのまま彼の方に倒れこんだ。

「おつと…」

カイルが上手く支えてくれた。……なんか近いな…さつきの事を思い出して、つい赤面する。そんな私の耳に彼はこう囁いた。

「…危なかったな…イリュウサギのぱんつあーが丸見えになる所だったな」

はつ？ て、ゆづか、何であんたが知ってるの？！

感謝の言葉を述べる代わりに、右手を振り上げて口笛を吹いた。

「IJの…変態つー」

夜の廊下に小気味良い音が響き渡った。

ワカクサノーワ

朝になつた様だ……
やはり見知らぬ天井だった。

私はイリューシャのベッドで眠つていた。そのイリューシャは床に敷かれた布団の上で、少し残念な格好で寝ていた。

……アイリスがいない。

昨晩、イリュに抱き枕の様に抱き締められたままうなされていた筈だが……

ふと、窓の外からの音に気がついた。

イリュを起こさぬ様にそつと窓際に近付くと、庭の光景が一面に広がつた。

若草の庭

広い庭は一面の薄緑の若草が朝日を浴びて輝いていた。その奥の庭木の先には塀があり、その先は海が広がつている光景はまるで違う世界の様な印象を与えた。

その中央に二人の人物が見えた。

一人はベンチに座る蒼銀髪……アイリスとその視線の先……一人何かの構えをくねくねやつてる変態……カイルだ。

……あ、くしゃみした。

不意にこちらを見上げると目があつた。

(……お前、また変な事考えただろ)

……と、その目が物語つていた。

その後アイリスもこちらに気付いて、何かを掌からふうっと吹く様な仕草をすると、小さな光がこちらにやって来た。窓をすり抜

けて来たそれは、小さなウサギの形になり紫音にメッセージを伝える。

(……紫音もおいでよ。着替えはそこにあるみるよ)

そう言つと、光が弾ける様に消え去った。

(伝言の精霊) 気軽に任意の相手にメッセージを遅れる事から S MS(精霊メッセージサービス)とも言われているとかいなか

…。

指定された場所にあるジーンズとTシャツ…… 広げてみると、先ほどのメッセージを伝えたウサギの姿があった。

(……「れ…下着にもついてた奴だよね?」)

ウサギ大好き♪… みたいなイメージが定着しそうで少し気が滅入つた。

まあいいか…

急いで着替えたら イリュを起こさぬ様に そつと部屋を出た。

階段を降りると正面の玄関から外に出た。正面の正門からの階段は上品な

白い石が敷き詰められており、建物も西洋の城を彷彿させるデザインであった。

右手の生垣の端に柵があり、その奥に向かって道が続いていた。アーチ状の庭木のトンネルを潜ると、先程見た 庭に出た。その先に一人の姿が見えた。

「…おはよう紫音… 此処に」

私に気付いたアイリスが ベンチをポンポンと叩いた。

「おはよ……早起きだね」

促されて座る私に紅茶が差し出された。……昨晚、アイリスに渡された物と同じ香りがした。私はそれを受けとりそっと口に含んだ

「ありがと……オレンジペコ?」

「……当り……詳しい?」

「いや……母がこの銘柄をよく飲んでいたから……」

体が温まる同時に懐かしい気持ちが溢れた。

「……何してたの?」

「……カイル……見てた」

その視線の先にはカイルがいた。何か拳法みたいな組手?らしき動きをしていた。

凄い、無駄な動きは一切無く的確に急所を打ち抜いている。うわ…

この構えはっ?! まさかつも

……嘘です。拳法なんて解りません。この動きが凄いのかどうなんか私には解りません。

「……何だ……もう起きたのか」

練習らしきものを終えたカイルがこちらに向かつて来た。アイリスがタオルと飲み物を渡す。……良く気が利く娘だなあ。

「サンキュー」

カイルはそれらを受けとり汗を拭つた……昨日から思つたけど…

…」こいつイケメンだなあ。

「…お前ウサギ好きなJKなのな」

そつ言つて少し意味ありげに笑う。

……前言撤回。こいつ…性格の悪いイケメンだ。

「…それで…シャワーでも浴びるかな…覗きに来るなよ?」

「行くかっ! あんたと一緒にすんな!」

私の応えに声をあげて笑いながらカイルは歩いて行く……ペースが狂わされっぱなし……

「…一人供…仲良し」

「? ! はつ? いやいや…そんな訳無いから…」

心なしかアイリスが不機嫌に見えた。

……なんで?

「…私の髪…ホントは翠色だったの」
お母さんと同じ色…と、付け加えた。

長い間治療や投薬を続けた結果、髪の色が変色してしまったらしい。

「…ずっと病室と自分の部屋の往復だった…だから…庭が欲しかったの…自分で庭が…」

感情表現が苦手と言つていたが…とても良い顔をしていた。…
体調が良いのかな? 昨夜より顔色も良いし…なによりその言葉に
力強さを感じる。

「…初めて、此処に来たとき、カイルが言つてくれたの
(アイリス、此処は君の若草の庭だよ)って」

「…良かったね」

アイリスの表情から、彼女がどれだけ嬉しいを感じたのが良く解つた。

その反面、その感情を喜びとして 感じる事が出来ないなんて……

「…感情を持たない私が…可笑しいでしょ?でも、あの時確かに胸が凄く温かかったの…昨日、紫音が友達になつてくれるつて言ってくれた時も温かくなつた」

「…アイリス…それは私も同じだよ」

「…いつか…この私の病気が治つたら…皆と笑つたり、泣いたり、
沢山…遊びたい」

「…うん、一緒に遊びぼつ」

紫音にはその日がそう遠くない気がした。

ハジメテノアサ

「……」

アイリスと二人食堂に入るとそこはダイニングキッチンとリビングが一緒になった広い空間だった。

上品な六人掛けのテーブルの上には豪勢な料理が所狭しと並んでいた。

「ほらほら、紫音も早く座りなよ」

私達を呼びに来たイリュは既にテーブルに着席していた。 いつの間に……

友人の家で朝食をとるなんて初めての出来事に紫音は内心楽しみで仕方なかつた。

「やつと来たか…アリ姉！揃つたぞ！」

ダイニングキッチンから出てきたカイルが手にしたサラダをテーブルに置くとイリュの対面に座つた。

その隣にアイリスが座つたので私はイリュの隣に着席した。

「よつ」

と、キッチンの奥の大きな冷蔵庫のドアをお尻で器用に閉めるとグラスと赤ワインを手にしたアイリシアが上座に座つた。 そのワインをグラスに注ぐと姿勢を正して宣言した。

「じゃあ…いただきますっ！」

威勢良く手を合わせるとグラスの中身を一気に煽つた。なかなかの呑みっぷりだ。

「くう～効つく～」

…いやいやワインはもう少し味わって飲むものじゃあ……まあいいか早速皿の前のスクランブルエッグを口に運ぶ……うわあ……美味しいなあこれ

「紫うおん食べてりゅ？遠るうおしないで食べいなもよー」

口一杯に頬張りながらイリュが謎の言葉を発した、その口元はハムスター並みに膨れていた……彼女に憧れる男子が見たらドン引き間違いないな……

「…イリュ…下品

アイリスはナイフとフォークを上手く使い分けて皿の上の蒟蒻を綺麗に口に運んで……蒟蒻？！

アイリスの様な西洋風の可憐なお嬢様がナイフとフォークで蒟蒻を酢醤油でお召し上がる姿はちょっとレアなのかも知れない……いや、その食べ方もどうかと……

「仕方ないだる、（手当て）して貰えなかつたし……魔力を補充するには食べないと……」

箸をくわえたまま上目使いにカイルを見た。カイルは意図的に無視していくように見えた……
(手当て)については触れないほうが良さそうだ……

「……自業自得」

何も言わぬカイルに代わり、アイリスが答えた。

「…あん？」

「…危険な事に首を突っ込むべきではないわ」

二人の間に何やら険悪なムードが漂つた……馴れない雰囲気にあたふたしてしまつ……

そんな一人の間に程よく出来上がつた酔っ払いが乱入した。

「ほりほりイリュ、そんな怖い顔してたら紫音が怖がつてご飯食べられないでしょ？」

「…ふ…ふあい」

見ればアイリシアがフォークに突き刺したフランクフルトでイリュの頬をぐりぐりと突いていた。

「ほりアアイリスも食べなさい」

そう言つて田の前のイチゴジャムをスプーンで救いとると器用にもアイリスの蒟蒻の上に投げ落とした。

「ふあ？…蒟蒻……」

感情を出せない筈の彼女からとても残念な気配がした……合掌

「食事の時間は楽しくするものだ！」

と、笑いながら再びグラスのワインを飲み干した。

「……でも、アイリシアさんは料理がお上手なんですね」

場の雰囲気を和ませるために、話題を変えようと話を振つてみた。
瞬間、空気が凍りついた。……あれっ？ なんで？

「……ぶ…ぶはははーつ！ 紫音この凶暴なアリ姉が料理なんか出来る
わけ無いじゃない！ そもそもこのアリ…ぐぶつ」

「ああっ？！ イリュ…誰が凶暴だつて？」

笑うイリュに一層フランクフルトを押し付けるアイリシア……この
人には逆らわないでおこづ。……紫音はそう思うのだった。

「ふつ…がつ…痛いわーー！」

「！…ああっ！ 私のビッグマグナムがつ！」

イリュが反撃に転じてフランクフルトをかじり強引に飲み込んだ。

「……最後の…最後のお楽しみだったのに… イーリ～ユーシ～ヤ～
！」

二人して部屋を走り回り追いかけっこが始まる… あたふたとアイリ
スに助けを求める為に視線を向けると… 何故か恍惚の表情を浮かべ
ていた。何処か遠くを見る目で（ふう…）と、溜め息をついた。

「…アイリス？」

「…見つけた… 至高の味」

「…えつ？ 食べたの？ あなイチゴジャム蒟蒻を… まあ… アイリ

スが幸せならそれでいいか……………。どうすれば良いんだか、この状況

カイルと田代が合つた。

「…………何事も無かつたかの様に食べろ」

…………どうやらそれがこの寮での正しい食事のマナーらしい。

…………それは無理だろ…………

小さく溜め息をついて食べ掛けのサラダを口に運んだ。 ああ……このドレッシング美味しいなあ……

友達宅で食べる初めての朝食はなんとも言えない思い出となつて紫音の記憶に刻まれるのだった。

カノジョノジジョウ

食後、紫音とイリューシャは一人で片付けをしていた。恩返し…とは大袈裟だが、紫音なりの感謝として何かせずにいられなかつた。なので普段もやつてある皿洗いをすることにした。ちなみにイリュは隣で皿拭いている。

「えつ？」飯つてカイルが作つてたの？」

イリュから聞いた事実に危うく皿を落としそうになる……意外だ。

「マスター…カイルは昔レストランで働いた事があるつて言つてた。

「へえ…ところでそのマスターつて何？」

「…マスターは…マスターだよ」

イリュにしては何か歯切れの悪い返事を返してきた。喫茶店のマスター…ではないな…多分

「…ふふふつそれはね…御主人様と肉奴隸の関係なのよつ…

毎晩毎晩あんな事やこんな事をつ…!!」

「教育的指導つ！」

突然現れたアイリシアの爆弾発言に、これまた廊下から現れたカイルが手にしていた新聞紙でその頭を叩いた。

「もう…思いきり叩く事ないじゃない！癖になつたらどうすんのよ！責任とつてよねつ！」

「はいはい…」

二人のやり取りを見ながら隣のイリュに視線を向けると耳まで真っ赤にして俯いていた

。……何だろな、一人供アイリシアさんの発言を肯定も否定もしてなかつたなあ……

「どちらにしても、巻き込んだから事情の説明くらいいしてあげたら？」

「……これ以上は巻き込むつもりは無い、全て忘れて元の生活に戻るのが一番だ」

ソファーに座ると話は終わると言わんばかりに新聞を広げた。

……全て忘れる？……昨日の夜の出来事を？この忌まわしき魔眼をイリュの為に使う決意をした事も？妖魔達の命をこの手で刈り取つた事も？

「……嫌……嫌だよ！忘れるなんて出来ない！」

普段の紫音からは想像が出来ない様な声でテーブルを叩いた。そんな彼女をカイルは刺す様な視線で見つめた。

意思の強さを表す様にそれを真っ向から見つめ返した。この思考には私自身も驚かされた。

いままで 魔眼とは距離を置いて来たつもりだつたが……これまでの人生に後悔をしていたのも事実だった。

それならば……いつそこの魔眼と向き合つてみよう。
それが タベ一晩彼女なりに考え抜いた答えだつた。

「……ついてこ」

やれやれといった様子で新聞をたたむと廊下に出た。紫音は慌ててついてゆく。イリュとアイリシアも続いた。

廊下を渡りきりその先に長い廊下があつた。突き当たりの扉を開くと、そこは道場の様な場所だった。

先に歩いていたカイルは中程で振り返り紫音が来るのを待っていた。

「…先ずはお前の力が見たい」

その言葉に一瞬躊躇つたが、先ほどの決意を思い出し 室内に足を踏み入れた。イリュ達は室外から見物する様だ。

私が此処に来た理由

此処は魔眼の楽園なのか?—

それを確かめる為ならば……私は自ら封印したこの魔眼すら受け入れよう!

昨夜 自分の意思で魔眼を発動させた時から 彼女の意思は強く、成長していた。

「…貴方に手加減は必要ないわね」

「そりだな…全力で来い」

以前の様な躊躇いは無かつた。

私を試すと言うなら試すが良い。

私は貴方を利用して貰う、私と私の魔眼の力を確かめる為の実験をさせて貰うつ!

「…しっかりと痺れさせてあげるんだからつー魔眼発動!」

カノジョノジジョウ2

思考が分割された事を確認するや否や、紫音はチャットルームに飛び込んだ。

「シロン！クロン！力を貸して！」

シロンはリクライニングチェアで読書をしていた。私に気が付くと本を閉じて円卓に着席した。

「べつ……別にあんたなんか待つてたりしないんだからねっ！」

ツンデlena発言と共にゲームをしていたクロンはデータをセーブもせずに電源を落とすと同じ様に着席した。あれは確かに（最後の幻想
13）今度貸して貰お

「状況は把握している……結果から言ってら勝ち皿は無いな」

「いや、シロンやつてみないと解らないぞ？確かにあいつは未知数な部分が多いが、それはこちらも同じだろ？」

「……あのね、勝たなくてもいいの……私の持ってるこの魔眼の力を試したいの」

「……試すと言つても……まあやってみるだけしましょ？つか……」

やれやれといった感じにシロンが机の上のノートパソコンを開いた。クロンはデスクトップのpcで同じく操作を開始した。

「取り敢えず使えそうな魔法をググってみる」

「えつ？……脳内なのに光ファイバー？！」

「いやいや……（魔導検索・ググール）よ……この世界の何処かにある

(魔導クラウド) のデータベースにアクセスしてあらゆる魔法の情報を探し検索出来るのよ… 紫音は考えた事無い？ある日「魔眼」が使える様になつた者が何の知識も無く突然魔法が使えるなんて… 不自然でしょ？」

言われてみれば…… 魔導リングの補助があるとは言え、魔法 자체を教わった訳ではない。魔法授業も使い方や理論を習う事はあっても、その詠唱や発動方法を習う事はない。何故なら皆知っているからだ。

「… そうだな… この世界で解りやすく言つと… ネット通販みたいなものが」「… anazonとか？」

anazonは業界最大のネット通販会社だ、マスコットキャラクターの猫のアニヤ蔵は女子高生に人気がある…… らしい

「ユーザー（魔眼）がネット（魔導クラウド）にアクセスして商品（魔法）を使用する… 使い方はオンラインマーケットで何時でも閲覧可能だ… そのやり取りを無意識のうちにに行つてているから、本人達に自覚は無いけどね」

「普通は魔眼」魔法みたいなイメージが強いから魔導クラウドの存在を知る者は少ないがな… それでも個人がアクセス出来るのはごく一部だ、自分の属性に関係する部分のみだ」

クロンの説明に違和感を感じた。属性＝魔眼色が一般的だが… 私の魔眼は一体どの属性だろうか？

「私達は無属性… 本来はあり得ない事だけど… 今は制限されてる部分もあるけど… 全属性にアクセス可能よ」

私の疑問にシロンが答えた……ああ意識が共有出来るんだっけか

「いわゆるスーパー・ハカーだな」

何かカツコイイかも?

「組合せ次第では無理なものもあるが……単発魔法ならほぼ制限は無い」

「あと、一部指定禁止項目はアクセス出来ないからな」「禁止項目なんか18禁的な?」

「違う違う……俗に言う（禁呪）と（古代魔法）だ……これらは十分に扱える者が少ないからな……世界にダメージを与えるか、使用者がダメージを受けるか……又はその両方か……」

「だから禁止な訳ね」

私の言葉に一人が頷く……でも、そんなに危険なら魔導クラウドから削除出来ないのかな?

「無理だ」

私の疑問にまたもやシロンが速攻で答える……只の独り言だったんだけど……

「そもそも魔導クラウド 자체が個人の所有物なのだ」

「……全ての魔眼の頂点……全にして個、個にして全、原始の魔眼（魔導王の秘宝・パンドラオブエンペラー）」

「お母さん……何だか凄いのが出来ましたよ？　それって偉いの？　じゃあその人に削除してもらえば……」

「…まだ覚醒していないのだ」

……つまり、あなたの机の本棚から勝手に本を借りて読んでるって事?

「…微妙な例えだが…あなたがち間違いではないな」

「…一度使用した魔法には対価として個人の魔力が支払われる、これが魔法に対する消費魔力だ。何度も使用していると熟練度が上がり、無詠唱や消費魔力の軽減が発生する。集められた魔力はそのまま魔導クラウドの運用に使用される、アクセスによる魔力供給はほぼ無限大だ」

つまり利用するほどクラウドは発展して、さらに常連さんは特典サービスがあるって事だね

「…まあそんなものだ」

私の例えにシロンが微妙な顔をした。例え方悪かつたかな?

「…悪い例えだ、それに紫音は理解が早くて助かる」

「じゃあ、そろそろ本題に入るか」

クロンの提示したプランがこのデスクトップに表示される。クロンらしくて攻撃的で面白い

じゃあ、やってみますか。

カノジョノジジョウ

チャットルームでのやり取りが私の思考としてフィードバックされる。

「リーディングスペル
高速詠唱！」

まずはお決まりのこの呪文……授業でも使つから無詠唱で使える強化系シリーズの一つだ。続けて（属性耐性・レジストエレメント）を発動……これからが本番だ。

* * * * *

紫音が戦闘体制に入ったのを確認して、ラプラスに合図を送った。周囲の風景が波紋を打つた様に歪み、無限に広がる荒野に変わった。

「この方が気兼ね無く力を出せるだろ？」

周囲の変化に驚く紫音にそう告げた。

「……氣遣いどいつも……」

やや皮肉めいた返事で返された。
相当力入ってるな……

そう思った瞬間 紫音が動いた。

「……雨の銃弾！」
〔イシケルスピア〕

高速詠唱で繰り出されたのは水系攻撃呪文だった。超高压で圧縮された無数の水の弾丸が正面から襲いかかつた。

カイルは体を捻り着弾点をかわしてゆく……

(…追い込む気か…)

その軌道から自分が追い込まれていると知りながら、紫音の力を見たいが為にあえてその誘いに乗っていた。

「アイシケルスピア
氷結突槍！」

カイルの着地先から無数の氷の槍が突き出てきた。しかしカイルはそれらを掻い潜り、片腕で着地すると両足の回転を利用して、その全てを粉砕した。

安全圏に脱出したと思つたのも束の間、目の前を真空の刃が掠めて
いつた……〔エアロスラッシュ〕
「おおっ！あぶねー」

と言つたもののまだ余裕だつた。
が紫音を見るとそこに姿は無かつた。

「まだまだこれからよ」

背後から声がした　振り返ると右手を降り下ろす紫音が見えた……

…この移動速度……（瞬雷）か？

咄嗟に両腕でガードするが……

「サイクロンボール
暴風球！」

紫音の手に握られていた魔導球が解放された
凄まじい衝撃が体内を駆け巡る。体内に発生した乱気流のせいで、
肺の中の酸素が吐き出され上手く呼吸が出来ないでいた。悲鳴を上げる体を踏ん張り弾き飛ばされる事だけは耐えきった。

しかしそのダメージは深刻でその場から身動きする事が出来ないでいた。

（…なかなかやつてくれるつー…）

次が来る前に回避を……

しかし、それは間に合わなかつた

気が付くと既に両足は地面より現れた鎖に絡め取られていた。

「大地の鎖」
ガイアチーン

呪文の発動と共に無数の鎖が地面から現れカイルの体に巻き付き、
その自由を奪い去った。この連帯感ある攻撃はあらかじめ緻密に計
画されたものだと確信する……？！
頭上に巨大な氷塊が現れる……押し潰す氣かつ？！カイルは慌てて
防御の為の……氷塊が溶け始め滝のように降り注いだ。

（何なんだこの攻撃は！？）

気が付けば紫音は距離を取っていた

…？…まさか…！

「…時間だよ…言ったでしょ？痺れさせてあげるってー！」

カイルの周囲に魔方陣が現れる……時限式のトラップ魔方陣だ……

「…やられたな」

いまいちその使用目的が判らなかつた属性体制は、この雷属性に対するものだつたのだ。

魔方陣が輝き雷が进る。

(放電結界)

微弱な電気を放電し、相手の動きを封じる初步の魔法だつた。

しかし、全身水没し、体は金属でがんじ絡め…今のカイルには防ぐ手立ては無かつた。

激しい雷光が进り彼の体を容赦無く蹂躪した。歯を食い縛り悲鳴を上げない事が唯一の抵抗だつた。

(特殊な魔眼だからと 強力な呪文ばかりを警戒したのが裏目に出来たな…前回のイリュとの戦いでこの結果は予想出来た物だつたが…これで確信できた。おそらく彼女の魔眼は…)

放電が收まり彼を縛る鎖が砂となつて消え去つた。カイルは静かに地面に倒れこむのだった。

カノジョノジジヨウ4

「……………勝つてしまつた」

力は地面に倒れたまま動かない。
まさか！死んだりとか

……まさか！死んだりとか
急に不安になり慌てて駆け寄

「カイル？」

俯せの体を揺すつてみる…… 反応無し
表面がやけに力サカサしてる…… シロンが算出した出力なら命の心配
は無い筈なのに…… その腕を掴み上に向かせようと力を入れた。

ポキッ

えつ？……ポキッつて……その手に掴んだ彼の左腕が付け根から折れていた。

「はわ！」

尻餅をついてしまつた……てか
腰が抜けた。

彼は炭の様にこんがり、真っ黒、ウェルダンもいいとこな状態

紫音は取り乱しオロオロとしている。

周りを見渡しても荒野に一人…

「ヴ ヴ」

変な音を出しながらカイルの体がゆっくり動き出した。

良かつた生きてた。(^o^) o

そんな訳あるかー！

こんなにこんがりな人が生きてる訳無いじやないかつ！ しかも腕
とれてるよつ！ ……あわわわわ

紫音は四つん這いで迫り来るじんがりな同級生から逃げる。振り返るとしつかりと両足でお立ちになつておられました。ふと、目が合つた気がした。いや、目があつた場所を見ただけか。

「... 跟... 音」

やつへじとひがひに近付いてきた！

「めんなさー」「めんなさー」「めんなさー」「めんなさー」

黒我夢中で言ひずり回り波から遠ざかる

何かでおでこをぶつけた

「……痛い」

目を開けると……テーブルの足?
さらに皿線を上げると心配そうに見つめるイリュとアイリスの顔が
見えた。

「大丈夫? 淫い音したけど……」

「…………あれ?」

振り返つて見たがこんがりなカイルは居なかつた。それどころか荒野でもなく普通の道場の中だつた。
テーブルに手を掛けて覗いて見ると、そこにはケーキやクッキー等並べられ優雅なティータイムと化していた。
道場の隅っこに丸テーブルを出してイリュとアイリスでアイリシア…………そしてカイルがお茶を飲んでいた…………カイル?!
私はあわあわとカイルを指差す。

「どうした? まるで幽霊でも見た顔だぞ?」

そんな台詞と共にカップの中身を飲み干した。

ナニナニ? ナニコレ? 状況が飲み込め無いんですけど?!

「……幻術よ……紫音が魔眼を発動した瞬間からかけられたのよ

イリュが状況を理解できない紫音に説明する。

つまり……

* * * * *

「しっかりと痺れさせてあげるんだからっ！魔眼発動！」

紫音の魔眼より一瞬だけ早くカイルの幻術が展開された。

(暗黒幻視)ダークネスイリュージョン闇属性の上位魔法の一つだ。一瞬の隙をついてくる魔法だけに通常は気付かない……魔族であるイリュとアイリスだけが気付いただろ？

その幻術を脳は現実と認識して脳内で実際と同じく体験をする。勿論その情報は術者にも同じ様に伝達されている。

カイルは道場の結界を解除するとさつとテーブルを用意して座り込んだ。

テーブルの中央に視覚水晶を取り出し幻術内の一人の戦いを写し出す。

「なんか喉乾いてきたわね……」

白熱する戦いにアイリシアが呟いた。

「……そうだな……ラプラスー・ティーセットを頼む」

そう言い終わるか否や テーブル上に ティーセットとお菓子達が姿を現した。

「……連帯攻撃が上手いわね」

アイリシアが感心した。目の前のケーキは2個目だった。

「……俺の敗けだな」

ガイアチョーンを受けた辺りでカイルがそう言つた……

「……マスターが？まさか」

「いや、少し紫音を甘く見ていた様だ。魔眼を使用していなかつたから素人だと認識していたのだが……よくよく考えたらイリューシャとの戦闘を考えたら……シリアルナンバー持ちだな」

シリアルナンバー……すなわちチャットルームを保有する可能性があるって事だ。

「魔法自体は余り高いレベルでは無いからな。その組合せのレベルが高い。優秀なナビゲーターがついている証拠だな」

水晶の中ではカイルが地面に倒れ込んだ。本当に紫音が勝つてしまつた。

「さて、天狗にならないように教育しつくか」

「……最近で一番良い笑顔でカイルは言った……いやらしい意味で

* * * * *

「……酷い。私は真剣にやつてたのに」

話を聞き終わった紫音はそう言って紅茶を口に運んだ。両手で飲みながら上田使いにジト田でカイルを見ていた。

「……はつ？俺は『力を見せて貰つ』と言つただけで、戦つとは一言も言つてないが？」

「くつ……確かにその通りだが……何か納得いかないな……」

「まあ、実力は申し分無いな……手を引けと言つても無理みたいだしな……望まずともいづれは巻き込まれる運命だらうし……」

意味不明な発言が多いが、一応は認めて貰つたようだ……しかし彼の次の発言で私は絶句する事になる。

「紫音……直ぐに此処に引っ越せ」

カノジョノジジョウ5

「紫音……直ぐに此処に引っ越せ」

「…………はつ？イキナリそんな事言われ……」

「理由は2つある」

突然の言葉に反論したが遮られた……

彼の目が真剣だつたので大人しく話を聞くことにした。

「一つはその魔眼……何故隻眼なのかは解らないが……隠れ姫ハイドプリンセスについてだ」

「…………？」

私だけでなくイリュとアイリスも驚いた様だ……

「…………隠れ姫……それが……この魔眼の名前？」

「ハツキリとは言い切れないが……恐らく間違いないだろう……前回の戦いといい、属性も魔法レベルも法則を無視している……基本の六大魔眼（火、水、風、土、光、闇）に当てはまらない……多属持ちは他にも居るが、相反する属性を効果に持たせる何て事は普通の保持キヤ者リアでは不可能な芸当だ……水効果を持つ『大地の鎖』（ガイアチューガン）とかの時点で明らかにその存在次元が違う」

「…………？」

ばれていたか……何も知らないイリュ達は頭に？が浮かんでいるが……

「あの大地の鎖ガイアチューは……効果をより得る為に本来土属性の効果を落としつしまう水属性の効果を付与ガしていったんだよ」

再びイリュ達は驚きの表情をみせる……本来、水は土に染み込みその強固さを奪つてしまつ。

「……凄いね……隠れ姫……」

アイリスの言葉に『えへへ』と

照れた笑いを向けた。

隠れ姫……隠れ姫……何度もその名を繰り返す……幼い日より特異な物として扱われてきた私の目……私の魔眼……

突然変異とか……実験対象とか……専門施設に訪れても研究対象としか見られる事しかなくてやがて私はこの眼を人前に晒す事をしなくなつた。

名前があるという事は、ちゃんとした魔眼であり、恥ずべき事ではないという事だ。

「……隠れ姫であるならば……非常に問題だな……」

「…………はい?」

なんでなんで?これで私普通の生活を送る事が出来るのに……

「……今までその魔眼のお陰で並みならぬ苦労と絶望を味わつて来ただろ?……その正体が判つて今は喜びたいだろ?が……問題はこの隠れ姫がレア中のレアだという事だ!」

「……そうね……変わった魔眼の保持者だとは思つていたけど……まさか隠れ姫だなんて……」

イリュもアイリスもやたらと深刻そうな雰囲気だ……何だか心配になつてきた。

「ヤバい魔眼なの?」

「……魔眼の頂点である『魔導王の秘宝』パンダラオブロンベリーその覚醒の鍵を握る一つの

魔眼のうちの一つが『隠れ姫』^{ハイドプリンセス}だと言われている

「魔導王……」

確か、シロンとクロンもそんな話をしていた様な……

「……その様子だとチャットルーム辺りでナビゲーターに話を聞かされたか？」

「？！知ってるの？チャットルーム」

「……上位魔眼や上級悪魔（天使）の中に希にその能力を保有する者がいる……ならば魔導クラウドの話も理解しているな？」

「……魔導王の本棚の事でしょ？」

「……本棚？まあそうとも言えるかもな」

イマイチ話についてこれていないアリシアはテーブルの上のケーキを完食してしまった……イチゴショート欲しかったのにな……

「世界各國が魔導王を入れようとしている……つまり魔導クラウド全ての掌握が狙いだ」

「……何でそんな事……」

「……禁呪や古代魔法……他国を出し抜いて、優位に立ちたいのや……つまり今まで以上にその魔眼の存在を秘密にする必要性は高い……」

……つまり……私は世界から狙われているって事でおK？

「そうだ」

「そうね」

「……そう」

「このクッキー美味しいわね……」

『肯定』

『違いない』

脳内の一人も含めて全員（約一名は除く）が答えてくれた。

「その問題は取り合えず今の所は大丈夫だが……一番厄介なのは二つ目の理由の方だ……」

「一つ目って……まだ何かあるの？」

「……紫音の『結界破り（ブレイクスルー）』についてだ」

……はい？

カノジョノジジョウ6

「……紫音の『結界破り（ブレイクスルー）』についてだ」

「……はい？ なにそれ？」

「へああ……そとか……それで……」

思い当たる節があつたのか、イリュが呻くように言った。

「……しかも本人には自覚が無いしな」

「……？」

「昨夜……あのオフィス街にはイリュの（人避けの結界）があつた……上位魔族のものだから効果は強力だ」

人避けの結界とは本来は指定された場所に何となく行きたくない……ここから離れたい……などの気分によってそいつさせる心理的作用を增幅させる魔法でそれなりに効果はある。

「少なくとも、あのオフィス街に行くがどうか悩んだ筈だ」

「……うん……そう言えば」

「普通なら選ばない、いや選べない……イリュの魔力によつて強制された結界だからな」

「……それを紫音は選んでしまつた」

「……？」

「……実践した方が早いか……ラプラス」

カイルの声に反応して、目の前の皿の上に ショートケーキが突然現れた。

……むつ？！これは…駅前の人気ケーキ店『パーティシール』のイチゴショート（税込450円）…！…しつとりとした生クリームに甘くて大きなイチゴは学園の女生徒の心を掴んで離さない逸品だ。

「取り合えず、食べる」

「…？じゃあ遠慮なく」

「じゃあ私も（^__^）」

紫音と同時にアイリシアも手を伸ばした、お前まだ食べるのかよ…みたいな皆の視線を気にする事も無く…

「あれっ？」

「？」

見るとアイリシアの手が止まっていた。彼女は必死にケーキを掴もうと手を伸ばすが一向に掴める気配がない…

私は普通にケーキを掴んでいるのに…さて、皿に移してつと

…

「…あれっ？」

今度は私の手が動かなくなつた。指を動かしたりは出来るけど…こちらに引っ張る事が出来ない。

人に食べろと言つておきながらなんという仕打ち…

「いりゆうの事だ」

カイルがパチンと指を鳴らすとケーキの回りに淡い光を放つ四角い

結界が現れた。

「これは……『魔寶物庫』魔界でも屈指の結界魔法」
ルビスピック

そう言つてアイリスが右手を宣誓するように小さく掲げると、鋭い氷の爪が現れた。そのまま結界に掛けた突き出すと、結界との接地面で火花を散らして拮抗した。

「魔族が宝を守る為に作り上げた最高の結界の一つだね」

今度はイリュが右手を上げると炎を纏つた爪が現れ結界に突き出すとアイリスと同じ様に結界に阻まれた。結界は双方からの圧力にも傷ひとつつくことなくその場に鎮座していた……私の手……入っているんだけど……

「紫音……つまり前はそこに結界がある事を認識してもしなくてもすり抜けてしまう……しかし出る事は出来ない……理解出来るか?」

イリュ達が手を引くのを確認すると 手についていたスプーンで軽く結界を叩いた。

「^{フレイク}結界解除」

四角い箱は硝子が碎ける様に光の粒子となり霧散した……手はどこも異常はなく普通に動かせることが出来た……アイリシアが無言でケーキを更に運んだのを見て私は取り合えずケーキを皿に移した。

「……これも魔眼の力なの?」

「……いや……違うと思つ……なんせ前例が無いからな……」

……結界をすり抜ける力か……

転校前の学校で、教室に忘れ物をしたので取りに戻つたら、クラスに居た魔眼持ちの男女が慌てていたのを思い出した。

(……？！あれ？？なんでお前いるの？)

(？忘れ物したから……それじゃ）

確かにそんな会話をした様な気がする……今思えば……あの荒て方は普通じゃなかつたな……

彼が聞いてきたのは、何しに来たのかではなく何故結界の中に入れたのか？って事を聞かれていたのか……納得した。

「……でも、何でそれが危険なの？まああんたがイリュとイチャイチヤしてる所に来られたら、お互に氣まずいでしょうけど……」

本日5個田のケーキを完食したアイリシアが疑問を口にした。

「……イチャイチャするの？」

「……しつ……知らないつ」

隣のイリュに聞いてみたが、顔を赤くして呟いていた……ああするのか……

「……それはまだいい方だ、危険区域や犯罪集団の結界にも入り込む可能性がある……自分から危険に飛び込んで行くような物だ、昨夜も危ない目にあつたばかりだろう？」

「うつ……それを言われると確かにと思つてしまつ。」

「何か方法があるかな？」

「……わからない……が……どうにかする為に此処に引っ越せと言つていいなら24時間傍に誰かがついておけるからな」

うづーん……悩み所だなあ……以前からイリュも一緒に住もう!みた
いな事は言っていたから、抵抗は無いんだけど……お父さん達に
なんて説明しよう?

カノジョノジジョウ

「…」なんかしらね
「はい、ありがとうございます」

片付け終わった室内を見てアイリシアが立ち上がった。イリュやア
イリストもそれぞれ体を伸ばしていく……

結論から言おうー……

引っ越しした！

いや……

引っ越しせられたーー！

* * * * *

「……よし、イリュ」
れ持つて今から紫音所に一緒に行つてこゝ

そつ言つてテニスボールみたいな物をイリュに投げて渡した。

「……ああ……魔球ね」

「魔球?」

「ふふつ……見てのお楽しみだよ……行こう

イリュに手を引かれ外に出る。朝は氣にしなかつたがこの辺りは『山の手』と呼ばれる高台のややセレブレティな家が建ち並ぶ地域である。もう一度言おう。セレブレティな地域だ!

周囲を見渡しても、豪邸と呼ぶに相応しいものばかりだ。しかしその豪邸よりも一際田を引く立派な建物……このアイリシアの寮だ。

…………最後のケーキを譲るんじやなかつた。

やや緩やかな坂道を下つた所に警備員の詰所があつた。

「イリュちゃんおはよひ……今日はお友達と一緒にかい?」

詰所の前に立つていたダンディなおじさんが笑顔で声をかけてきた。

「おはよひ! やこますガストンさん……彼女が紫音だよ……今から紫音の家でお楽しみなんだ」

「……そうか……君が噂の……そつか……一人でお楽しみ……羨ま……ゲフ
ンゲフン……はつはつはつ」

「……噂のつてなんだよ……お楽しみつてなんだよ……ちゅつとガ

ストンさん……そんなんに頬を赤らめないで……そんなんに潤んだ瞳で
こっち見ないで！…………あと何で前屈みになつてんだよ！

「……ゲート使「うね」

「……行き先は？」

「……駅前が近いかな？」

「……ふむ……急ぎの様だしわかつた、許可しよう」

「ありがと（^――^）」

イリュはそう言つて詰所の隣の建物に入る。入口でセンサーに魔導リングをかざす。イリュに促され、同じ様にリングをかざした。これでゲートの使用許可を取るらしい。

扉が開いたので中に入ると、ポツンと大きな姿見の様な鏡があり、暗く何も映らない。

学園を中心に市内主要箇所に配置されている『^{ゲート}転移門』である。使い方は簡単で行き先を念じながら潜るだけだ。これは異世界を繋げた技術を小型化した物で非常に便利である。

それ故に、学園長及びユグドラシル都市国家市長は利用を控える様に呼び掛けている。これはあくまでも緊急の移動手段であり、人は本来の生活をするべきと提唱している。

実際はゲート通過には体力、魔力を消費してしまうのでよほどの事がない限り使用する事はない。

そもそも警備員詰所と併設なのは、犯罪行為に利用をさせない為と管理が目的だからだ。

「いくよ？」

イリュが私の手を掴み、ゲートを潜る。

水の中に身を投じる様な感覚、一瞬の浮遊感、次の瞬間には駅前の詰所横のゲート施設内にいた。

壁のセンサーにリングをかざすと、正規の手続きを行った事が確認され、出口専用の扉が開いた。

「……初めてゲートを使ったから……少し感動」

「えっ？ マジで？」

「だって、転入の説明の時に使用は控える様について……」

「……真面目だねえ」

そう言つて私の頬を指で軽く突いた。

少しだけからかわれている様な気がしたが不思議と嫌な気持ちでは無かった。イリュとゆう存在が特別なのか……私が少しづつ変化しているのか……

「ああ……やつぱり紫音の部屋は落ち着くなあ」

イリュは部屋に着くなり、ベッドにダイブした……何だか魔族に対してものイメージを改める必要がありそうだ……

「……おっ」

イリュは突然身を起こし魔導リングを指でなぞつた

「もしもし」

『着いたか？』

リング越しにカイルの声が聞こえた……んっ？……んん～っ？
そんな機能あつたかな？

『……じゅらは何時でもいいぞ』

「了解！直ぐに始めます」

会話を終つすると、魔球を取り出し部屋の中心に配置した。

「探索^{サーチ}…対象固定^{ロックオン}」

イリュの声に反応して球体が開き中からレーザー光線の様な光が幾重にも室内を照らしてゆく……
やがて光が収まると 赤い光の照準が部屋の私物に表示される……

「安心と安全の引っ越し（タンセ・シロツヒ・トモツマ）」

イリュによる詠唱？ が終るとロックオンされていた荷物が全て球体の中に吸い込まれてゆく……
やがて室内は何もない状態になつた。

「……今の何？」

「引っ越し専門の転移魔法…大丈夫だよ！いい仕事するから」

何だか私の中の魔法に対する常識がなんと詰つか……まあいいや

イリュは魔球を回収するとドアにくつ付けた。

「転移門開門^{ゲートオープning}」

そのままドアノブを捻ると……部屋に繋がつた。

「ああ、ひとつだけ付けるか」

向ひの部屋には カイル達と私の部屋を再現した荷物の山があつ

た。

「ひして荷物は私の意思とは関係なく片付けられた。

「…」こんなものかしらね」

「はー、ありがとうございます」

片付け終わった室内を見てアイリシアが立ち上がった。イリュウやア
イリスもそれぞれ体を伸ばしていく……

もう一度結論から言おうつー……

引っ越しした！

いや…

引っ越しせられた…！

カノジョノジジョウ

あえてもう一度言おう……

引っ越しさせられた……

今は再びカイルとイリュとで私の寮を訪れ、管理人さんと交渉をしていた……交渉も何も、もう荷物運んでるじゃん。

「……しかしだね、いきなりそんな事を言われても、親御さんから預かっている大事な娘さんだから……」

管理人さんはなかなか納得はしてくれない……まつ当然だけどね。

「……話は聞かせて貰った……」

此処に来てずっと黙りこんでいたカイルが口を開いた。聞くも何もあんたが張本人だろ……

「……あんた……管理人の鏡だな！その信念たる考え方は素晴らしいぜ……この街に必要な義理と人情を兼ね備えていらっしゃる……」

「見え見えなヨイショだな……と思つたら、管理人さんはまるざらでもない様だ……

「……残念なのはこの建物が老朽化している事ですね……貴方の様な管理人さんがいてこそここまで持ちこたえたのでしょうかね……むしろしつかりとした建物で管理人をするべきではないでしょうか?」

カイルの言葉に管理人は建物を見上げた……

「……私達は此処で沢山の学生や単身者を送り出してきた……言わばみんな子供達の様な存在じゃ……この建物も彼等の思い出が……ん?……なんか話の流れが変わってきた様な……」

「……実はですね……この地区に新しい都市型の独身寮を……」

「……管理人さん……凄く食いついてるよ……」

カイルがこちらを見て目配せした。

イリュが自分の赤いスマホを取り出し電話をかけた。

「……イリューシャです……はい例の件の手配をお願いしますね」

手短に用件だけ、簡潔に話すと再びポケットにしまった。

「……あと5分もしたら終わるよ」

イリュが屈託のない笑顔で微笑んだ……

「……全然話が見えないんだけど……」

「大丈夫……カイルに任せとけば」

「……あれ?」

「今、カイルって言つた……」

「？…うん、言つたけど」

「マスターって呼んでなかつた？」

「…ああ…外出先では名前で呼ぶようにしてる…いつもそうじゅわ
て言われるんだけど…ねついい機会だからそういうみよづかなあ
……」

そう言つてチョーカーのクリスタルを触る……何かカイルと関係あ
るのかな？

そこに一台の黒塗りのセダンがやつて來た…中から一人の黒スース
と一人の女性が降り立つた。なかなかの美人さんだ…
紺のタイトなスカートにジャケット…肩までの服装と同じ紺のシ
ヨートヘアに眼鏡がはまりすぎていて

『いかにも』デキる女性なのだと一目で理解出来た。

「…詳しい話はあちらの担当が……では失礼します」

カイルは丁寧に挨拶をすると、帰るぞとだけ言つて歩き出した。
管理人さんに至つては、ありがたやーと夫婦揃つてカイルに手を合
わせていた…

『紫音ちゃん元氣で!』とか言い出す始末…みんな子供じゃなか
つたのかよつ…まあ…無事に引っ越し出来たみたいだから良い
けど

「相変わらずお見事です、これで6件目ですね…カイル
「グレイス…後は任せる」

横をすり抜け様とするカイルの腕を掴むと自ら唇をカイルの唇に押
し当てる…スッゴい濃厚なヤツ……こつまでやつてんのよつ

!!

タイミングよくイリュがカイルの袖を引っ張った。

「……任されるのであれば報酬を頂かないと……これは手付金代わりです……次こそは今までの報酬も頂けると楽しみにしていますわ」

離れると、眼鏡の縁を正しながらそう言つて管理人さんの所に向かつた。

「……なんだ?」

「……ベシニナンデモゴザイマセン」

私とイリュのジト目に気付いて怪訝な顔をした…………全く……男つて!

「……で、何の話だったの? 引っ越しとは関係なくなくない話みたいだつたけど?」

「まあ引っ越しに関しては問題ない……後は俺の私情だ」

半年後：此処に新しい20階建ての独身寮が出来るとは想像出来なかつたのだが……

「……?」

不意に視線を感じて足を止めた。

「…どしたん?」

それに気付いたイリュも足を止めた……氣のせいかな?

「何でもない……行こ」

再び歩き出す紫音を一匹の黒猫が見つめていた。

カノジョノジジョウ

再び簡易式のゲートを使いアイリシアの寮、『ファルニア』に帰つてきた。

今度は玄関に繋がつたので、普通にただいまと言つて靴を脱いだ。

「お帰りなさい」

振り替えると アイリシアとアイリスが玄関に迎えにきてくれていた。

「…ただいま」

今まで一人の生活が長かつた紫音にとって、出迎えてくれる人がいる事は想像以上に嬉しく感じた。

「ああ…やつぱり紫音だつたんだ」

リビングから出てきた人物がそう言つた。 前田崎 律子だった。

「…どうか…律子も此処に住んでたんだつけ」

「…そつ、よろしくね」

「…わつ、お茶にしましよう、詳しく話を聞かせて頂戴」

アイリシアに促されてリビングに移動する。

無事に話がついた事を報告するとみんな喜んでくれた。

暫くするとカイルは出掛けてくると言つてどこかに言つてしまつた。 律子はこのガールズトークの輪に入り難いのだろうと笑つた。

「……ヒュウド……ラプラスつて？」

此処に来てずっと氣になっていた事を言つてみた。

「……数式の悪魔……ラプラスよ……この建物が外見より中が広いのも、外部とゲートを接続出来るのも……とにかく快適に過ごせるのはラプラスのお陰ね」

「……氣のせいだらうか……辺りから『どやつー』的な氣配が漂つている氣がする……」

「……でも……人前が苦手みたいで姿を見た事は無いのよね~」

「……えつ？アイリシアさん……管理人なのに？」

「おほほほ……色々あるのよ……大人の事情が……」

「……この件には余り触れない方が身の為らしい……」

「そつ……そつ言えば……学園ではカイルってあまり目立たないよね？」
もつ一つの疑問で話を誤魔化してみる。

「……ああ……カイルは目立つのを嫌うから……学園ではわざわざ氣配を消す魔法使つてるし」

「まあ……普通にしてたらクラスの女子が放つておくハズ無いからね」

「……ふーん、なんか訳があるのかなあ？」

「紫音ちゃん、やけに食いつくわね……さては惚れたな？」

「こやつ私は別に……あつー律子、そのパンフレットは学生ギルドの

？」

話の流れが怪しい方向に向いたので咄嗟に話題を変えた。

「ああ…前回の授業は家の方に行つてたから…まだ登録もしていないんだ」

「私も登録しなさいって言われた……」

紫音が転入したときは既に登録の授業が終わっていたのでこのままで、カリキュラムの単位が足りなくなってしまったのだつた。

「本当? ジャあ一緒に行こうよ」

「うん…私も一人だけかと思つて心細かつたんだ…」

「じゃあ、私も付き添うよ…以外にギルドクエストは危険だからね

……

学園の北側にある山脈の麓に学生ギルドの施設がある。

周囲は深い谷に囲まれゲートでのみ行くことが出来る重要な施設の一つだ。

数百人の職員と関係者により厳重に管理されている場所だ。

その正体は異世界の入口である。

元々はゲートの実験施設だったのだが偶然にも未開の異世界と繋がつてしまつた。

そこは『イ・ヴァリース』と呼ばれる世界で一般的に剣と魔法の世界だつた。イ・ヴァリースの東に位置するアルセンブラ王国の田舎町 サマール近郊にゲートが繋がり、今はサマールが拠点となり発展している。

この世界は人間と亜人種が魔物と呼ばれる魔族と戦争を続けていた。

この世界での魔族はイリュやアイリス達とは別の系統らしく、和

平交渉も試みたが失敗に終わっているらしい。

今では王国と同盟を結び軍隊や魔界、天界からの傭兵が戦線に参加しているらしい……

学生ギルドはそんな危険な作業には関わらず、市町村の発展の手伝いや遺跡の探検の手伝いや、近郊に現れる、低級の魔物の討伐など……一種のボランティア活動の様なものだった。

「少しばかり、昔遊んだ『最後の幻想』みたいな展開で剣と魔法で戦闘！！かとドキドキしてたんだけどね」

「……危険が少ない事は良い事です」

少し興奮気味に話す律子をやんわりと諫める様にアイリスが口を開いた。

……アイリスってその優げな見た目通りの平和主義者なんだろうか……
……昨夜もカイル達のしている事には余り賛成をしている様には見えなかつたし……

「じゃあ……カイルと私でサポートするから……アイリスも一応カリキュラムとして受けないといけないからね……」

イリュの提案に渋々と頷いた……むしろ『カイルと一緒に』の部分の割合が大きい気がした。

その後帰宅したカイルが夕食を作り、私とアイリスで手伝いをした。残りのメンバーは

『大変な事になるから』

と、キッチンから追い出されていた。

ひとしきり、賑やかな食事を終えると、アイリシア達が片付けをすると言うので、アイリスとお風呂に入ることにした。

脱衣所で服を脱ぎながら、妙に馴染んでいる自分に驚きつつもつい笑ってしまった。

普通の週末を送る予定が、思わぬ展開になってしまった…………しかし

この状況を嬉しくも思い、楽しいと感じる自分もいる…………変化を求めてここにやって来たのだからこの際このまま過いじてみるのもいいかと思う自分も居た。

ラプラスという不思議な存在に管理された、この素敵な寮での生活に期待と夢に胸を膨らませながら浴室のドアを開けるのだった。

「…………紫音…………遅い…………」

湯槽でぐつたりとしているアイリス

彼女自身……冰雪系の属性の為、長湯は得意ではなかった。

「…………？」

ふと、昨夜も聞いたような紫音の悲鳴が聞こえた……
カイルが入っているであろう二階の浴室から……

イタズラ好きの悪魔の棲む寮の生活に、心配と不安で眠れぬ夜が続
きそうだ……

パネルーリッシュサン

時は授業終了まで遡る……

「じめんね～」

教室のドアが開き、律子が息を切らせてやつてきた。

「ううん、大丈夫だよ」

「早速だけどお願ひね」

連れ立つて教室を後にする……

二人が向かったのは、地下にある 科学準備室だつた。

来週の授業で使う備品を用意して欲しいとイングリッド先生に頼まれたらしい。

よくある事だからいつもはイリュに頼んでいたのだが 今日は重要な用件があり 珍しく先に帰ってしまった。

そこで紫音が頼まれた……のだが……

「……」

職員室を通り過ぎ、地下に降りる階段を一人で降りて行く……

先程まで愉快に話していた律子が急に静かになってしまった……

私……何か変な事言つたのだろうか？

自分の行動や言動には人一倍神経質な方なのだが……

「あの……律子……さん？」

「ひっ！ひゃいっ！」

なんか、変な音が出来ましたよ？

「……えつ、あつなつ何？急に話しかけるからびっくりしたじゃない
……あはつ……あはは……」

そんなに急だったかなあ……まあいいや……

「……えーと……準備室はこの階の下じゃなかつたつ」

「へーへつ……そつねーつかりしてたわつ！」

そつね言つものの、その場から動じつとしない律子……何だか調
子狂うな……

取り合えず行き先は判つてるので階段を降り始めた……

「……つー」

後ろから律子が慌ててついてくる気配がした……からかわれてる
のだろうか？

そんな事を考えていたら急に制服の裾を捕まれた。

「……」

「…………あの…………田が悪くて…………」

振り替えると、律子がおずおずと告げた……眼鏡……してゐるの
に？

取り合えず田的の階に着いたので廊下の電灯のスイッチを入れる…

あれつ？

何度もやっても灯りがつべ」とは無かつた。

「……おかしいなあ……魔道エネルギーのハズだからつかないなんと事

は無いのに……

後から解ったのだが、運悪く、この時はメンテナンスをしていたらしい。

仕方無く非常灯の灯りを頼りに奥の部屋を手探す…………んつ？

前に進めないと思つたら、律子が完全に止まっていた…………

もしかして……

もしかしてだけ……

律子つて……暗いの怖い？

「……大丈夫？」

「だつ 大丈夫つ！……さつと片付けてかつ帰ろつ！」

元気な声とは裏腹に……今にも泣きそうな顔をしていたりする…………

「……紫音……手……繋いでいい？」

「……いこよ……」

ああ……わかつたよ……イリュ……

何故『萌田崎』なのか……

泣きそうな顔で眼鏡から上目遣いにこちらを見る視線は最早反則と言つても過言ではない。

暗い廊下を一人で渡つてゆく……歩き辛いな…… 律子は目を閉じたままだった……こんなんで準備とか出来るの？

「……着いたよ」

「……えつーあつ……うん! そつそつね……早いとにかく付けて……！」

我に返り、慌てて引き戸を開いて中に入り込むと……中から人体模型が飛び出してきた……

律子は声にならない声をあげて、その場にぺたりと座り込んだ。一瞬、氣絶したのかと思つたがそうでは無いらしい。

「一律子つ……？」

「…………腰が…………抜けちゃつた」

瞳に涙を浮かべ　　哀願する様子は普段のクールな律子からは想像出来ないとゆうか……ギャップ萌え？

やがて明かりがついたので、目的の教材を探して（専門書とDVDでした）　イングリッド先生に届けた。

律子は終始私の腕に張り付いたままで先生にも（またか……）と言われていた。

「はい……律子」

「……んつ……ありがと……」

差し出したココアを力なく受け取つた……この状態になると暫くは子供みたいになってしまつらしい……

常に手を繋いで居ないと駄目らしい……昔、妹とよく「ひじで手を繋いでお使いに行ってたなあ……」

「……」めんね……みつともないと見せちゃつて……」

「つづん、気にしないで……苦手なものは誰にでもある事だし……」

「ありがと……」

「」を口にするといい今まで怖がりになつた経緯を話始めた……

小学生の頃に兄の借りてきた ホラー・ビデオが原因でその手のモノが苦手になつた事

責任を感じた兄が（治療）と称して、無理やり墓場に肝試しに連れていかれてトラウマになつた事……

兄……なんとゆづ無茶ぶり！

「……それ、どんな内容だったの？」

ふと、ここまで律子を怯えさせたその ビデオが気になつた。

「……魔物の王子が……三人の家来と一緒に人間界に攻めてくるつゆう……」

んつ？

「家来つて……？」

「……ヴァンパイアと……ワーウルフと……人造生命体……」

んんつ？！

「……ねえ……それって『怪物』……『その名前は言わないでぇー』『じ

や ああ やめん

律子さん ぱねえです。

やがて律子は迎えに来た家の人と帰つていった 一応 皆には内
緒にしてねと言い残して.....

「 帰ろ」

余談だが 準備室の人体模型はイリュが帰る前にわざわざ仕掛けた
みたいでした。

習慣とは恐ろしいもので、何時もと同じ時間に起床してしまった。仕方なく、厨房に向かい朝食でも作ろうつかと試みる……が既にカイルの手によつて、朝食は出来上がりつていた。

「よう、早いな……まだ怒つているのか？」

「……おはよ……別に怒つてなんか……」

昨日紹介してもらえたなかつた ラプラスが再び浴槽の入り口を空間転移で入れ替えたので

なんとなく 気まずい雰囲気だつた。折角忘れかけていたのに……
・ その ………………つまり ………………
そこには盛り付けてあるようなソーセージみたいなの事とか……
・ 忘れよう ………………

「昨日は疲れていたし……湯気で見えなかつたし……なによりお前に強烈なのを一発もらつてるから、記憶に自信がないから……
・ 気にするな」

「……何か引っかかる言い方だけれど……わかつた」

ちなみに、傍にあつた桶を投げつけたのだが見事に彼の頭に直撃して、集まつてきたイリュ達に色々とツッコミをいれられる羽目になつたのだった。

「……何か手伝おうか？」

「……なら、アイリスに付き合つてしまつてくれ」

彼の視線を追うと、テレビの前の一人掛けのソファーにアイリスがちょこんと座りテレビをぼーっと眺めていた。

「おはよ、アイリス
「……おはよ……紫音」

力なく」ちらを見ると、眩いで再び画面を見つめている。何だか昨日より元気ないな……

「何見てたの?」「……
「…今日の…」「やん」……」

見ると朝の情報番組の猫を紹介するコーナーだった。動物好きだなあ……

「……ごめん…今魔力が少ないから…」
「そうなんだ…大丈夫?」
「もうすぐ…補給して貰える」
「すまん、アイリス…待たせたな…」

キッキンからカイルがやつてきた。
ふと、こちらを見て

「……紫音…すまないが、イリュを急いで起こして来てくれないか?
?」

と、言つた……はいはい、わかります……此処に居ない方がいいのですね? 魔眼生活が長いと、色々と氣を使っちゃうから、空気の読める子になっちゃうのよね~……話の流れからして、今回はアイリス回なのね……じゃあ主觀軸も交代しますか……

了解と告げるとリビングを後にした……

紫音がイリュの元に向かつた：

折角話しあげてくれたのに……悪い事をした
全ては忌まわしいこの体の

「アイリス……自分を責めるな」

そんな私の感情を察してか、カイルが頭にチヨップをしてきた……

實際、彼一は命を放つて二のジガム、二の最

実際 徒は命を救われてゐるのだから この身体も心も全てを捧げるつもりなのですが、本人にはその意志が無い様で……少し落ち込んでしまいます……

自分で言へるのもアレですか 私は見た目もフロボーションも戻方は満足して頂けると認識しております。

特にアチラの方に關しましては、わが一族に流れる（淫魔・サキユバス）の血筋は必ずや殿方をめくるめく快樂の樂園へと導く事で
しう……

やはり、残念なのは感情をなかなか表に表現出来ずに本気だと思われない所でしょうか……

「転入初日だし……少し多めにこいつとか……出来るなり……自制してくれよ」

!!

やや逃げ腰の彼の襟首を掴むと思い切り引き寄せ、更に深く、激しく貪つた……うふふ……苦しそうね……カイル……素敵よ、貴方のこの、^{ライフエナジー}生命力は、この世の中のどんなモノよりも素晴らしいし、私を満たしてくれる……さあ一つになりますよ……私の中で永遠に……

「……ぶはっ……しつ……紫音一早く……イリコをつ……」

アイリスの頭を押さえつけられようとしたが、既に体内で魔力生成が始まっているアイリスから逃れることは困難であった……再びカイルの頭を捕らえるとその脣に口の唇をあてがつた……

今　この場に紫音とイリコがやって来るのを切実に願つた……この状況では　また紫音に白い眼で見られそうだがこちちは命がかかっているのだ。

この行為はその辺の恋人達の行なう（愛の接吻）などでは無い
（生命力吸収）
命がけの（死の接吻）であった。

「?何か聞こえた気がしたけど……気のせいかな」

全く空気が読めていないとは露知らず、イリュの部屋で眠るイリュのほっぺを弄んでいた。

さて、気を取り直して……ふと、イリュと田が合つた。瞬間、イリュに抱きしめられベッドの中に引き込まれる。

「ああっーついに私の思いに応えてくれたのね！ 紫音！」

「わわー・・・違つーぜやー！」

瞬時にマウントポジションを奪われイリュの両手の指がわきわきといやらしく動いたら……されば……ヤバいつ！

「ちょっとターンマー！」

「……大丈夫……優しくしてあげるから」

「あつ……あのねっカイルが起こして来いって……アイリスの魔力が少ないからってーーー！」

「……何ですつて？！」

イリュの顔から笑みが消えた

と、同時にベットの横にゲートが開かれた……向こうはリビングでソファーの上では同じようにアイリスがマウントポジションでカイルと熱い接吻をしている様に……見えた。

「インパクト
衝撃！」

イリュの行動は素早かつた。

左手をアイリスに向け、瞬時に衝撃の呪文でアイリス弾き飛ばした……が、彼女は即座に障壁でその衝撃を相殺した。と、同時にイリュはゲートからリビングに跳躍しアイリスの上に馬乗りになり制圧した。

そこでゲートは閉じてしまった。

「…………つー？」

事態についていけない紫音は我に返ると慌ててリビングに向かった。

* * * * *

突然ゲートが開かれたのには驚いた。

恐らく（ラプラス）がカイルの危険を察知してイリュを呼び寄せたのでしよう。

不意を突かれカイルと引き離されてしまい、イリュに馬乗りにされてますが、今の私なら問題なく排除出来るでしょう。

右手にゅっくりと魔力を集めイリュに向けて……

「アイリス……負けるな……」

イリュの言葉に動きを止めてしまいました……一体私が何に負けると……

「…」のままではカイルが危険だ！」

その言葉に私は意識を取り戻しました。

彼から流れ込む生命力は余りにも甘美で心地好いモノなのです……それは私の中に魔力の発生を促すと共に、眠っていた私のなかの眠っている魔性を呼び覚ましてしまいます。

それは貪欲周りの全てを滅ぼすまで止まる事は無いでしょう……しかし、彼は特別です、この命と引き換えにしても失ってはいけない存在なのです……

直ぐに私はイリュの下から這い出すと彼の元に駆けつけました……

「…やり過ぎだつてーの……」

彼は力なく笑いました……

その唇に再び唇を押しあて彼から奪った生命力を必要な分だけを残し送り返しました。

「リバースフォース
生命力返還」

サキュバスの血筋の者だけが使える、蘇生術です。やがて彼はゆっくりと起き上りました。

「…危なかつたな…」

「…」「めん…なさい…」

「だから、自分を責めるなつて…」

私が暴走した時はいつもそう言つて頭を撫でてくれる……ああ……良かつた……この人の命を奪わなくて……

良かつた……イリュが止めてくれて……

私は悪魔だけど神に感謝した。

私の病気

(先天性魔素生成器官疾患)

こちらの世界で言えばこんな病名だらうか？魔族は体内に魔素を生成する器官を持っている。それは本人のみに適正した魔素でこれがないとどんな強い魔族でも生きてはいけない。

アイリスは生まれつきこの生成器官に異常があつた。魔素を生成していなかつたのだ。彼女の両親は生命の危機に瀕した我が子を救う為に……プランA、自らの魔素を移植する事を選んだ。移植と言つても手術をするわけではない。相手の体に触れて、自分の魔素を相手に送るだけ良い。しかしそれが大変に困難な作業なのだ。適性検査の結果、異性である彼女の父と兄は不適合とされ、母と二人の姉が候補に選ばれた。まだ幼い一人の姉の事を考え、母が一人で彼女の看病を行つた。

一日数時間で順調にアイリスは 生命の危機から救われる。周囲が安堵 したのも束の間 彼女の母が疲労の為に倒れてしまつた。親子とはいえ 魔素の成分誤差を5%未満に抑えなければ激しい拒絶反応を起こしてしまう。

二人の姉は母と妹の為に交代で魔素の移植を続けた。

二人の姉と母からの移植はアイリスを再び死の縁から助け出すと同時に、本来は眠り続ける筈だつた力までも目覚めさせてしまつた……それは伝説に名を残す恐るべき存在……その力は全ての生命を奪い去り動く物一つ無い世界を作り出す存在……しかし、誰一人として気が付かなかつた……ただ、アイリス一人を除いて。

それからの彼女は頑なに移植を嫌つた。自分の命が危ういとしても、母と姉達を自分の手により殺してしまつ事を恐れたからだ。確立されていなかつた、投薬治療薬や新しい術式の治癒魔法 等の被験者

に進んで名乗りを挙げた……副作用で髪の色が変色したり、激痛に耐える日々が続いた……

ある時、人間界に新しい治療法があると聞き、父親と一緒に一番目の姉と一緒に人間界にやってきたのだった。
治療出来ると期待に胸を膨らませてー。

「キノソラベ 3

「……それで……治療出来たの？」

今はアイリシアとカイルを除いた女性陣が朝食を摂っていた。今朝の食事もそれはそれは大変に美味でしたとも……

あの後、駆け付けた紫音によつて、カイルは予想どおりにアイリスと抱き合ひ姿を白い目で見られ、「変態」と言われた後、少し休むと言い残し部屋に戻つていった……心なしか落ち込んでいるようにも見えた。アイリシアは一升瓶を抱えて寝ていたのでそのまま放置する事にした。

「……治療は出来なかつたの……でも……」

律子の問いにアイリスは静かに答えた。……カイルから供給された魔力により、問題なく会話が出来るだけに回復はしていた。強力な魔法を連発しなければ、2日、3日は大丈夫だと本人は言つ。

「でも……私はそこで、カイルと出合つたの」

* * * * *

初めての人間界にアイリスは心踊つていた。

「アイリスー見てござらん！」

5つ上の姉アネモネも普段から活発だつたが、この状況に一層テンションションが上がっていた。

今一人が居るのは人間界の巨大な病院施設内だつた。魔界とは違うもの全てに感動し、心躍らせていた。

「…姉さま…どこ?」

結果、一人興奮したアネモネはさうと何処かに行つてしまい、ここに立派な迷子が誕生した。

一人、とぼとぼと歩いた先には緑の中庭が広がっていた。そこは天窓に覆われており、その中央に一人の少年が座り込んでいた。彼は目を閉じて天を仰いでいた。彼の場所にだけ日の光が差し込み、まるで祝福を受ける聖人の様だった。その姿にアイリスは時間が経つのも忘れ、見入っていた。

「…少しだにおいでよ…」

彼は目を開けるとアイリスの方を見てそう声をかけた。

感情を表さない彼女はその存在感……気配すらも希薄でよく家族を驚かせていた。

『…ああっ！…アイリス…驚いた、そこにいたのね』

…と

彼はいつ、その存在に気が付いたのだろう？……少し少年に興味が湧いた。

いそいそと彼の元に来ると、その隣に腰を下ろした。

「僕はカイル…君は？」

「…アイリス…」

「うん……いい名前だね……その髪の色も素敵だ

「……私は……この髪は……嫌い……」

母親と同じ翠色だったのに……投薬治療の副作用だと、私の病気は特殊なのだと、今日此処に来た理由も、彼に話した。

彼はただ、静かに黙つてそれは聞いてくれた。ただ、黙々と何の感情も無い私の話をずっと聞いてくれた。家族以外の人とこんなに永く話すのは初めてだった。

不意に彼の手が頭に乗せられた……そして母のように優しく撫でられた。

「アイリスは優しいね……治療を受けているのも、全て家族を守る為だろ?」

思わず彼を見た……何故判つたのだろう?そんな話は一言も話していなかつたのだが……

これを言い当てたのは、母に続いて一人目だ。

「君は色々な物を犠牲にしてでも家族を守りつとしている……それがその髪の色だから……やはり君の髪は素敵だよ」

「…………ありがとう」

今 私はどんな顔をしているのだらう?この胸の奥が温かいのは何故だらう?

それが『喜び』だと知るのはもつ少し先の話だった。

「……ああ……魔力が低下してゐるね……『めんね 無理をさせやつたね』

そういうつて自分の手のひらに私の手を重ねた……

その手から、温かな波動を感じた…………魔素だ。

それは母や姉達が提供してくれる物よりも遙かに純度が高く、本来

アイリス自身が自身で生成するはずの魔素と酷似していた。

それはカイル自身の体内魔力を、アイリスの持つ魔力に『変換

コンバート

『してからこちらに送り込んでいた。

通常、血縁者ならまだしも、赤の他人の魔素にコンバートすることなど天文学的数値に等しい確率であった。

「…………あなた…………何者」

「カイル・アルヴァーレル…………お節介者さ」

* * * * *

「さて……盛り上がっている所で悪いが、そろそろ時間だぞ」

カイルの言葉に全員ハツとする……不味いっ！！

相変わらず、一升瓶を抱えたまま、寝ぼけ眼のアイリシアに見送られ慌てて学園に向かうのだった。

イリュから聞いていた通りにアイリスは同じクラスになった。

クラスの男子は異常に大騒ぎして、女子は人形の様なアイリスを取り囲んで質問責めにした……

『無愛想に見えるから……』

学園に入る前に彼女が懸念している事を口にした。その姿が転校初日の私の姿を思い出させた。

「大丈夫だよっアイリスはいい子だもん！ 友達沢山出来るからっ！」

私は彼女の手を握りしめてそう激励した。アイリスは小さく頷いてそのまま校舎に入つていった。

事情を知るイングリッドの計らいで、アイリスは私の隣の席だ。近くにはイリュや律子も居るし、肝心のカイルは余りにも地味で気が付かなかつたがイリュの前の席だった……

カイルの存在感の無さはそれはもう半端無いモノだ……認識している私達ですらその存在を忘れそうになる。

沢山の人だからも徐々にまばらになり、昼休みにはいつも平静を取り戻した。

休み時間に購買に行こうとするイリュをアイリスが呼び止めた。

「……これ……」

彼女の魔空間バッグから重箱が出てきた……ふたを開けると朝の残りが綺麗に 盛り付けられていた。

「カイルに渡された」

「いつの間に……」

振り返つたがその本人の姿は無かつた。教室内にもその姿は無かつた……

廊下から西園寺達の馬鹿な笑いが聞こえて来る…… 少しだけ心配になりイリュを見た。彼女も同じ事を考えて居たようで怪訝な顔をしていた……

二人して廊下を覗いて見ると、案の定、西園寺ともう名前すら思い出せない取り巻き一人がカイルに因縁をつけていた……しかしながらカイルは全く動じる事無く、めんどくさそうにしていた……

この件も昨日、気になつたので一応言つてみたのだが

『えつ？俺いじめられてたの？』

との返答が返ってきたのでそれ以上は何も言わなかつたのだが……あんたは良くても見ているこっちが気分悪いのよっ！

身を乗り出すとイリュに止められた。

「私が行く」

そう言い残して颯爽とカイルの元に歩いて行く。

「西園寺！」

「……イリューシャ」

んつ？　西園寺の態度が少し気になつたが行く末を見守る。

「ザヤー ザヤー 驚いでんじやないよー 五月蠅くてメシ所じやないよ
つー」

「…わつ悪りい…」

なんか… アイツ顔赤いよ? …… まむか……

「…あのつ…この間の返事を…」

「何度も言つてるけど、私はあんたと付き合つ氣なんかこれっぽつ
ちも無いから、あんたと付き合つくらいなら…… そうね、まだこの
カイルの方が全然マジだわつ！」

そう言つて隣にいたカイルの頭を抱き締めた…… 胸に顔が埋まつて
んぞ… オイ！

「…’う…’う…’う… カイル！覚えてろよつーうわああああああ
！」

さつきよりも更に真っ赤な顔をすると、カイルを凄い形相で睨み付
け、泣きながら走り去つていつた…… 意外にピュアな人だったみたい
だ……

「…… オイ……」

「…あはは…」めん

この展開にイリュは笑うしかなかつた。彼を颯爽と救い出す筈が、
何故か余計に恨みを買つ羽目になるなんて……

「… イリュの奴いいな…」

「……えつ？」

「……あつ？……あつ……違つの……。」

律子の唇きに思わず反応してしまつたが、彼女の反応もバレバレなものだつた……

「……私もカイルを抱つこしたい……」

「……」

アイリスに関してはもう何も言わないでおこう……うん、わかります、私は空氣の読める娘だから……

前略、お母さん、この物語は冒険と戦いのアクション活劇だと思つてましたが、どうやら今はラブロメ要素が高いみたいですね……。

一日が終わり部屋に帰ってきた。そのままベッドに倒れ込む……
アイリスの学園生活も何事も無く、数日が経過した。クラスの皆も
アイリスの態度には戸惑いながらも、理解を示してくれたみたいで、
いつも彼女の周りには人だかりが出来ていた……非常に喜ばしい事
だ。

西園寺もあれからイリュの目を気にしてか、余りカイルにちよっかいを出さない様に感じたが、何か企んでいそうで要注意だ。
そのカイルだが、学園での存在感は皆無に等しい。たまに、授業に出でていなかつたり、途中抜け出したりするのだが、認識している私達以外はまったくと言って良いほど気がつかない。

それよりも……今夜もカイルとイリュ外出する様だ……例の魔方陣を見つけては破壊する……その行為を繰り返していた。
一体、誰が何の目的で この魔方陣を仕掛けているのか依然として不明のままだつた。

同行を申し出ようとしたが、言つ前から断られた。

『…………よく考えたら謎の爆発騒ぎって、カイル達の事じゃないの?』

先日の自分も関わった一件も、翌日には謎の爆発だと騒がれていた

つまり……イリュの暴走?

あの時の状況を思いだし身震いする……イリュは大丈夫だろうか?
カイルの方は大丈夫な気がするから、心配はしなくていいだろう

……

「……「うじうじ考へても始まらないか…… わてつヒー。」

べつどから勢いよく跳ね起きると食事の支度をするために、階下に向かうのだった……

食事の片付けをしていると二人が帰ってきた…… こつにも増してボロボロだ……

「今夜は一ヶ所に仕掛けられていた……」

ソファーに腰を降ろすと深くため息をついた。召喚されたのはガーゴイルだつたらしい。

古代の翼竜のような翼に醜悪なその見た目は侵入者を阻む、トラップとして使役される事が多い。

同じく、ソファーにてぐつたりとしているイリュを見ればどのような戦いが繰り広げられたのか想像もつかないでいた。

「大丈夫？」

「……んっ」

イリュにコップを差し出すと中の水をあつと言つ間に飲み干した。
……怪我はしていない様だけど、魔力の消耗が激しい様だった。

「……そろそろ一人じゃキツいんじゃない？」

「……ラムゼスに話をしておいてくれ……」

アイリシアの間にそれだけ答えると、イリュを連れて上がりつた。

「……」
「……」
「……」
「……？」

アイリシア、アイリス、律子はそれぞれに複雑な表情でそれを見送つた。

その光景を見て、首を傾げるしかなかつた。

「……そろそろ休みましょつか……」
「……そうね……紫音……今夜は私のところに来ない？」
「えつ……うん……いいけど……」
「……じゃあ……私も……」

律子の不自然な申し出に疑問を感じながらも、アイリスも加わった事により承諾するのだった。ちなみにアイリシアさんも参加を希望したがすぐにお酒を飲んで寝てしまつ事を理由に断られていた。

この誘いは私の為であつたと、後日嫌とゆう程に思い知らされるのだった。

「おひはよー」

翌朝のイリュはすこぶる元気だった。それどころか、顔色も良く、肌の艶も潤いも、ふるんふるんのぴちぴちであった。昨夜一体何があったの？

その反面、アイリスも律子も黙々と食事を進めていた。何か怖いよ二人とも？

「…タベはお楽しみでしたな！曰那あ……」

キッチンではほろ酔のアイリシアがカイルにやたらと絡んでいた。しか扱いは其なりに慣れている様で適当にあしらっていた。

「…イリュ…今日は遅れていくと伝えてくれ…」

そう言つて、それぞれの弁当箱をカウンターに置いた。

「それと…紫音、これをつけておけ

ひとつの中輪を投げて寄越した。

シルバーの様だが内部には紋章の様な文字が刻印されている点を除けば、至って普通の中輪だった

「…」これは？

「幻視の指輪…お前の『隠れ姫』を周りからは違う色として認識さ

せるモノだ…」「

* * * * *

右手の薬指にはめられた指輪を見ながら朝のやり取りを思い出した。

あの後魔眼を発動したらやはり瞳の色は淡い緑色をしていた。

チャットルームの一人にも確認したが、何の支障もないとの事だつた……但し、魔導クラウドで風の魔法が優先的に選択、検索されるらしい。

「紫音……来るよ」

イリュの声に現実に引き戻される……

今は特別施設で対抗戦に向けての実習と言う名のサバイバルが行われていた……今は相性の良いチーム作りの為の模擬戦闘を行つていた。

前を向くと、同じクラスの木村真紀さんと沢村慎吾君のペアが相手だった。

彼女の属性は水、彼は土とアナライズされた。

開始の合図に、先に動いたのは木村真紀だった。

「水蛇の巣！」
スネイクネスト

地面から逆再生の様に水流が現れ、私達を取り囲んだ。結界内に閉じ込める束縛系の魔法……

そこにもう一人の対戦相手、沢村慎吾が動いた。

最近、女子の話題にその名前を良く聞く。別に普通のメガネ君だ……話題になる理由がイケメンでは無いらしい……

イケメンと考えて、ふと、カイルを連想してしまった。いやつ……違うのよ？！私の知っている男性はアイツしか知らないからつ……

：

『へえ～』

『ほあ～』

脳内からシロンとクロノンの間の抜けた声が響いた。

くく…………もつこいや

弁解を諦め意識を浮上させる。

沢村慎吾のもうひとつ可能性……凄腕の魔眼使いの可能性だつ。

「よお～っしー真紀ちゅわん、いい仕事するね～っー君、凄ついー
ねつ！」

凄腕の魔眼……

慎吾は指で真紀ちゅわんをビシッと指差した。真紀ちゅわん苦笑い……

いやいや……見た目で判断してはいけない……

「さあ～いいかい？次は僕の凄ついー魔法がBINBINいつち
やつよーー！」

凄腕の……

今度は私達を指差した……うわっ！鳥肌でたつ！

やがて彼が身構えるのを見て警戒する……

やはり凄い能力を隠して……

「君、かわいい～ねっ！（魅了）」

ローラングルから ピストルを真似た指でこちらを指差した……
： 私達はおろか、観戦していた生徒すら一言も発する事が出来なかつた。

こいつ チヤラいな
大体、こんな魅了チャームがかかるわけ……

突然周囲を囲つていた水の結界が解け落ちた……真紀ちゃんを見る
とうつとりとした眼差しで慎吾を見ていた……
応援席の女子も何人かそんな表情をしていた……
すんません……あれでも立派な魔法だつたのですね。

紫音は勘違いをしていた。慎吾の魔法がチヤラいのではない、自分達のレジスト（耐久）能力が高すぎるのだ。

サキュバスの因子を持つアイリスとイリュはその本能から常に相手を魅了するための微量のフェロモン粒子を放出し続けている。その中で生活している紫音には知らず知らずの内に吸収し内部に蓄積されていた。

その結果、クラスの三大美女として男子の間で絶大な人気を誇つて いるのだが、本人は全く気付いていながつたりする。
もうひとつは『歩くフェロモン』のカイルを毎日見てるので意

外に目が肥えてしまつてたりする。

「君たち皆僕の彼女だゾーつ！」

「そんなわけあるかあ～つ！」

イリュの飛び蹴りが炸裂した

慎吾はきりもみ回転しながら地面を 転がつた。

「踊れ！炎の舞踏曲『フルツ
ブレイズダンサー舞踏炎舞』！」

イリュの手から放たれた炎の渦はゆっくりと回転しながらその速度を上げて行く……それを見た紫音はシロンからの指示で自らの魔法をそれに重ねた

「舞え！風の渦よ！『ストーヴランガ
ブランジング風雷陣』」

紫音から放たれた風は唸り、逆巻き、イリュの炎を巻き込み、巨大な炎の竜巻となり、慎吾を巻き込み大地を蹂躪する……

「ぱつ…ぽいぽひー……」

慎吾は謎の言葉を残し炎の渦の中に姿を消した……

「…マジですか……殺しはまずいよ……紫音……イリュ……」

眼前の巨大な炎の竜巻に圧倒される……二人の放った魔法は初級レベルのものだが、お互いの特性を補い威力が増していく……炎は風を生み、風は炎を煽る。

紫音とイリュも自らの生み出した力に呆然としてしまう程だった

『エンチャントマジックワイングトルネード 合成魔法轟炎竜巻』

紫音の意識にクロンが語りかけた。

炎が霧散すると慎吾が姿を表した……昔TVで見た爆発コントラストみたいな頭をして口から煙を吐いてその場に倒れこんだ……

「…君…強い…」

謎の言葉を残して。

「…ふむ」

観覧席から眺めていたイングリッドは感心した……なるほど……ア
イツが薦めるのも窺える……

手元で遊ぶペンの動きを止めると、書類に走り書きをする……対抗
戦のメンバー候補中に紫音のな名が書き込まれていた。そして不
適な笑みを浮かべる……これなら今年は……勝てる!!

興奮した律子達が駆け寄つてきてイリュと一人で揉みくちゃにされ
そうになつた……だから……
だから気が付かなかつたんだ……

観覧席の壁にもたれ掛かるアイリスがそのまま崩れ落ちる姿を……

…

「…………」

気がつくとベッドに寝かされていた……どうやら保健室らしい。あいまいな記憶を辿る…………

紫音とイリュの戦闘訓練の観戦している最中に 朝から我慢していた魔力不足がピークに達していた。

昨夜はイリュの『手当て』の為 カイルに頼むことが出来なかつた

今朝は今朝で何故かあの場でカイルに頼む事に気が引けた。アイリスにとって理解できない複雑な心理状態になつたらしい。

それ以前に私は『手当て』が嫌いだ
しかし、私自身『手当て』を受けている存在
私にイリュをどひーひー言つ資格は無い。

「気がついた？」

普段聞きなれぬ声……しかしアイリスにとつては忘れる筈の無い声

ゆうぐりと体を起こしその名を呼んだ。

「アネモネお姉様……」

アイリスの居るベッドの足元のカーテンの向こうに立つ女性はアイリスに良く似た顔立ちで透き通る様な蒼の色の銀髪は彼女の着ている白衣にとても似合っていた……

彼女はアイリスの姉の一人、アネモネ・H・ギゼルヴァルトであつ

た。

「アイリス……久しぶりつ」

傍に歩み寄ると、優しくアイリスの頭を撫でた。……
こうされると彼女の心はほわっと暖かいものを感じる。……これが『喜び』なのだろうか？……微かながらに感情を感じ取れるという事は、少なからず魔力が移植され、私の中で魔力が精製されているという事だ。

「……姉様が移植を？」

「いや……カイルだ……呼びつけて搾り取つてやつたよアハハハハ」

豪快に笑う姉の姿は彼女が代わり無いことを表している。……少しカイルが心配になつた。

「冗談だよ……隣のベッドで寝てるよ……」

私の僅かな表情の変化を感じ取ってくれるのは流石に姉だという所でしょうか？……特にアネモネお姉様には一番お世話になつていてる気がします……

「……ところで……お姉様は何故此処に？」

「……えつ？……聞いてない？」

アネモネは少し悲しそうな顔をして髪の毛を搔きむしった。

「……イリットの仕業か……覚えとけよ~昨日からこの保健医になりました~」

イリットとはイングリッドの愛称でアネモネとは魔界の学院でクラスマイトだった……しかしアネモネは将来、魔界軍事本部での働きたいという希望を叶える為、今も異世界との交流…特に天界との交流に反対する古い思想の国々との争いの最前線に赴いていたはずだが……

「……姉様……軍隊は……それに保健……闇医者？」

「……ちゃんと勉強してたよ？……ほんとだよっ？」

急に焦りの色を見せる……昔から勉強と名の付くものが嫌いだったと改めて思う。

そんな姉が戦いに身を投じたのは、やはり7年前の『あの事件』がきっかけなのだろう……

「もちろん部隊に参加して反乱部隊の鎮圧とか殲滅とか惨殺とか色々と経験したよ……でもね最後に所属した部隊が凄く良かったの……」

……

物騒な話が飛び出したけど……聞かなかつた事にした方が良いのかな？

「そこは医療部隊でね、毎日沢山の兵士や一般人が負傷して担ぎ込まれてたの……そこに凄腕の『^{ヒーラー}癒手』が居てね……その人の思想に感化されちゃったの……」

……飽きっぽい所も昔のままだなあ……姉が身近にいる事を改めて認識した。

でもそれらが全て私の為なのだと知っている……知つていいからこそ、無理をする姉を止めることが出来ないでいた。戦いに身を投

じたのは私を護る為……医療を学んだのも私の病を治す為……兄からはそう聞かされた。

「…………？」

ふと、カイルが寝ているベッドとは反対のベッドから呻き声が聞こえた気がした……

「あつ…………忘れてた、いやいやこの娘ったら結界で万全の『手当て』の最中に入つて来ちゃつてわあ…………反対勢力の刺客かもしんないから捕まえちやつたのよ」

そう言いながらカーテンを引き開ける……

そこには憐れにも後ろ手に縛られタオルで口を塞がれ、ベッドの上でただ身をよじる事しか出来ない紫音の姿があつた。

「……いやあ～」めんねえ～アイリスの友達にこんな事しちゃって…
「……そつ説明していたのに問答無用で縛り上げられたのですが…
…」

戒めを解かれた腕をさすりながらジト目で睨む……が アネモネは悪びれた風もなく笑って誤魔化している…

「……紫音！」めんなさい……驚いたでしょ？
「えつ……ああ……そつ……そつね……アハハ」

アイリスの言つていることが先程の『手当』の事だとわかり内心焦つた。

一時間前

実習が終わり着替えると、イリュと律子に保健室に連れて行かれた
アイリスの元にやつて来た…

「失礼しま……す」

ゆっくりとドアを開け中に入るがイリュ達の姿は無かつた…
何処かですれ違つたのだろうか？

「……ん……んぐ……」

カーテンで仕切られたベッドからアイリスの呻き声が聞こえた……
具合が悪いのだろうか？

アイリスの着替えを近くの籠に置くとゆっくりとカーテンをひいた。

「……アイリス……！」

そこには上半身の白い肌を惜し気もなく晒し、ひたすら相手の唇に貪りつくアイリスの姿があつた……相手は……やはりカイルだった。

紫音は余りの衝撃にその場にへなへなとへたりこんだ。

それに気付いたアイリスはその行為を止める事もなく、ただ妖艶な笑みを返した。

「あらあら……迷子の子猫ちゃん

「……えつ？あのっ……私はアイリスの……あれっ？」

いつの間にか背後に白衣の女性が立つており、あつとこう間に縛り上げられ隣のベッドに放り込まれた。

「何処の組織の使いかしらないけど、後でたっぷり可愛がつてあげるわ」

はわわっ！鳥肌がゾクゾクきました……大変です！私の貞操の危機ですよっ！隣のベッドでは同級生で同じ下宿の同居人のお盛んな行為が絶賛進行中ですぅー！（ノゝゝ）

『……紫音……落ち着け、良く見なさい』

脳内からのシロンの声に我に返る。

見ろと言われても……そんな度胸は無いので……こっそりと隣をチラ見する……

あれつ？

ふと違和感に気付く。

私も年頃の娘ですから……こういう行為には人並みに興味はありますよ？

夢見る年頃ですから…………でも……

この一人の行為は何か違う気がする……何故カイルはあんなに苦し

そうなのだろう？

……何故アイリスは……そんな彼を逃がすまいと一層激しく貪るのだ

ろうか？

(……！まさか……これが……あの大人のキス？！)

『違つわつ！』

鋭いクロンのツッコミが入る……いいタイミングだ。

『これは……生命力^{ナノジードライン}吸収だ』

(……そうか……アイリスの言つていた『彼からの魔素の提供』とはこの事なのか……)

『感心している場合ではないぞ！明かな過剰攝取だ……あいつ死ぬぞ？』

その言葉にぎょっとする……見るとカイルの口から光の粒子がアイリスの口に吸い上げられている……あれが生命の光だとシロンは言う。

「……アイリス…それ以上は…っ！」

その行為を見ていたアネモネが声をかけたと同時にアイリスから禍々しい魔力の波動が室内を制圧した。

その変化は彼女の体にも見られた。

その蒼く透き通った髪は根本からじわじわと赤みがかかり、紫色に変化してゆく……目尻はつり上がり、あの柔らかい雰囲気は完全に失われていた。

「……おやおや…誰かと思えれば久しいわね、アネモネ」

「……やはりお前か…モネリス」

強烈な魔力の波動の中　体を動かすのがやつとの状態でアネモネが問いかけた。

既に紫音は意識を保つことは出来ず、シロンとクロンの助けを借りて、事の顛末をチャットルームから見守っていた。

「……いつか貴女とは決着を着けないと困ると思っていたのよ…」

「…出来るのか？お前に？お前の魔力から生まれた私を倒せると…？」

「？」

……幼き日に行つた魔素の供給は本人達も知らない内に劇的な変化を起こしていた。

アネモネから日々移植された魔素の適性数値誤差は2%だった。この数値はアイリスに軽い拒絶反応を起こしながらも彼女に吸収される……筈だった。

アイリスの本来持つ魔力の影響を受けながら適性化されつつも異なる存在として体内に蓄積されていった……それはいすれは体外に異物として何らかの形で放出されるか、時間をかけてアイリスに吸収される筈だった。

あの日、カイルと触れ合い、彼から流れ込む純粹な魔素はその物
体に変化を起こした。

……此処は何処だ？
私は何だ？

それはアイリスでもなくアネモネでもない全く別の存在……『自我』
が芽生えてしまったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1363v/>

魔眼の使徒

2012年1月13日19時39分発行